文集

（頒布版）

捜真女学校

2021

はじめに

島名恭子

五年前から「国語表現」という中学一年生の科目を担当している。多岐にわたる国語の学びのうち、「話すこと」と「聞くこと」に重点をおいて学ぶ科目である。

その授業で中一の生徒と「言葉」の力や働きについて学びながら、私はふと考える。「黒板は何色なんだろう。」皆さんには何色に見えるのだろうか。「緑」「深緑」「濃い緑」「モスグリーン」……。いや、私が考えるのはそういう、色を表現する「言葉」の数や種類のことではない。そうではなくて、「黒板は緑色です。」と答える二人の人がいたとしても、その見ている色が全く同じ色なのかどうか、言っている本人同士でさえ確認しようがないということなのだ。屁理屈と言われればそれまでだが。

私たちは唯一無二の存在である。だから物の見え方も考え方もひとりひとり違う。もしかしたら、私が見ている緑色と、あなたが見ている緑色は違う色なのかもしれない。でも、それは「緑色」として私とあなたの間に存在する。「言葉」がそう決めているのだ。全く違う存在である私たちを結ぶものとして「言葉」は存在している。

だからこそ「言葉」を丁寧に扱いたい。私に今、伝えられている「言葉」に込められた思いや意味を細やかに受け止めたい。そう思う。

文集に収められた作品の著者が、読者である私たちに伝えようとしているたくさんの「言葉」。そこから私たちは何を受け取るのであろう。味わいつつ読み進めたい。

文集　第四十七号　目　次

〈中学部〉

◇作　文

聖書ってつまらない？　……一年（1）
雨もたまには　……（1）
宝物の金魚　……（3）
消えゆく美　……（4）
一つのうな重が出来上がるまで　……（5）
切りかえる　……（6）
時間は有限　……（8）
宝箱の味　……（9）
明るく輝く星空を　……（10）
世界は誰かの仕事でできている　……（12）
「少年の日の思い出」をエーミールの立場から書く　……（13）（14）（16）

白い埃はキラキラと……二年 (17)
金柑色の祖母……(19)
日常って幸せ？……(20)
頑張れない私は出会ってしまう。……(21)
五日坊主……(22)
自分は自分でしょ……(24)
しんゆう……(25)
「お母さん」事件……(27)
閉ざされた心の扉……(28)
みひろ惑星とチャウチャウ星人……(29)
盛りすぎない中身……(31)
涙と罪……(32)
ふとんと私……三年 (33)
わが家のカラオケ大会……(34)
妹。……(35)
弟と私……(36)
褒め言葉……(38)
思い出はモノクローム……(39)

不器用 …… (40)
一年草 …… (41)
私の武勇伝 …… (43)
夢先案内猫（ゆめさきあんないみょう） …… (44)
いつも同じ …… (46)
空も飛べない私だから …… (47)
雪女（オトナ）との出会い …… (48)
駅 …… (50)

〈高等学部〉

◇作　文

祖父の新鮮な記憶 …… 一年 (53)
赤い底力 …… (54)
閑古鳥を食べました。 …… (56)
失態の味 …… (57)
雲霞（くもかすみ） …… (59)

迷子……(61)
見つけたこと……(63)
一言。……二年(65)
夜明け……(66)
星に願いを……(68)
現代版枕草子……(70)
後悔のない生き方……(71)
甘味、酸味、苦味……(72)
タカラゲ……(73)
集合体……(75)
新宿の一万円……(76)
ファンファーレ……(77)
現代版桃太郎……(79)
アイテム……三年(81)
今は知らない本当のこと……(82)
子供大人コドモ……(83)
七月二十五日……(84)
何者でもない私……(86)

大人へ……（88）
大雨の中の私……（90）
時間は進む……（91）
五年前の私へ……（92）
十秒ジャンプ……（94）
作文文化……（95）
描く……（96）

〈第三回エーカック記念作文コンクール　テーマ「手」〉

〈作文・エッセイ部門〉
好きじゃないけど……中二（98）
動物に手はあるか……高一（99）

〈創作部門〉
ほくろ……高二（101）

作文　中学部

聖書ってつまらない？

中一

学校で聖書の授業があると聞いて私は「うげっ」と思った。なぜかというと聖書って聞くと正しいことがたくさん書いてあって真面目そうだなって思ってしまうからだ。そもそも「神様」なんて非科学的なものだし、見たことのある人だってたぶんいないと思う。そんなあやふやな存在を信じることなんて私にはできない。でも、なにか大事な時やどうにもならない時に私は「神様おねがいっ」と思ってしまっている。そんな私がいるのに気が付いてますますわけが分からなくなった。

そんな時、歴史の授業で宗教などについて勉強する機会があった。私は、「また宗教のこと」と少しうんざりしていた。そして、授業の最後の方で先生から「ダ・ヴィンチ・コード」というキリスト教やダ・ヴィンチの絵に関することが書いてある小説を紹介していただいた。私は、ダ・ヴィンチの絵について興味があったのでその本を読んでみることにした。でも、宗教に関することも書いてあるから難しそうだなと思っていた面もあった。しかし、読んでみると私が予想していたよりもずっと面白かったのだ。ストーリーも分かりやすかったし、キリスト教や他の宗教についての説明も多く書いてあり、自分の知識が増えていくことがとても楽しかった。なにより、聖書の内容が初期のディズニー映画やダ・ヴィンチの描いた絵などに関係しており、私の生活の中に関わりがあることに驚いた。他にも、歴史の先生に勧められた「キング・オブ・ヘブン」という聖地をめぐって戦う十字軍の人々に関する映画を冬休みに観てみた。それらを通し私は「神様」とは人によって考えや見方が変わり、変化していくものだということが分かった。

これまでは、「神様」「宗教」と聞くと難しそうだなと思いがちな私だったが、今では宗教や神様について多様性があって面白いなと興味がわいてきた。だからこの作文の題名は「聖書ってつまらない？」から、「聖書って面白い？」に変えたほうがいいのかしれない。

雨もたまには

中一

私は雨が好きだ。

「今日は朝から雨に注意してください。」

温かい味噌汁、ホカホカのご飯。いつもと同じ朝。毎日聞く天気予報の人から今日は雨だ、と伝えられると母はがっくりとうなだれる。そのうち父も起きてきて面倒くさそうに「今日は雨かー。」とだけ言ってあくびをした。そんないかにも雨が嫌いだ、という二人には申し訳ないが、私は雨が好きだ。だから、雨が降ると聞くといつもわくわくする。雨が嫌いな人ってどれくらいいるんだろう、と思った私はさっそく近くに置いていた自分のスマホを手にとって、雨が嫌いな人の割合、と検索してみた。そうすると、大きな字で雨が嫌いな人は七十三パーセントと出てきた。そんなに雨が嫌いな人が多いのか……。それではこの作文を読んでくれている人たちにだけでも雨の日の楽しみ方を伝授しよう。

まず、雨の日に嫌なことといえば、平日の通勤・通学。これがあるから平日の雨は嫌だという人もいると思う。雨にぬれるし、気分が落ちこむ……。それを楽しむには雨だからこそできることを考える。どれだけ雨にぬれずに学校に行けるか、とか雨にぬれにくい道を開拓しながら行くなんてことをゲームをしているかのようにしていれば、自然と雨を嫌にならずに学校に行けるかもしれない。

他には、雨の音を聞く、というのもいいな。雨の音はパラパラ、であったり、サーサーであったり、日や時間によって全然ちがう。この音を聞いてみるとなんだか音楽のように聞こえて楽しくなってくる。家の中にいるなら自分の好きな曲を聞いてみてほしい。いつもの音楽が少し変わって聞こえてくる。

そして次、雨が嫌いな人が嫌なことは休日に外に出ていけないこともあるかと思う。これは家で楽しめることを充実させる、というのが一番。例えばとりだめをしていて気になっていたドラマやアニメなど。読書もおすすめ。本を読むなんて面倒と思う人は表紙をめくって、最初の五、六ページを読んでみてほしい。私はその方法で本を読み、全てのページを読み終えることができた。雨の日はとても静かに感じられて読書に集中することができる。

最後は、好きな傘を使ってみるというのはどうだろう。面白い傘を使うというのは雨の中歩くのが嫌ではなくなることになる。面白い傘というのは、傘の雨を受けとめてくれる部分の裏側が青空柄になっているものや、傘のとっての部分がレタスのしんのようにできていたり、雨を受けとめてくれる部分がレタスの葉のようになっていて、全体で見るとまるで本物のレタスに見える……という物もある。他にも調べてみると自分の使いたい傘に出会える。ぜひ、自分の憂鬱な雨の日を少し楽しくしてくれる傘を貴方も使ってほしい。

どうだったかな。これで少しでも雨を楽しんでくれる人が増えればいいな。次の雨の日も楽しみだ。

宝物の金魚

中一

初めて金魚を飼った時のことはよく覚えている。大船祭りという地域の祭りに行った時のことである。大船祭りはこの辺りの地域ではそこそこ有名なお祭りで、その時もたくさんの人が集まっていた。私は両親と屋台を巡り、一通り食べたい物を食べ、帰ろうとしていたのだが一際、人が集まっている所があり見に行ってみることにした。そこで行われていたものは金魚すくいだった。小さいプールのような水が入った所に、鮮やかな色をした小さい金魚がたくさん泳いでいた。金魚が行く手をはばむポイに逃げ惑いながらも、優雅にヒレを動かし泳ぐ様はとてもきれいだった。太陽が当たっていたのもあると思うが、初めて間近で見た金魚はテレビや本で見たのとは数倍輝いて見えた。その時私はもっと間近で見てみたいと思い、両親にやってみたいと頼んだ。初めてやった金魚すくいは自分が思っていたより数倍、難しく感じた。隣の人はいとも簡単に金魚を次から次へとポイですくい、入れ物にホイホイ入れていくのだが、それとは対照的に私はポイを動かす度に穴が開く始末だった。横で見ていた両親は「下手だなぁ～」と茶化しながらも熱心にアドバイスをしてくれた。結果的に一匹もとることができず落ち込んでいた私を見て、金魚すくい屋のおじさんが声をかけてくれた。そのおじさんは「好きな金魚を一匹選んでいいよ」と言ってくれたのだった。気難しそうな顔をしていたおじさんがこんなことを言うのかと驚いたが、何より一匹だけでも金魚が飼えるという喜びの方が強かった。きらきらした宝が手に入るような気分で夢のようだった。どの金魚にするか悩んでいたその時、綺麗なオレンジと赤と白色が混ざった色をしたヒレがふわふわの可愛らしい金魚が目に止まり、この子を新しく家族に迎え入れようと思った。その後、家までの帰り道に両親と名前や水槽などについて話し合い、金魚の名前は「たまちゃん」に決まった。

たまちゃんが家に来てからの生活は慣れないこともあったが楽しかった。それこそ、えさやりなどは大変だったがそのおかげでたまちゃんとさらに親しくなれた気がした。たまちゃんが新しい家族の一員となってからは、花びんに花を一本いれたかのように家庭がもっとはなやかになったかのように感じた。それは私以外の家族もそうだったようで、普段無口で金魚にあまり関心がなさそ

うな父も密かにたまちゃんが気に入ったようだった。私自身もたまちゃんが楽しそうに泳いでいるのを見ると、心が癒され、たまちゃんは私の生活で当たり前の存在になっていた。

それは夏休みのことだった。たまちゃんを家に置いてしばらくの間家族で出かけることになった。自動えさやり機を取りつけ、リビングのテーブルの下に置いていくことにした。旅行から帰ってきた時のことは今も忘れられない。父が先に家に入り、母が「たまちゃんはどう？生きてる？」と聞いた。その瞬間はものすごくドキドキして、生きているはずと自分にいい聞かせていた。しかし父の「あーだめだった……」と言う言葉を聞いて、一気に顔が青ざめていくのが分かった。母が急いで家に入っていくのを見て、ハッと我に返り、自分も急いで家に入った。嘘でしょ、冗談でしょと思ったが、父は冗談を言うようなタイプではないのでそんな訳もなく本当に死んでしまっていた。しばらくは喧嘩したかのように気まずかった。心に穴が空いたかのように悲しく、寂しかった。私達家族にとってたまちゃんはいつまでも同じ家族だ。これはたまちゃんに限らず、他の動物でもそうだったかもしれない。だが、私は初めて見た美しく泳ぐ宝石のようなたまちゃんが大好きだったのである。たまちゃんでなかったら私はきっと飼うことを決めなかっただろう。金魚は小さく儚い。だが私にとってたまちゃんは家族という宝物である。

消えゆく美

中一

美しさには二つある。残る美しさと残らぬ美しさだ。私達は時間を生きている。人の感情、感覚、感動。全ては時が経つにつれ過去へと流れていくのだ。残らぬ美しさの中に「花火」という物がある。

花火は長年人々に愛されてきた。私達が生まれていない一四〇〇年代からあると言われている。どこで始まったかはまだ不明である。一番古い記録では室町時代の「建内紀」の日記に書かれている。古くから愛されてきた花火だが、なぜこんなにも人々に好かれているのか。

それは、人生の一瞬の間だが、形、色、音をその一瞬で植えつけるからである。少しの間だからこそ花火の時間を尊く感じられるからではないか。私はそう思う。

私は花火が好きだ。他人はきれいだから？　花の形だから？　と聞くだろう。だが私は違う。

花火は輝き美しいが、その後はどうだろうか。少し切なさを感じないだろうか。この切なさがある事で次の夏

を楽しみにする事が出来ると思う。
もう一度言うが、私達は時間を生きている。だからこそ過去に流れていく花火が切なく感じられるのだ。花火は沢山の色で形づくられている。花火には「基本」の色という物が存在する。赤、青、黄、緑の四色である。色の他にも花火の造形という意味でも同じである。花火には打ち上げ花火という物もある。その種類、なんと十五ほどあるという。普通の花火には、誰もがやった事があるような「線香花火」など、これを含めて九種類ほどあるそうだ。
色は大体同じなのに柄や形が沢山あるので組み合わせ方は豊富だ。それは人生と同じなのではないかと私は思う。人生は喜怒哀楽で出来ている。花火もそうだ。青や赤さまざまな色があり、沢山の輝き方がある。私が幼い頃はただきれいだなとだけ思っていたが、成長するにつれ、花火の切なさを覚えさせてくれた。沢山の感情の積み重ねで出来ている、かけがえのない大切な物なのだと気づいたからこそ花火が終わる切なさを大事に出来るのである。
私が花火を好きになった理由はこれだ。

一つのうな重が出来上がるまで

中一

私は夏休みの間に、父が運営している鰻屋にお手伝いに行きました。そこで私が見たことや経験したことをお話ししたいと思います。
うな重を作るには、生きた鰻を割くところから始まります。
まずは、鰻のほっぺに目打ちという針のような物を刺します。鰻はとても生命力が強いため釘を打っただけでは簡単に動きは止まりません。動く鰻を押さえながら三枚おろしにして、肝を取り除きます。さらに、腹と背のヒレを取り口当たりを良くします。
最後に、三枚おろしにした身を二等分にして割く作業が終わります。
次は、さっき二等分にした身に二箇所、串刺しをしていきます。串刺しを終えた身は、硬さや大きさ、重さによって蒸す時間が変わるので丁寧に重さを計り、蒸す時間を決めて蒸します。蒸す作業は二回行います。一回目を終えた後、水で洗ったら一度蒸して、終えたら次の工程にいきます。

次は、ようやく鰻を焼く作業です。鰻を焼く時は室温が四十度まで上がります。なのですごくきつい作業です。その他にも、タレに鰻を沈めて味つけをします。その後に、団扇で扇ぎながらしばらく焼いたら鰻は出来上がりです。ここまでは、全て私の父が作っています。

うな重を一つ作るのは、これだけでは終わりではありません。他にも色々な工程があります。

ここからは、私が実際に体験したことを、紹介します。

まず最初にやったことは、一緒に添えるお新香を、お店で働いている祖母と作りました。

事前に用意しておいた、ぬか漬けのきゅうりとかぶを見映えが良いように切り、市販のたくあんと合わせて盛ります。これでお新香は終わりです。

そして、最後にお吸いものを作ります。お吸いものは、だし汁を使います。作り置きしただし汁を使う分とって沸騰させます。沸騰したら、かやくを入れておわんにだし汁を注いだら完成です。これまでの手順をやって、やっとうな重が完成します。一つのうな重を作るにも、これほど大変なのに、更に、事前の準備があってこそのうな重なのです。

まずは、割り箸を箸袋に入れる作業をします。これはコツをつかむまで三十本ぐらいやりますが、コツをつかむと気持ちが良いようにスラスラと出来るようになります。単純な作業だけど、早さや数を競ってやるとすごく楽しいです。箸袋に箸を入れ終わったら半分に分けて片方には山椒を上の方に入れます。これで箸は完成です。

ほかにも、お茶をお客さんに出す、お米をたくなどがあります。

最後に、私は鰻が大好きです。家族が手をかけて作ってくれたうな重は最高においしいです。うな重を作る大変さや、すごさが、お手伝いに行って、すごく分かりました。

これからもお休みの日は手伝いに、行きたいなと思いました。

切りかえる

中一

「今までやってきたことを発揮すればうまくいく。」何かをやる度に私は母にそう言われてきた。確かに、今までやってきたことが発揮できたと思う時は良い結果が多かったが、それを覆すような出来事があった。

十二月十日、二学期期末試験二日目、それは国語の試験の時間に起こった。私は国語が得意ではない。しかし、中学校に入学し、国語の授業を受け、小学校の時よ

り楽しくなってきたし、得意な科目にしたいという気持ちがあった。だから今回の試験には並々ならぬ気持ちで、臨んでいた。この日の科目の勉強は半分くらいの時間を国語に費やしてきた。

国語の試験が始まった。分かる、できる、そんな思いで問題を解いていった。これまで国語の試験で時間が足りなくなるようなことはなかったので、時間なんかまったく気にならないくらい、集中して解き進めていった。これはけっこういい点数がとれるのではないか、そんな予感すらしていた。

半分くらい解き進めた時、「あと十五分です。」信じられない言葉が聞こえてきた。「あと十五分？　もう三十分たった？　えっ、終わらないかも。」その瞬間に頭の中は、真っ白になり問題が頭に入ってこなくなってしまった。何とか後の時間を使い切り、国語の試験は、終わった。時間が足りなかった。脱力した。

三日間の試験を終え、国語のショックを引きずりながらも、終わったことを私は喜ぼうと思った。そう、「臭いものにふたをする」という心境で、国語の試験のことは頭の中にははっきり残っているのだが、「見て見ぬふり」をしながら、試験の返却を待つことにした。

このことを一番忘れさせてくれたのは部活だ。部活に行くと、「技術の向上」や「チームの中での役割」や「道具やグラウンドへの感謝」など、イヤなことを忘れさせてくれることがたくさんある。私はこの国語の試験のことを忘れられるように準備をする時の心持ちを変えてみた。

今までの部活の準備は、あまり頭を使うことなく、「流れ」でやっていた。しかし、今回のことを忘れるべく、今まで以上に力を入れてやってみた。例えば、できるだけ素早く道具を出し、練習の時間を増やすことを考えたり、来年後輩が入った時のことを考えて、積極的に先輩に質問するようにしたり、先輩が気づく前に行動するように心がけた。練習が始まれば国語の試験のことを考える余裕などはないのでとにかく準備には集中した。

試験はまだ返ってこなかった。結果が気にならないといえば嘘になるが、今日も部活の準備に集中する。今日の私の担当はラインカー。ホームからサードまでの塁間を引く。思った以上にうまくできた。次はホームからファースト、実にその日はうまくいき、すがすがしい気持ちになった。ラインカーに心を動かされ、「落ち着いてできたからこれまで引いてきたどの線よりもまっすぐうまく引けた。」となんとなく感じた。物事はやってきたことをすべて出せばもちろん上手くいくかもしれないが、やってきたことを発揮できる状態にあるかどうかが一番大事なのかもしれない。

結局国語の試験の点数は振るわなかったが、思っていたよりは何とかなっていた。「頑張ったら落ち着くことができ、やってきたことがすべて発揮できる。」ということはないけれど、「落ち着いて取り組むことができれば、うまくいくことが多い。」ということはつかめたような気がする。これからは何かやる時は少しでも落ち着いてできるよう、深呼吸したい。

時間は有限

中一

時間は有限である。ふたを開ければ音楽がなるオルゴールも時計の針も、時間が経ってしまえば古びて動かなくなる。逆に時間が経てばヴィンテージのように味をますものもある。

このコロナ禍というご時世もあって、外出が制限され、自分の部屋で過ごす時間が比較的例年より多くなった。普段体を動かしたり脳を使ったり人と話したりという時間が減り、その分一人で過ごす時間が増えた。ようするにひまでもあった。この本来ならなにかしらに使っていたであろう時間が空白になったものでこの時間をどう使おうかと最初は考えた。自分にある時間をどう過ごしたいのかと思考をめぐらした。急に規模が大きくなったと言われればそうだがなんせひまであったのでつい考えがふくらんでいってしまった。話しを戻すとこれからの時間をどう過ごすか考えたとき自然に思い浮かんだのは父方の祖母であった。なぜ祖母が思い浮かんだのかというと、私は祖母の生き方というものが憧れでもあるからであった。祖父母は沖縄に住んでおり、よく夏休みなどの長期休みに家族で遊びに行っていた。祖母はとても明るく愉快な人であった。それはとても健康的な生活で、毎日の習慣を丁ねいにこなし、とてもポジティブな考えを持っている人だった。お出かけのときはいつもより服装を着飾って、可愛らしいリップをぬって出かけていた。私や従兄弟達と遊ぶときは快く乗ってきてくれ、全力で楽しんでくれた。はたからみたらなんてことのないような生活にも思えるだろうが、私は祖母の生活はとても魅力的だと思った。その大きな理由の中には、いつも祖母は笑顔で明るく、どんな時もおしゃれを忘れず、明日がくることを何年経っても同じ気持ちで迎えているのだと感じたからである。でも決して楽しいことばかりではないと思うが、それでもなお若い頃と変わらない気持ちで毎日を送っているように見える。それはとてもすごいことだと私には思えた。でも祖母のような過ごしかただけが全てであるとは思わないし、ただ私は祖母の生

き方が好きであるという話にすぎない。それに祖母と過ごす時間が増えていくにつれ、祖母の生活の流れがヴィンテージのように見えた。

というように色々と考えた結果、自分の考えとしては、時間というものは等しく与えられており、皆同じように時間は止まることなく流れ続けている。今この最中でさえも時間が流れており自分にある時間も刻一刻と進んでいる。それに一人一人に与えられた時間は長いようで短いような気がする。だからあればせっかくある私個人の時間は大切にしていき長年時が経っても明日を迎える気持ちが変わらずあればいいなと思う。

時間は有限である。だからこそ私は時間が経てばヴィンテージのように流れる時間を築いていきたいと思う。

宝箱の味

中一

つやつやの黒い宝石、ぐるぐるにまかれた宝の地図、立派に腰を反らせた真っ赤なシャチホコ。どこを見ても甚だしい輝きを放つそれは、大きな宝箱の皮を被った、ただの箱だった。

正月、家族全員に新年の挨拶をしてお年玉を貰い、気分上々だった幼い頃の私が食卓で目にしたのは「おせち」だった。初めて見たそれに興味本位で手を伸ばした私は、いくつかをぱくりと一口、口にした。すると、みるみるうちに顔が青ざめていく。そしてコップいっぱいに水を注ぎだしたのは、口にしてから十秒にも満たないことだった。不味かったのだ。宝石のように見えた黒豆は粘土のような食感がし、綺麗に巻かれただてまきはふにゃっとしていて、なんだか気味が悪い。終いには、立派なエビと目が合ってしまい、怖くて食べることができなかった。急いで溜めた水全てを腹に流し込み、なんとか口内を救出する。こうして私の初おせちデビューは、大失敗に終わった。それからというもの、私は毎年おせちを口にすることはなく、他のものを食べることが続い

た。どうしてこんなもの食べるんだろうと思いながらも、あの日のトラウマからおせちを食べなくても良い、という事実に私は安心していた。しかし、笑い合いながら楽しそうに食卓を囲む大人を見て、羨ましく思う気持ちは年々、確実に根強くなっていった。それから何年か経ち、その羨ましい気持ちが積もりに積もって迎えた年明けの最初の日。いつものように並べられていたおせちの重箱を開けた私は、中身を思い切って口にした。すると、黒豆はとても柔らかく、だてまきはほんのりと甘い味がし、エビはプリプリで新鮮な身がとても美味しかった。掴む手が止まらない。成長したことで味覚が変わった事に驚愕しながらも、私には嬉しいと言う思いが募ってきた。毎年一人違うものを食べ、正月の楽しみがお年玉だけになっていた私にとって、おせちを家族で囲み、沢山話をする事は、小さな夢でもあった。私がおせちを食べられるようになったその日、朝から夜にかけたおせちと、和気あいあいとした会話は、途絶える事はなかった。

こうして人生二回目のおせちデビューに成功した私は、今年もおせちを食べている。何の抵抗もなく食べる事のできる今でも、あの時の嬉しい気持ちでいっぱいになった瞬間を思い出す。小さな夢を叶えた、宝箱の味を、私は忘れない。

明るく輝く星空を

中一

瞬きはしてはいけない。だって一瞬の事だから。願い事なんかできない。だってあっという間に消えてしまうから。首が痛くてもじっとがまん。空をずっと見つめる。期待しながら見つめる。

暗がりの中、寒さに負けないようにキャンプ用の寝袋と、リラックスできるイスをベランダに準備したのは去年の十二月十四日。私にとって記念日になった。ふたご座流星群がよく見えるとニュースで見たのが十三日。その日は雲が多くてあきらめた。次の十四日も雲が多かったが段々と晴れていったので、これはチャンスかもしれないと、寝る前にあわてて準備した。月明かりが邪魔していたが、星がよく見えてきたので期待して待った。まず目に入ったのがオリオン座。次に、その少し下あたりに、冬の一等星で一番好きなシリウスが見えた。青白く輝くシリウスは、冬だからかいつもさみしく見える。シリウスに優しく話しかけているような傾くオリオン座、この位置関係が好きだったな。そう思いながら、じっと空を見つめ続けた。

すると、シリウスよりも青白く大きな星が、静かに右から左に流れた……流れてすぐに消えてしまった。願い事を三回も言えない速さでびっくりした。生まれて初めて見た流れ星。ずっと、見たかった流れ星。本当に流れ星ってあるんだ！　と、驚きと同時に、心が夜空と同じように晴れ、幸せな気分になった。もっと見たい。と、その後も空を見続けていたら、また流れ星。さっきとは違う流れ、左から右上。これもまた、流れてすぐに消えてしまった。あぁ、本当にきれい、心が幸せでいっぱいだ。他の人も見られたかな？　こんな気分になれる流れ星、たくさんの人に見てもらいたいと思った。

流れ星やきれいな星空を見るには、街灯が多い都心から離れた方が良い。街灯がほとんどない、山や海のキャンプ場の夜空は、とてもきれい。こんなに星があるんだな、とキャンプ場で初めてきれいな夜空を見て思った。空全体が天の川のようでキラキラ輝いていて、ずっと見ていてもあきない程。いろんな大きさの宝石を誰かがこぼしたみたいに、キラキラが散らばっている。そんな夜空を見ていると本当に幸せな気分になれる。なんで家からはこんな風に見えないんだろうと家族で話したときに、街灯の多さが理由の一つと知った。街灯は夜歩くときにあると助かる大事なもの、人が大勢住む町は、家の灯りもたくさん。夜遅くまで起きているとその分、灯りをつけ続ける。生活のため必要な灯りだけど、きれいな星空をみるためには、無いほうが良い。

輝く満天の星空、心がパアッと明るく幸せな気持ちになる流れ星。たくさんの人に見てもらいたい。私も毎晩そんな星空が見たい。いきなり、灯りを消す生活をしよう、なんて言えないしできないけれど、例えば月に一回とか、十分だけとか、時間を決めて、灯りをなるべく消す日、「星空の日」のような時間があると良いなと思った。そんな日があったら悩んでいる人、悲しい気分の人、困っている人、そういった感情の人達が、流れ星と同じ様に一瞬でもいいから幸せな気分を味わえたら、少しでも心が軽くなるかもしれない。夢や目標がある人、何かを頑張っている人、頑張ろうとしている人、そういった人達は、更に前向きになれるかもしれない。

空をずっと見つめる。期待しながら見つめる。暗い夜空ではなくて、明るく輝く星空を。

世界は誰かの仕事でできている

中一

「世界は誰かの仕事でできている」

この言葉を一度は聞いたことがあると思います。缶コーヒーでお馴染み、ジョージアのテレビCMで採用された、梅田悟司さんが生みだした有名なキャッチコピーです。

ジョージアは一九七五年に誕生し、他のコーヒーとは違う味の良さが消費者に受け入れられ、一九八六年には缶コーヒーのトップシェアを獲得。以来、三十年に渡ってシェア一位を独走しています。

そんなジョージアが昔から使っているキャッチコピー「世界は誰かの仕事でできている」ふと、辺りを見渡してみると、確かに紛れもなく世界は誰かの仕事でできています。

例えば私たちが毎日食べている野菜は、農家の方々が作ってくださったものだし、毎日暮らしている家も建築士の方々が考えてくださったおかげでできている。全ての物事の裏側には誰かの「仕事」がある。誰かが支え、誰かに支えられ……。そうやっているからこそ今日も世界は当たり前のように回ってるのだと思います。

支えられるのは目に見える物だけではありません。今回、作文を書くためにジョージアについて調べていたらある記事が目にとまりました。それは、ジョージアのCMを見て支えられた人達のコメントがまとめてあったものです。ある人はこう書いていました。「ジョージアのCMを見て、自分の仕事は誰かの役に立っている、その誰かの顔を想像しながら今日も仕事しようと思う。」また、ある人はこう書いていました。「仕事、本当に疲れた。でも『世界は誰かの仕事でできている』この言葉があるから今日も頑張れた！　明日も頑張ります!!」とジョージアのCMを見て心を支えられた人がいました。たった一つのCMで働く人々を勇気づけ、励ましてくれるジョージアのキャッチコピーは本当にすごいなと思いました。

「仕事」は努力や工夫、想いや情熱が積み重なってできている。ということは、世界は誰かの情熱でできているとも言えるかもしれません。ですが、このような努力や工夫、想いや情熱が結集し、それらを注ぎ込んで「仕事」ができる。だからやっぱり、「世界は誰かの仕事でできている」これがしっくりきますね。

ジョージアのCMを見て私は、自分も誰かを支えたり、勇気づけ、励ますことができる「仕事」に将来就き

たいなと思いました。

授業内課題

ヘルマン・ヘッセ

「少年の日の思い出」をエーミールの立場から書く

中一

僕はエーミール。先生の息子だ。僕は知っている。みんなが僕のことを「模範少年」と呼んでいることを。初めは、そんな模範少年の自分が誇らしかったし大好きだった。クラスのテストの順位だっていつも一番だったし、体育の授業でだっていつも活躍していた。友達からの人気もある方だと思うし、自分でも完璧だと思うくらいの少年だった。

ただ僕がずっと目の敵にしていたのが隣の家の「あいつ」だ。あいつは勉強だってできるわけでもないし、運動だってまあまあできるくらいだ。僕だって出会った時から目の敵にしていたわけでもないし普通の少年だと思っていた。だけど、いつからか、あぁ、そうだ。あいつがちょう集めにハマリだした時からだ。別にあいつがすごい設備を持っていたわけでもなければ、すごく珍しい技術を心得ているわけではなかった。ただ集中力がとんでもなかった。僕ですらあんなに集中したことがなかった。たかがそのくらいで、と思うかもしれない。僕にもよく分からなかった。ただすごくすごく妬ましかった。僕はそんなあいつの弱みを握りたくてしかたがなかった。そう思いながら家に帰ってくると僕は、愕然とした。

僕のクジャクヤママユがこわされていたからだ。

思考がどんどん鈍くなっていくのかが分かったし、悲しみも混ざって、手も震えてきた。僕は泣き出しそうになりながら、ちょうのいる机へ走った。前羽が一つと触角が一本、バラバラになったクジャクヤママユが机の上で僕を待っていた。なんで⁉ ネコか？ それとも悪いやつがやったのか？ 震える手で一生けんめいになって繕おうとした。けどダメだった。クジャクヤママユはバラバラのままだった。鼻の奥がツーンと痛み、涙ぐみそうになり、唇を噛みしめる。その時だ、母さんが「お友達が来たわよ。」といい、あいつを僕の部屋に連れてきた。僕はクジャクヤママユが何かにつぶされてしまったことを一から全部話した。そしたらあいつは「それは僕がやったのだ――。」と言った。その後にも、何か言っていたが耳に入ってこなかった。まさかこんな形であいつの弱みを握ってしまうなんて思ってもいなかった。本当ならあいつのことをなぐさめてやるのが一番良かった

のかもしれない。いや、僕があいつにどなりつけた方が少しはあいつの気も楽になったかもしれない。けど僕は、あいつを軽蔑することしかできなかった。

いつもそうだ。あいつがコムラサキを捕まえたってうれしそうに僕の所に来たときだって本当なら一緒に喜んでいたかった。けど僕はコムラサキの欠点を見つけ難癖をつけることしかできなかった。

僕は知っている。

みんなが僕のことを「模範少年」と呼んでいることを。

僕は知っている。

みんなが僕のことを非の打ち所がないという悪徳をもっていると思っていることを。

中一

隣の家の奴が、珍しく僕に獲物を見せに来て、僕は正しいことを言っただけなのに勝手に落ち込まれてから二年が経った。僕はクジャクヤママユをさなぎからかえした。誰が広めたのか、いつの間にかうわさが広がっていた。

ある日、僕は親に連れられて出かけていた。クジャクヤママユは展翅板に留めておいた。周りの少年たちの目は、僕のクジャクヤママユに注がれているような気までした。それはまるで、水が染みた靴をずっと履き続けているような気持ち悪さだった……。

夕方、家に帰ると、僕の部屋に、誰かが入ったようだった。クジャクヤママユの前羽一つと触角一本はなくなり、羽はばらばらに千切れて、とび色がかった羽の粉は、人の指のような形にまとまっていた。僕は、じんわり背後から忍び寄るような絶望を受けた。取り乱し、慟哭したくもなった。冷や汗が止まらず、心臓の鼓動も心なしか速まっている気がした。だが、僕の親は教師だ。親から正しい生き方を教わっているのに、それを忘れて感情のまま泣き叫ぶなんて醜いことはできない。僕は道具を取り出し、机の上に無残に転がっている「完璧なクジャクヤママユ」だったものと向き合い、修繕作業を始めた。

しばらく経つと、僕の心に初めての感情が浮かび始めた。俗にいう「諦念」というものであろう。僕の熱は失われ、代わりにどこか冷たい思いがこみ上げてきた。犯人が誰であろうが、許すことはできない。だが、その犯人に怒声を浴びせる気も、強く罵る気もわいてこなかった。今僕の中にあるのは、ただただ冷徹な感情だけだった。壊れた羽を広げ、ぬらした吸い取り紙の上に置い

た。だからと言って、何かが変わるわけでもないが。
ふと窓の外を見ると、僕の家に、隣の家のアイツが、気まずそうに一歩一歩を確かめながら歩いてくるのが見えた。そして、扉を開ける音と共に、「エーミールは？」と尋ねる声が響いた。アイツは元より、僕のクジャクヤママユに対して常に興味の色を匂わせており、犯人の有力候補となっていた。
しかし、人前に出るのであれば、完璧でなければならない。汚い感情を表に出すなど、到底許されないのだ。
僕は平静を装い、階段を下りた。そこには、ひどく怯えた顔のアイツがいた。幸いにも、僕の加虐心は鎮まっており、単刀直入に「お前がやったのか」とは聞かず、「誰かがクジャクヤママユを台無しにしてしまった。悪いやつがやったのか、あるいは猫がやったのか分からない。」と説明口調で話した。すると奴は「その蝶を見せてくれ。」と頼んできた。僕は、出来ることなら今は部屋に誰も入れたくなかったのだが、奴がせがむ様子が正視に耐えるものではなかったので、仕方なく部屋に入れた。僕がろうそくをつけると、部屋の闇が晴れ、机の上も露わになった。アイツは蝶を見ると、「それは僕がやった。」と告白をした。アイツはそれから、加えて何かを話そうとしたが、僕のどす黒い気持ちの方が先に出た。「ちぇっ。」僕が舌を鳴らした途端、アイツは動きを止めた。抵抗しようともせず、ただ僕と潰れたクジャクヤママユを見つめていた。僕は奴をまじまじと見た。奴の指先についた粉を見て、僕は確信した。そうか、奴だったのか。自分が一番なりたくない、軽蔑すべき人間は、あまりにも身近にいたのだった。
「そうかそうか、つまり君はそんなやつなんだな。」僕は、今の気持ちを端的に伝えられるよう努めて言った。僕の中で燃える劫火の熱さも冷たさも、確実に伝わるように。
アイツは明らかに動揺し、「僕のおもちゃをみんなやる。」と言った。今の僕には、何も響かない。今度は「自分の蝶の収集を全部やる。」とまで言われた。卑屈な態度だった。しかし僕は、アイツに何も求めていなかった。求めようがなかった。謝罪も弁解も、代替品も、僕の心は満たせない。ひとつだけ僕を救うものがあるとするならば、時を戻す時計であろう。
「結構だよ。僕は、君の集めたやつはもう知っている。そのうえ、今日また、君が蝶をどんなに取り扱っているか、ということを見ることができたさ。」
正直、吐き気がするほどだった。アイツの蝶への思いは、誠意の欠片もないものだった。
アイツは、僕に飛びかからんとする勢いで、足を引いた。しかし、その勢いもすぐに衰え、アイツはうつむい

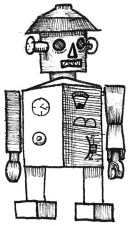
た。手は震え、逃げ腰になっている。
しかし僕は、的に向けて放たれた矢の如く鋭い視線を奴に送り続けていた。僕の知る「自分の正義」を表し、相手を自分の「完璧な理想」に服従させる方法は、これしかなかったからである。
後日、アイツが自分の蝶を全て潰したという話が耳に入った。僕は、クジャクヤママユの残骸を握り潰し、アイツの家の方向へ吹く風に乗せてばらまいた。

中一

僕の父は教師だった。だから周りが求める優秀な僕でいなくてはならないと思い、完璧を目指した。でも賢くなるにつれて学校では他の子たちの趣味などが幼稚に思えてきて、友達が一人も出来なくなっていった。だが、蝶集めだけには僕も熱中することができた。初めてともいえるその何かに打ち込むという感覚に酔いしれ、僕は昼も夜も蝶について勉強し、展翅の仕方や羽の再生方法など片っ端から研究していった。
そんなある日、隣の家に住む彼がこの辺りでは珍しい青いコムラサキを捕えたと聞いた。彼はコレクションの設備こそ良くはないが、捕えるのは上手だった。ただ彼の蝶の扱い方には少し思うところがあるが、彼にとってそこは気にすべき点ではないのだろう。そして出来ることなら彼と友達になりたいと思っていた。次の日、彼は噂のコムラサキを僕へ見せに来た。始めは本当に凄いと思っていた。だが見ていくうちにいくつかの欠陥を見つけてしまった。僕にとっては重要なことだったから、つい厳しい口調で批評してしまった。彼がこんな言葉を求めていないことなどわかっていたのに、考えとは裏腹に口からは彼を傷つけるような言葉ばかりが出てしまった。もう一度彼が蝶を見せに来てくれたらやり直せるのに。そんな僕の気持ちも虚しく、彼が僕に蝶を見せにくることは二度となかった。
それから二年経ったある日、大切にしてきたクジャクヤママユの蛹がかえった。父さんに呼ばれた僕は一旦蝶を展翅板に留め、部屋を後にした。しばらくして部屋に戻り、早く展翅を完成させようと机に向かった。だが、次の瞬間目に入ったクジャクヤママユの惨状に絶句した。いくら僕の技術をもってしても取り繕うことなど不可能。わかっていても自分の持つ知識を総動員して再生を試みたが、結果は散々だった。そんな時だった、彼が訪ねてきたのは。彼もクジャクヤママユを見に来たのだろう。僕が事の一部始終を話すと、彼は見せてくれと言

った。僕は蝶のある部屋へと彼を案内した。その後、僕は彼が後悔と悲しみの入り混じったような顔をしながら放った言葉に耳を疑った。「僕がやった。」怒りを通り越して呆れてしまった。嫉妬でやってしまったのだろうか。彼は蝶が好きなのではないのか？　僕の知っている君は何だったんだ。「そうか、そうか、君はそんな奴だったんだな。」そうして僕は彼を突き放してしまった。

だがその後彼の妹たちに彼が嫉妬心ではなく蝶に対する熱意が強過ぎたがためにおこってしまった事故だということを聞いた。それなのに僕が彼の弁明すら聞かずに冷徹な態度をとったから、彼は蝶のコレクションを全て潰して、収集の熱意も失ってしまったというのだ。僕は彼から蝶を奪ってしまったことを後悔し、一度起きたことはもう償いのできないものだということを悟った。そしてせめてもの償いとして、僕は自分の蝶を一つ一つ取り出し、指で粉々に押しつぶした。



白い埃はキラキラと

中二

子供の頃からキラキラしたものが好きだった。それはもう、家族でゲーセンに行って、

「これで遊んでおいで」なんて三百円でも渡されたら、ＵＦＯキャッチャーの馬鹿でかい景品なんかより、下敷きになっているやつ。あのプラスチックのキラキラ、安っちい宝石、あれが欲しかった。手に入れたキラキラをちっぽけなカンカンに詰めては、時たまこじ開けて一人愉悦に浸っていた私。そんなこと、今でも鮮明に思い出せるのに、それはもう十年くらい前の話。

――「ゴッゲゴッッッコォォォオー！！！」

うっ、うっ……うるせぇぇえ！！！　あまりのうるささに耳がひん曲がりそうになった。携帯を見ると朝六時。なんなんだよ私。なんで冬休みだってのにこんな早朝にアラームをかけたんだよ。この阿呆。天国のような私の睡眠が、悪魔みたいな昨日の私に妨げられたことに憤怒しながら私はアラームを叩き切って布団にぶっ倒れた。二度寝である。そこから一時間後、また鳴った。もはや苛立ちを超えて虚無状態だ。無言で私の指は流れるよう

にスヌーズボタンへと滑る。その時、一瞬見えたのだ。今日の日付、一月六日。

「ッ?!、今日友達と遊ぶんだっ……！」

私は跳ね起きた。天使だ、昨日の私は天使……。きっと死ぬほど寝起きが悪い私のために二回もアラームをかけたんだ。なんで一度目が予定より一時間も早いのかは知らないけれど。慌ただしく身支度をしている時、ふと外を見ると雪がちらついていた。でも、気分が上がったのはほんの一瞬だった。

（どうせすぐに止んで溶けてぐちゃぐちゃになるんだろう。東京の雪なんてそんなもんだ。）

私は歩きづらいべちょべちょの地面を想像してゲンナリしながら傘を引っ張り出した。

「朝、目が覚めた時に、ワクワクしたのはいつが最後だった?」

一瞬、頭の中に響いたこの言葉。くだらない。もう出なきゃ。

友達との宴は、それはそれは楽しかった。実際宴という程ではないが、一時だけ「このご時世」、こんな言葉を忘れられるくらいには。すぐ止むと思った雪は、予想に反して積もっている。駅につくまでに見た白い景色に白い雪。それはとても綺麗だったが、やっぱりそれ以上の言葉は出ないのだ。帰りの電車の中、ゴトンゴトンと揺れながら私の頭にはたった一つ。朝に響いたあの言葉。あーあ、認めたくなかった。認めたくなかったけど図星だな。いつからか私の好きだったキラキラはガラクタにしか見えなくなっていた。あのカンカンも埃なんか被ってる。それで気づいた。朝起きた時、私の視界がキラキラしなくなったことを。本当はとっくに気づいていて。朝のアラームを早くかけることだって何度目だろう。明日の朝は早起きして絵を描いたり、ホットケーキを焼こう、なんて妄想を膨らましては、毎朝撃沈しているのだ。そうだ、私はとうの昔、キラキラを見た時のあの感覚をずっと探していた。でももうそれは無理だなと、私はマスクの下で苦笑して、あのアラームも消してしまおう、そう思いながら電車を降りた。空は、とうに真っ暗になっていて最初に目に入ったもの——。

それは雪だった。東京という薄汚い夜空、ギラギラした雑居。それにふり積もった真っ白の雪だ。昼間の、美しいとか、綺麗だとかでは片付けられない夜の雪。カラフルなネオンに覆いかぶさり、今でも空から落ちる白は、まるで宝箱をぶちまけたみたいだ。ああ、これか。この感覚だ。踊り出したくなるような、歌い出したくなるような。

たまらなく、底なしの。

その日私は、十年前のキラキラをこの目に取り戻した

のだ。
「今年はなんと、四年ぶりに積雪十センチを上回った、東京都心――」
ニュースを横目に私はスマホを操作する。
ああ、冠雪をもう一度見たいと、また朝六時にアラームをかけようなんてそんな！

金柑色の祖母

中二

ころんとした橙色の実。祖母が手に乗せてくれた金柑は余りにも小さくて幼い私の目にも儚く映ったのを覚えている。口に入れてみれば柑橘系の匂いがふわっと広がって、その後に金柑特有のほろ苦い味がくるなんて思いもしなかった。脳に刻み込まれた祖母との一番初めの思い出だ。
祖母と私はよく似ていると口を揃えて家族に言われる。顔が似ているというわけではなく、好みの食べ物が全く同じだとただそれだけの事だった。でも私はそう言われることが嫌いではなかったし、むしろ祖母と一緒にいるようになり、だから好みが似かようのは必然だったのかもしれない。春は桜もちとひなあられ。夏は枝豆とトウモロコシ、秋が来れば干し柿干しいも。テーブルにみかんが乗ると冬になる。祖母と過ごした事は私の大切な宝物だ。
そんな祖母が私の生活からとたんに消えてしまった。それは誰のせいでも無かったし、長生きをすれば誰にでもやってくる可能性があるものだったから、年のせいにしてあきらめ、受けいれることも出来たのだと思う。けれど以前の祖母でなくなってしまったことが悲しくむなしく思えて素直に認めることが出来なかった。そんなことを思い悩んでいる内に祖母はどんどん変わっていってしまった。私のことを「ようこちゃん」と呼ぶようになった。母に伝えたら笑って聞いてあげて、と言われた。
「かぁなちゃん」と母音の抜けたような声で呼ばれることはないのだと、母の笑い顔から読みとれてしまって、悲しいのに笑えてしょうがなかった。
母と祖母のケンカが増えた。庭で花をつんでいた時、バキッと何かが割れるような音がした。
「どうして分からないの！」
母が泣きながらどなっていた。祖母は途方に暮れたような顔をしていたが、かんしゃくを起こしてお皿や毛糸などをなげつけていた。ショックで握りしめていたせいで手の中の花はくたりとしていた。人生いつかはこうなってしまうのか、という人の儚さと、それでも家族に、私

に大きな感情をもたらした祖母の生きてきた証を見せられた気がした。
気がつけばまた金柑の季節だ。祖母との思い出は苦くて甘くて鮮やかだった。初めて食べた金柑みたいに。

日常って幸せ？

中二

私は日常の中で生きている。
朝、自分の体温が残った暖かいベッドから名残惜しくも出てカーテンを開ける。柔らかくも寝ぼけまなこにはなかなかにキツい朝陽を浴びながら眠気覚ましに紅茶を一杯。朝食を食べ終えて身支度を始める。鏡の前に立っておかしいところはないかと一回転。二年前には新鮮でむずがゆかったこの制服姿もずいぶんと見慣れたものとなった。軽やかにローファーを鳴らしてアスファルトの道を歩く。朝の通勤ラッシュにもまれながらも横浜に着く。バスに乗り座席に腰を落ち着かせる。ヨルシカのヒッチコックを聴きながら窓の奥の見慣れた街を眺めている。今更新しい発見もなく、特にこれといった変化は見つけられないうちに天井のスピーカーが次の停留場を告げる声で意識が戻される。
学校に着き、クラスメイトたちとあいさつを交わす。そこからはまさに私の「日常」だ。時間割通りにコマ割りされた授業を淡々と受けていく。なかには永遠に続くのではないかと思える授業や先生の声が子守歌と化す授業もあるがなんとか気を引き締めて乗り越える。
友達と会話に花を咲かせながら帰路に着く。夕食時には母と今日あったことや思ったことをお互いに話し一日が終わる。
傍から見ても自分から見ても、私は幸せという環境にいる。それこそ神様に「これ以上何を望むのだ！」と怒られるくらいには。しかし、皮肉にも私が今幸せか、不幸せか、自分ではよく分からない。ほんの些細なことで自分が今幸せなのか、を左右する。そんな薄っぺらい人生を送っている私にはたして生きている意味はあるのだろうか。「ライムライト」でチャップリン演じるピエロはこう言う。「生きていくことは美しく素晴らしい。くらげにだって生きている意味はある」。くらげにも生きている意味があるというのに、それが見つけられない私がなんとも情けなく小さく見えてくる。しかし、意味は分からなくとも存在する意味はある。本にも、紅茶にも、なんにでも存在する意味はあるのかもしれない。
たとえ退屈で変わり映えのしない日常でもあったとしても、その日常こそが私という存在を形作っていると思

うと、自分が生きている世界は十二分に美しいと気づく。この日常がいつまで続くか分からない。もしかしたら明日死んでしまうかもしれない。しかし、今そのことに気づくことができた私は幸せなのだろう。

頑張れない私は出会ってしまう。

中二

「ねえ。その楽器、何？」
「うぉ？」
頭の回転が追いつかない。よく電車で陽気な女子学生に話しかけ、楽しそうに談笑する陽気なお婆さんは時折見かけるが、自分の番が来るだなんて全く思っていなかった。何故私だったのだろうか。こんなとにかく平凡そうな私なんだ。バスのエンジンがかかる音をかき消すくらい頭の中がハテナで埋め尽くされている。あぁ、そうだ さっきの返事をしなければ。
「えっと、ベース、です。」
「そうなのねー！　弾けるの？」
「あはは……まあ……。」
何を言っているんだ私は。全然弾けないだろ。なにが「まあ」だよ。
「そうなのね！　きっとかっこよく弾けるのね。」
もうだめだあまりの眩しさにまともな返答ができない。
「私ね、今から病院に行くの。」
「へぇ、そうなんですね……。」
どうしよう。話題がない。気まずすぎる。緊張しているものの、思い切って口を開く。
「ところで、どこに向かっているんですか？」
「病院に行くの。最近目が痛くてね。」
何故よりにもよってこの会話にしたんだ。どうやら自分が気づく前に既に私の頭は真っ白だったらしい。私を見て何かを察したお婆さんは口を開いた。
「ごめんなさいね、つい音楽や楽器が好きで声をかけてしまったの。迷惑だったわよね。」
「そんな、謝らないで下さい。そうなんですね。何か楽器とか、やっていらしたんですか？」
数分前の自分とは大違いの滑り出しの良さに心の中でガッツポーズをする。
「いいえ、弾いたりはしないのだけれど、聴くのがとても好きで。ほら、例えばストリートピアノとか。」
「あっ。ストリートピアノ良いですよね。最近やっと世に出てきたんですけど。私もつい見かけると弾けないのに立ち止まっちゃいます。」
「いいわよねえ。それで……」

それからお婆さんとたくさん話をした。ちょっと前の緊張が嘘のように。やっぱり十四歳と七、八十歳の人とは「人生経験」という越えられない壁がある。会話が終わってお婆さんがバス停に降りて別れた後、心做しかいくつか年をとった気持ちになった。お婆さんはたくさんのことを十分にも満たない時間で話してくれた。息子や夫は音楽があまり好きではないこと。この日もストリートピアノを覗いてきたこと。しかし例のウイルスのせいでピアノが弾けなくなっていたこと。そして最後に、

「頑張ってね。は言わないよ。きっともう、既に頑張っているからね。」

という言葉をかけてくれたこと。この言葉は今でも頭から離れない。過去の自分が大量に流れこんできた。本当はベースなんて弾けない。なんなら努力しようともしていなかった。四月に亡くなった大祖母がいつかに同じように言った言葉と、その情景を重ねてしまった。身体から流れでてきそうなそれらをぐっとおさえつけて一言お礼を言った。その時聴こえた音が、情景が、お婆さんの笑顔がまた、刻まれたのだ。

今思うと、本当に不思議な体験をした。名前も知らないお婆さんとはそれから会っていない。仙人みたいな人だ。彼女のせいでまた新しい大きな壁ができた。それは「人生経験」ではなく、「目標」。欲望も出来っこないことも積み重ねることが許される、自分で壊すことができる、大きな大きな壁。勿論また会いたいが、次に会う時はこの目の前にある大きな壁を壊してからがいいだなんて贅沢で無謀なことを考えてしまうのもきっと、憂鬱で変わり映えのしないただただ平凡な日々を上書きした貴方と出会ってしまったから。という理由にしたいと思ってしまう、結局まだ頑張れなさそうな私がいることだけは、あのお婆さんには言えなさそうだ。

五日坊主

中二

塩こしょう「少々」……親指と人さし指の先でつまむぐらいの量（約〇・三～〇・五グラム）。ちなみに、「ひとつまみ」は親指と人さし指、中指の三本の指でつまむぐらいの量（約〇・八～一グラム）である。

一月から三月の母はとても忙しい。夜遅くまで仕事をしている。家族のために週末に一週間分の夕食を作ったり、朝仕事に出かける前に、準備をし、必ず手作りの夕飯を準備してくれる。母のいない食卓はさびしいが、生まれた時からこの時期はそうだから大して気にしていなかった。私は、料理が苦手だと思っていたがよくよく考

えると料理をする機会がなかったのだと気付いた。もはや苦手なのかどうか以前の問題だったのだ。我ながらお恥ずかしい限りだ。もう中学生だし、ネットでレシピ動画も見れる環境だ。中二の冬、私は一大決心をした。

「自宅学習の期間は家族の夕飯を作る！」

母にそのことを伝えると「え？　大丈夫？　でもやってくれるなら、とても助かる！」と言っていた。父は、隣で何か言いたそうにしていたが、母が無言で制していた。

さて、いざ夕飯を作ると言っても、何からしたらいいものか……。母はいつも冷蔵庫をサーッと見渡し、私たちに何を食べたいか聞く。私と父はいつもお決まりの「なんでもいい」という回答をする。母は、一回深呼吸してメニューの提案をする。基本的に私も父も大賛成する。そして、私は壁にぶつかった。「私には、そんな離れ技は不可能だっ！」そして、次のステップへ。冷蔵庫サッと見の術ができないならば、一週間分のメニューをあらかじめ決め、それに沿って、実行するしかない。まず、いろいろなレシピサイトやレシピ動画を見る。検索キーワードは「簡単」「早い」「初心者向け」だ。食材のこと、栄養のこと、いろいろと考えることが盛りだくさんだ。メニューが決まったら、食材の確保だ。家の中に、どの調味料があるのか、どこにあるのか……またまた壁が立ちはだかる。でも、これは、「忍法ママに聞く術」でクリア。次に、料理に必要な食材をリストアップし、すでに家にあるものをチェックし、食材の買い出しにＧＯ！　普段母のスーパーへの買物に同行しない私は、何がどこに陳列されているのか分からず、スーパーの中を右往左往する。なかなか歩数を稼いだ。これで準備は完了。あとは毎日夕方になったら料理をすれば良い。こうして、私が一人で家族の夕飯を作る一週間が始まった。この一週間で気付いたことがいくつかある。

●レシピ動画はサクサク進むが、実際の私の工程はそんなに平和に進まないこと。

●ミル式の塩こしょうを「少々」投入することは私には不可能でありレシピに書いてある調味料の分量は、もはや理科の実験レベルであること。

●料理をしたら、洗い物が出る。いかに、料理をしながら洗い物をこなすのかがとても重要であること。

●料理をしていてそれを食べた人が美味しいと言ってくれると、嬉しいこと。

毎日毎日料理をしている母はいろいろな術を持っているに違いない。私にはまだその術は備わっていないが、いつか……いつか……。

怒濤の一週間が過ぎ、土曜日に母から翌週もチャレンジするかを聞かれた私の答えは、「う……うーん……」母は何も言わずにスッと立ち上がり、冷蔵庫の中をぐる

りと見渡すと、翌週分の夕飯をものの数時間で作り終えた。恐るべし、冷蔵庫サッと見の術。

自分は自分でしょ

中二

悩むことが良いことだと思っていた。友人関係、課題、なんでもいい。そんなことを考えながらドライヤーで髪を乾かすということが私の日課だ。まるでディズニー映画にでてくるプリンセスのごとく正面から風を当て、髪をなびかせ、ひらひらと舞い上がるようなうきうき気分で、少し目を瞑ってみたり、ドライヤーをマイク代わりにしてカタコトな英語で洋楽を歌ってみたり、それを母に聴かれてオドオドするのが毎日セットだ。よく布団の中で考えることをその時考えてみるのも好き。瞑想みたいなものもやってみたが、よく分からなかった。私の考えを整理できる時間、この時間、この時に考えるのが私のベストなのかもしれない。

ゴーーーーっという音と共に最近考えることは、「年」。十四年間も生きていれば、年とったなぁと感じたり、友人とそういう話をすることも多くなった。例えばお酒の話、おつまみの好き嫌い、居酒屋の場所、酔ったらこの人はこんな感じ？　など、ちなみに友人によると私は「酔っ払わない程度に飲んでさっさと帰っているか、隅に座ってるんじゃない？」らしい。なんか、ちょっと傷付く。が面白い。そんな話をして大爆笑。小学生の時はこんな話絶対にしなかっただろう。しかし、こんなことを考えていると年をとるのが楽しみと感じることが多くなってきた。

特別年とったなぁと感じることは少ないが、六年前、近所に赤ちゃんが来たとき、私も小さかったが、それよりも小さく、つん、と触ると砂で作った塔のようにサラサラと粉になり消えてしまいそうなくらいの脆さだった。それくらい小さかったし、フニフニだし、守りたいくらいに可愛らしかった。しかし、今ではその子も立派な小学二年生。当然足腰も強くなり、言葉も喋る。もう感動して涙が出そうだ。後六年でこの子も今の私と同じ中学二年生。信じられない。こうして年をとっていくのかと思うと少し感慨深いものがあると思う。

こんなことを考えている私のところには、午後になると、小鳥の歌声のように、小さく甲高い声、芯のある元気な声が、ダッシュ、スキップしている足音と共に風にのって届く。私はそれを聞いて微笑み、歌い、また微笑む。そんなことを一人で繰り返し繰り返し、いろいろな声を聞き、私の髪と年はそよ風に吹かれて、靡いて、流

されていく。そういうものが私の気持ち、考えを支えているのかもしれない。静かではないところでも自分の世界に浸り、ゆっくり時間が流れていくことは自分にとっての成長にも、これからの人生にも繋がると思えた。

毎日毎日ドライヤーをかけながら自分色に染まった空間を見て、想像し、パッと現実に引き戻される刻を過ごしている。多分これは大人になっても変わらないことだろう。

悩んだって別に良い。年だってとっても別になにも変わらない。だって、自分は自分なのだから。

しんゆう

中二

「親友」とは、仲が良く、大好きな友達、そんな「親友」と小学六年生の夏、大喧嘩をした。

「あんたのせいで、いろいろ最悪。」「親友」にそう言われ、大喧嘩は始まった。自覚はなかったが、きっかけは自分にあったらしい。しかし、そのきっかけは私にとって「どうでもいいじゃん。」と思うほど些細なものだった。だからこの台詞を言われたとき、「まあ、どうせすぐ仲直りできるでしょ。」そんな気持ちで笑っていた。

次の日。私は「親友」に話しかけた。すると、今までとは違う、表面上の応答。次の日も、次の日も。私は「親友」が喧嘩相手になった痛みを感じた。「私達、『親友』じゃなかったの？」今まで面白くて優しかった「親友」なのに。悲しくて、傷ついて、私は「親友」に話しかけるのをやめた。きっかけは些細なことでも、お互いが本音で話さないことがますます溝を深めるようだった。そんな現状を変えたくて、私は傍にあった携帯電話を手にとり、恐る恐る「親友」の電話番号を押した。「もしもし。」いつも通りの「親友」の声。少し声が震えてしまったけれど、正直に気持ちを伝えた。すると次の日は前のように話すことができた。その時は本当に嬉しかったのだ。

その日、机の上に一枚の紙と一通の手紙があった。紙には「親友」の字で「これを読んで！」と書かれていた。家に帰って手紙を読んだ。「意味分かんない。」その手紙を読んで、そう思った。その内容は、やはり私のことが許せない、電話の時も私がヘラヘラしているように聞こえて内心は怒っていたというものだった。「何で直接言ってくれないの。」ベッドにダイブして、枕をなげて、大音量で音楽を聞いた。怒りがどんどん湧いてきた。「こんな手紙。」怒りが頂点に達したため、考えることを放棄した私は、手紙を窓からバラバラにして飛ばし

てやろうと思い、手紙を手にとり、窓をあけてベランダに出た。ベランダの手すりから手を出すと……。さあっと風が手をなでた。ふとベランダの手すりから身を乗り出してみる。「……あ。」思わずそんな声がもれた。夕日がてらして赤く染まった空。隣の家では、花壇を掃除する音。離れた所に夕日に照らされる木々。冷たい風が川を流れる水のように建物のすき間を走り抜ける。ずっと「親友」と「手紙」のことしか考えなかった自分。狭い世界にいた自分。そうだ。世界は広いんだ。不思議な感覚だった。「自分の世界」の「自分」ではなく「広い世界」の「自分」を見つけた。いつの間にか、怒りや悲しみはどこかへ消えていた。私はもうしばらく外の景色を眺めた後、冷えた顔と、手紙を握りしめたままの手を手すりから戻した。よく分からないけど何だか大丈夫、という気がした。こんなに広い世界だから。

次の日。やはり「親友」は共通の友達と喋っている時も、私とは目も合わせず、他の友達の方しか見ていなかった。「嫌だ。やっぱり話しかけるなんて無理。」窓をあけていなかった、「自分の世界」しか知らない「前の自分」だったらきっとこう思っただろうな。私はふとそう思い、心の中でくすりと笑った。大丈夫、今は駄目でも少しずつ近づけるはず、前みたいにとはいかなくても「友達」になれるはず。「ねね、これどう?」大喧嘩する前のノリで聞いてみる。「親友」は「いいね」とぎこちなく笑って返事をしてくれた。なんだかんだ仲直りできた。

大喧嘩が終わり私達は前以上に本音を言い合うようになった。前よりも楽しい。そんな日々が続いたある日「りさは友達じゃないよ」そう言われた。戸惑いながら「え?」と聞き返す。すると元「親友」は笑いながら「しんゆう」だよ。心の友で『心友』。私達は親友ではなく心友になった。些細な事が全てを壊すかもしれない。でも周りにもっと広い世界がある。だから勇気をもって触れてみる。大丈夫と言い聞かせる。それで得た『心友』はきっとかけがえのないものになるはずだ。

「お母さん」事件

中二

日光に熱せられたアスファルトの上を自転車で走る。日除けの帽子をかぶっているが夏の日差しはきつい。

八月某日、妹を無事そろばん塾に送り届けた私は一度家に帰り、自転車をとって一番近い本屋へ向かう。一番近い本屋でも歩けば二十分かかる。妹のお迎えの前に帰らなければならない。急いで自転車を走らせていたとき、前から人が歩いてきた。妹と同じくらいの女の子に、ベビーカーに乗った男の子、ベビーカーを押しているのはまだ若いお母さんだ。小さい子二人で子育て大変だなあ、と暢気なことを考えて道の脇にずれて走る。

「あ！　〇〇ちゃんのお母さんだ！」

え？　何て？　何て言った？

かん高く聞こえた声はすれ違った女の子のものだろう。元気な声だ。それはいい。問題は内容だ。〇〇ちゃんは妹の名前に聞こえなかっただろうか。そして「お母さん」？　オカアサンおかあさんお母さん⁉

ばっと自転車を止めて振り返るが親子はもう角を曲がってしまったようで姿は見えない。仕方なく、再び自転車を漕ぐ。ほとんどの信号が青ですいすい進めたが、頭の中は先ほどの女の子の言葉でいっぱいだ。お母さんなんて言えば若くても二十代だろう。私は半年ほど前に十三歳になったばかりだ。それなのに、お母さん。いや、あれは私に言ったとは限らない。落ち着いて深呼吸。

その日は呆然としたまま本を買ってそのまま帰宅した。妹のお迎えは母が行った。

私はテレビを見ながら考えていた。あの「お母さん」とは誰を指していたのか、「〇〇ちゃん」は本当に妹の名前だったのか。いや、きっと違う、違うと信じよう。「お母さん」はきっと私の近くにいた人だ。そんな人はいなかったがきっといたのだ。そういうことにしておこう。今日は疲れた。もう寝ることにする。

それから数日が過ぎて私はすっかりこの「お母さん」事件をすっかり忘れていた。学校はコロナ感染者が増え、授業全てがオンラインだが、それ以外は特に問題なく過ごしていた。オンラインの良いところは登下校の時間が無いことだ。しかし、時間が余ったせいで、学校がある日は行かなくて良い、妹の他の習い事の送り迎えまで行かされることになった。面倒だなぁと考えながら道を歩いていると前から人が歩いてきた。妹と同じくらいの女の子にベビーカーに乗った男の子、ベビーカーを押しているのはまだ若いお母さん。

あれ既視感。そう思った矢先、女の子とバチッと目が合った。
「〇〇ちゃんの」〇〇ちゃん。はっきり聞こえた。妹の名前だ。
「お母さん！」
「違いますけど!!」

閉ざされた心の扉

中二

普段なら耳に入ってこない「カチカチ」という音、今日はやけに大きく聞こえる。
私の家には困っている時に助けてくれる人がいる。その人とは、家族の中で一番話していると思う。学校の事や日常生活の事、いくら話しても内容は尽きない。でも、その中に勉強の話が出てきたことは一度もなかった。「一度もなかった」というより、私が話してほしくなかったのだ。なぜなら私は勉強が苦手だからだ。その人が言うには、三人兄弟の中で真面目な部分は一番だという。けれど、「やる気だけあっても頭がよくなかったらいい事がない、意味がない」と私は毎回思う。勉強が苦手な私は、解けない問題があると、悔しい気持ちで何も考えたくもやりたくもなくなり、今まであったやる気まで吸い取られていく一方だ。
でも、鉛筆を持ちしばらくの間、紙とにらめっこをする。自分でも今、何もやりたいのかわからない状態、思考停止状態で勉強を続ける。結局、聞いていないから同じことばかり言われてその人に怒られる。そんなことをもう何回繰り返してきただろうか。私が勉強する時は、毎日がこんな日々だ。怒られて、出来なくて、ムカついて。
自分の心の中で文句を言っている。けれど、それは本当に心の中で抑えられているだろうか。態度や姿勢でオーラが出てしまって伝わっているのだろう。
「だって、わからないんだもん」
「何回同じことをやっても頭の中に入ってこないんだもん」
ただの言い訳に過ぎない。自分でもわかっている。言い過ぎてしまった。でもなぜか、私の心の中でついてしまった火は消火しようと思っても消えてくれないのだ。私は気づくと心の扉を閉じてしまっているのだ。毎回、後悔する。そんな自分がとても情けない。
しかし、その人は二言三言小言を言ったあと、夕飯の準備を黙々と始める。ごはんが出来ると、「ごはんできたよ」と明るい声で料理を並べていく。私が食べ終わる

頃には、弟と妹のお弁当を詰めて出かけていく。まるで風に吹かれて飛んでいく綿毛のような人だ。私たちはつながっているのだが、何となく落ち着かない。私が綿毛を吹いてしまったかのような気持ちになる。時間の合間を縫っては、私の質問に答えてくれる。たとえ、私がどんな態度をとっていたとしても。怒っている人なんかに説明なんかしたくないはずだ。そんな時間があれば、多忙なその人は違うことに使いたいだろう。消火活動に時間のかかる私に教えるなんてもっと疲れるだろう。

私は、勉強の出来は良くないし一番になる事は出来ない。けれど、一番話してお互いの心がわかりあっているお母さんが言ってくれた私の長所を生かせる場を作りたい。そして、その大事な綿毛をフーッと吹き飛ばす風にならないように、一本一本使いたい。

心の扉は閉ざされない。

みひろ惑星とチャウチャウ星人

中二

チャウチャウ星人。名付け親は父だ。都合が悪い時、言い逃れできなくなった時、言ってしまえば自己中の時にやってくる。

私の両親は、厳しい。母はいつもは笑顔だが、怒ると相当怖い。父は怒る頻度でいうと母よりは少ない。その代わりと言ってはなんだが、一番怖い怒り方をする。口調は怒っている感じはないが、逃げ道がなくなる怒り方をする。例えるとしたら塀をつくるような感じで、

「さっきこうやって言ってたよね？　なんでこうなるの？　おかしいよね？　じゃあこうなるよね。」

と父の低い声で言われてしまえば普通なら、すみませんでした。となると思う。でも考えることが父とほぼ同じ私は、何でもかんでも父の言っていることが私の言いたいことと合っていて何か言いたい。このまますみませんでしたと言ってしまったら負けてしまう気がする。という謎の気持ちがあり、そんな時に来るのがチャウチャウ星人。怒られているのだから私が悪いのに何か言いたい時の最終兵器だ。「チャウチャウ」とは、「違う違う」の

略である。私の悪い口癖になっている。「チャウチャウ。そういう事じゃなくて。」と続くのがお決まりだ。もちろん本当に違う時もある。でもその大半が本当は何もないのに言っているだけ。それを見透かしているのか父はチャウチャウ星人が現れると「何が違うの？」とセットで返してくる。そうなるともう言うことはない。勝ち負けではない。でも私の負けである。自分でも分かる。父に口で勝つなんてできない。そして勝てる日は来ない。それを分かっていても言ってしまうのが私である。

いつも意地を張っているのは私一人。言っていることは大抵両親が正しい。大好きな兄とちょっとした言い合いになったとしても優しい兄は言わないけれど言い合いの元は私で、その後プリプリ怒っているのも私である。そういうちょっと何かあった時にもやってくるのがチャウチャウ星人。心の中にもやってくる。「チャウチャウ。私は言いたいことを言い過ぎただけ。」と何も違わないのにやってくる。

本当の素の自分は家族にしか出せない。いわば猫かぶりである。友達に怒ったりなんかしないし、例えチャウチャウ星人がやってきたとしてもそれを口に出すことはしない。もし友達に家での素の私を見せてしまったらみんな離れていってしまう気がする。そんな素の私を出しても受け止めてくれる家族は偉大だと感じる。私は家族の中で一番わがままで、自己中だと思う。そんな私だけれど、最近やっともう少し素直になろうと思えるようになってきた。少しずつでもいいから。焦らなくても少しずつでも治してもっと周りに目を向けられるようになりたい。と思っていた。そんな気持ちの変化がある事に自分でもびっくりした。でも思っているだけではどうにもならない。どうしたら治るのか分からないけれど治したい。と心の片隅で思っていた。

いつか自分に正直になれる日は来るのだろうか。チャウチャウ星人が来なくなる日は来るのだろうか。とずっと思っていた。いつも言うつもりはないのに「チャウチャウ」ととっさに出てしまう。生まれてこの方私という惑星に住みついているチャウチャウ星人を絶滅させることは百パーセントに近い割合で難しい。だったら一匹くらいいてもいいじゃないか。辛いことがあったらどこからともなく現れるだろう。そんなチャウチャウ星人という私の惑星にしかいない生き物を背負って生きていくのも素の私のだからいいじゃないか。そんな風に思えるようになった私は少し成長したのかもしれない。

盛りすぎない中身

中二

十二月三十一日。藤井風が歌い終わった頃。毎年香るすまし汁の良い香りが鼻をかすめる。

「みなさんのお家のお雑煮には何が入っていますか。」

「鶏肉とかー、人参とかー」「あとは焼いた四角いお餅ー」

え、違う違う、ほうれん草と丸い焼いてないお餅でしょ。何と勘違いしてんの。

「そうですね。先生のお家のも鶏肉とかたくさん入っていますよ。」

???　は。私が間違ってんの？　は？

何年か前に起きた事件。「小遥のお雑煮事件」これは思い違いというわけではなく、私の家のお雑煮が一風変わっていただけ。そんなことは露知らず、大きなショックを受けたのだった。そして、帰宅するやいなや

「お母さーん、お雑煮って何ー。」

「毎年食べてるやろ。ほうれん草と丸いお餅が入っとるやつ。」

だよね。うん。私が間違えるはずがない。

「あー、せやけど、関東は焼いた角餅なんやで。知っとった。」

え、今何て？　焼いた角餅ぃ？　ということは私も合っていて、他の人達も合っていた？

予想外な答えに私は目を丸くした。

ふっすすすすすっ。思わず出た笑いがテレビの音に吸い込まれていく。あの時の私は自分に自信がありすぎて少し笑える。そのくせに常識を知らないというかなんというかどこか抜けていてマヌケだ。

こんな風に私の物知らずが原因の事件はたくさんある。そのせいでか、だんだんと自信を無くしているような気がする。それでもプライドだけは無駄にあるものだから困った。心なしかテレビから聴こえてくる曲も暗い。毎日、毎日、自分を隠し、理想の自分を演じる。着飾るために何枚も、何枚も、心を服で覆う。厚着をしすぎて毎日が重い。

「小遥ー。ちょっとお雑煮の出汁味見するかー。」

母の明るい声で気が付く。「飲む飲む」と明るい声で返事をしつつ立ち上がる。腰がメキメキと悲鳴を上げる。どれだけの時間同じ体勢で座っていたことか。

母が「ほい。」と小皿に注がれたすまし汁を渡してくる。湯気で眼鏡が曇る。すまし汁を口に含むとじんわりと体の奥から温まる。さっきまでの暗い気持ちも全て流してくれるようですらある。

しかし、着飾る自分までも洗い流されるわけではない。それでも、家のすまし汁のように温かく、家のお雑煮のようにたくさん盛りすぎない自分でありたい。

涙と罪

中二

公園の木の傍で、お母さんに背中をさすられながら泣きわめく彼女。少し離れた所にいる私とその隣にいるもう一人の友達が、やってしまった、と後悔するのは目の前の光景を理解する三秒後である。

鬼ごっこか、木登りだったか。もう覚えてないけれど、たしかそんな遊びをしていた。幼稚園から一緒の幼なじみである親友と、小学校三年生で同じクラスになった友達と。私と友達は遊具の陰に隠れたり木に登ったりして、追いかけてくる親友から逃げていた。必死に私達を捕まえようとするも、ギリギリのところで逃げられ悔しそうにする親友を見て、ちょっとした優越感に浸っていた。捕まってしまうかもしれないという緊張と、絶対に捕まらないという自信が合わさってドクドクと心臓が音をたてていた。ちょうど友達と同じ木に登って、親友の「待ってよ」なんて言葉を右から左へ流していた。私と友達はいつになっても私達を捕まえられなくて悔しそうにしている親友が面白かった。二人で顔を見合わせて、クスクスと笑ってみせた。私達からしてみれば、その笑みはただの笑みで、悪意も何もない。でも、彼女からしてみれば悪魔のような笑みだったのかもしれない。二人がかりで自分を見下ろして、嘲笑って。悲しみや苦しみ、恐怖や憎悪が膨れていって、彼女の中で何かが弾ける音がした。大きな瞳に涙が滲んで、やがてぽろりとこぼれ落ちた。一度涙をこぼしてしまえば邪魔するものはもう何もなくて、年相応に泣きじゃくった。愛娘の泣き声を聞いて駆け寄ってきたお母さんが、ゆっくり彼女の背中をさする。その手はとても温かく優しさに満ちていて、彼女の母の愛を感じた。一緒に遊んでいただけなのに、友達が急に泣きだして頭の中がハテナでいっぱいだった私達も、自分達が泣かせてしまったんだと察した。友達を泣かせてしまったという罪悪感が私の身体中に巡っていって、心臓の音は先程よりもずっと大きく速く、血管を流れる血は熱くて燃えそうなほどだった。鼻がツーンと痛んで、ああ私も泣いちゃいたい、なんて思う。隣から、「どうする、謝る?」という声が聞こえてきてハッと我に返る。謝るか、謝らないかの二択をつきつけられ、おそるおそる前者を選んだ。二人でそっと地面に降り、大きな音をたてないように慎重に彼女の元へ

行く。
「あの……ごめんね。」
他に言う言葉が見つからず、ごめんねの四文字を口にした。
「なんで謝るの?」
顔を合わせられずに足元に向けていた視線を上げる。彼女は涙の跡が残っている顔で、さも不思議そうにこちらを見つめていた。
あの日のことはこれくらいしか覚えていない。結局、彼女が泣いた理由すらも聞けずに終わってしまった。私達が原因で泣かせてしまった訳ではないかもしれない。でも、ふと目を閉じるとあの日の罪悪感が押しよせてくる。記憶の奥底にこびりついて離れない。私はあの日、人を泣かせてしまうことの恐ろしさを身をもって感じた。こんなにも罪悪感で満たされるなんて、と。学校の先生が言う人を傷つけてはいけません、という言葉よりもずっとずっと効いた。
もう泣かせたくない、笑っていてほしい。私が罪悪感にのまれたら嫌だもの。そう思いながら、あの日の公園を通り過ぎた。あぁ、つくづく私は自分勝手だ。

ふとんと私

中三

私の宝物は、ふとんです。なぜこれが宝物かというと、一つめの理由はずっと昔から一緒で、愛着があるからです。小学二年生の頃からずっと使っています。夏でもこのふとんはずっと一緒だし、冬はこのふとん一枚です。
二つめの理由は自分のにおいがするということです。私は自分のにおいが大好きなので、このふとんのにおいが大好きです。ずっとかいでいたくなります。ですが、ふとんなので必ず年に一回は洗わなくてはなりません。私はこの自分のにおいがふとんからしなくなるのが嫌なので絶対洗いたくありませんが、親に無理矢理洗わせられます。洗って干した後の柔軟剤のついたふとんをかぐと、とても悲しくなります。
その宝物とはたくさんの思い出があります。小学二年生の時はふとんをスカートにしてプリンセスごっこをしました。三年生の時は一緒にドライブに連れていってたくさんの夜景を見ました。いつも自分で動けなくて可哀想だなと思って、ふとんを自転車に乗っけて近所を漕い

だこともありました。また、自分はプールに入るのが大好きなのですが、ふとんはプールに入ったことが無いのは可哀想だなと思って、親に見つからないようにこっそりお風呂に入れさせてクロールを教えていたら、親に見つかって怒られたこともありました。

ここまで読んだら、私だけがふとんに尽くしている様に見えますが、それは違います。例えば、なにか嫌なことがあったとしても、ふとんは動かずに真剣に私の話を聞いてくれます。嫌なことがあって泣きそうな時、泣き顔を親に見られたくないなと思ったらふとんが私を隠してくれます。そのまま私が泣き止むまで、ずっと抱きしめていてくれます。

ふとんがいるだけでとても良い気分になったり、がんばろうと思うことが多くなりました。例えば、この勉強が終わったらふとんと遊べる、勉強がんばろう。となったり、ふとんと一緒に寝るの楽しみだな、と思ったり。ふとんがいるだけでテンションが上がって、嫌な気持ちが少し無くなります。

もしもふとんが消えてしまったら、私は家に帰ろうと思わないし、友達とけんかしてもなぐさめてくれる相手が居ないから一人でストレスを溜めこみ、私はこのふとん以外のふとんで寝たくないので、冬は寒さに耐えられずに死んでいたかもしれないし、ふとんが居ないというストレスで死んでいたかもしれません。

このふとんという宝物が無ければ、私は死んでいたかもしれません。だからこのふとんをずっと大切にしようと思いました。

わが家のカラオケ大会

中三

「セールで安くなってるから買っちゃおうか。」

最近、わが家ではコロナ禍の影響もあり、お家カラオケができるマイクを購入した。家族みんなに予定がない休日は、カラオケ大会を行うのが日常である。母は大体歌おうとせず、私と父が歌っているのを見て手をたたいたり、私と父の歌の採点をして楽しんでいる。そんな母の口ぐせは「三十点。」である。私は「八十点」のつもりで歌っているのにな、と自己採点との大きな違いにいつも笑ってしまう。

三十点の私は、勿論歌が上手い訳ではないのだが、父は私よりも重症な、耳を疑う程の音痴である。しかも最近は、老化でろれつも回らなくなってきており、一度は絶対に歌詞を噛んでしまう。そんな父が歌っている時は、私も母も父自身も大爆笑である。

「そんなに笑うなら歌ってみろ！」
と父が母にマイクを渡しても、母は決して歌おうとしない。
だがつい先日、またいつもの様にカラオケ大会が開かれた際に、ほろ酔いだった母が
「じゃ、先陣切ります」
と珍しく自らマイクを手に取り、歌った。古くさい変な曲で、こんなことを言ったら母に怒られてしまうかもしれないが、まさに「昭和」の音色で、聞いたことのないメロディーだった。
だが一つだけ分かった事がある。それは、母の音程が絶対にあっていない事だ。そう、母は「超」が付くほどの音痴で、それが恥ずかしかったのか、私たちのカラオケ大会に参加していなかったのだ。
母の想像もしなかった音痴すぎる歌声に私と父は、いつものように大爆笑するのではなく心の底から心配してしまい、終始真顔になってしまった。
先日、家庭科の授業で「音痴は遺伝するものだ」と学んだ。お母さんやお父さんが子供を寝かしつける時に歌った歌の音程やリズムが間違っていた場合、子供はそのまま身に付けてしまうためだ。その事を父に言うと、父は「よく、ママは玲那に子守歌を歌っていたよ。だから玲那は音痴なのかもね。ちなみに俺もギター片手によく歌っていたよ。」
と自慢げに言っていた。母も父も絶望的な音痴なのだから、自分は音痴に決まっている。これは遺伝だ。と自分に言い聞かせることができ、ある意味母と父が音痴である事を知れてよかった。
だが、肝心な事を忘れていた。それは私の音痴が将来、私の子に遺伝するかもしれないという事だ。私は寝かしつけの際、絶対に子守歌は歌わないと心の中で強く誓ったのであった。

妹。

中三

「姉」である事がいつから嫌いだったのだろうか。
私には三つ下の妹がいる。一緒にいると基本的に妹とケンカばかりだ。最近は、部活や妹の受験などで一緒にいる事も少ないので、当然のようにケンカも口数も減っていった。昔よく一緒にやっていたゲームや犬の散歩もしなくなり、きっと普通なら少しさびしいと思うはずが、少し「姉」という名札が取れた開放感を感じていた。
というのも、自分が「姉」という存在であることが嫌だからだ。妹は自分より優れている面が沢山ある。運動

神経がピカイチ良くて、頭も良い。ゲームも上手で、男女問わず色んな人と仲が良い。私が行けなかったピアノのコンクールにも妹は行った。「自慢の」妹だ。

妹と比べて私は、頭が良い、運動がすごいなどそんな事はなく、少し勝っているなと自信があるのは、水泳と友達の数くらいだ。

私より優れている妹に対して「うらやましい」と感じていた。何より一番うらやましかったのは「妹」である事だ。「しっかりしてよ、お姉ちゃんでしょ。がまんして。」この言葉が嫌いだった。絶対に「妹」は言われない言葉だ。

ある日、妹とケンカをした。結構な言い合いをしていて、妹は半泣き状態。そんな時に、「お姉ちゃんなんだから、妹を泣かせないの！」と母に言われた。私は反発して妹に「私だって好きでお姉ちゃんやってないのに。妹なんて欲しくなかった！」と言ってしまった。絶対に言ってはいけない言葉だと理解していても、イライラしていたその時の私は、ずっと溜めこんでいた「姉」である事の苦しさを吐き出せてスッキリしていた。

そして二カ月後くらいに私の誕生日がきて、妹からは手紙をもらった。二カ月前のあの出来事は、時が経つにつれ、何事もなくなっていった。そのため、「ごめん」というのも気まずくて言えていなかった。そんな状態で手紙をもらったので驚いていた。

手紙には、「ねーねがお姉ちゃんでよかった！」という文が目に入った。あんなひどい事を言っても、私を姉でいてくれてよかったという妹に罪悪感を強く感じていた。その分嬉しさもあった。こんな妹を持ってて良かった。

姉で良かったと思った。この幸せは姉にしか経験できない幸せだ。そんな私は単純なのかもしれない。

その手紙は今でも大切にとってある。あれ以来、妹から手紙をもらう事はなくなった。だが、またいつかくれるとひそかに期待している。私はきっと誰よりも幸せな姉だ。

やっぱり、お姉ちゃんって最高だ。

弟と私

中三

五時四十五分。私がリビングで朝ごはんを食べているとき、弟は気持ち良さそうに寝ている。そんな寝顔を見て「寝ていればかわいいのに」なんて思う。私が家を出るときも弟はまだ夢の中。

十八時。部活が終わって帰ると座りながら寝ている

弟。器用なものだ。ごはんを食べてお風呂に入って、それ以外はそれぞれ自分の部屋にいる。寝るときに「おやすみ」と声だけかけて就寝。思い出すと弟はいつも寝ている。楽しく会話なんてほとんどない。

お姉ちゃんは不満です。生活だけ見るとあたり前で何ごともない一日。「あたりまえは普通じゃない」と聞いたことがあるが、そこに感謝は全く感じられない。今の生活に私は不満を感じる。弟のせいだ。

昔から、弟なんて大嫌いと言っていた。毎日けんかばかりで、真似ばかりするくせに私よりも上手くやって親や先生にほめられる。あまえ方が上手で親も取られた。「いなければよかったのに」といつも思っていた。それでも、いつも一緒だった。隣にいるのがあたり前だった。小さくてなまいきな弟。

弟は変わった。それは突然ではなかった。春から一カ月、二カ月と時が経つにつれて並び、ぬかされた背。背丈とは逆に、低く聞こえにくくなった声。中学生になったとたんに目に見えて弟は変わっていった。

それは外面だけでなく、内面もだった。次第に「ん、分かったよ」と空返事ばかりするようになった。遊びに誘っても「めんどくさいからいや」と私なんかを相手にしなくなった。そんな変化に私はついていけなくて、ただただ見ているだけだった。成長している証拠なのにうれしくなくて、胸の奥がチクチクした。そのチクチクはやがて心にぽっかりと穴を開けた。

穴は埋まらぬままで、時間だけが過ぎた。友達との帰り道、その友達の妹さんに偶然会った。友達は「あ、○○ー！　気をつけて帰ってね」と手を振り、妹もにこにこしながらそれに答えていた。まわりから見ればとても仲の良い姉妹だろう。ほほえましい場面だ。しかし私はそのやりとりを見るのが嫌だった。他にも「お姉ちゃんとここ行ったんだ」「この前、弟がね」と話を聞くたびに苦しくなった。兄弟なんていらないしあんなに嫌いだと思っていたはずなのに。

私はあたりまえが変わったのがいやだった。けんかをしても仲直りした後は楽しかった。いつも弟のほうが上手くても私の方が先に始めていたから最初は教えてあげていた。二人でした悪さを隠したこともある。どんなに嫌いでも、隣にいつもいたのは弟だった。私も変化が必要らしい。

最近あったこと。この前弟は「一緒にゲームしない？」と好きな漫画のスマホゲームに誘ってくれた。また負けた。が、とてもうれしかった。開いた穴がなくなった気がした。単純なお姉ちゃんだな、と思う。

ゲームに誘ってくれたのは弟が変わったからなのか。もしかしたら私も何か変わったのかもしれない。そんな

淡い期待。これからどうなるのだろう。二十時。今日は負けないからね。

褒め言葉

中三

我が家にいる猫はツキノワグマだ。真っ黒だが首元に白い模様が少しある。他の猫より一回り大きく、のっしのっしと歩く様子は特にツキノワグマに似ている。

我が家の猫であり家族だから、この猫のことはよく知っている。だからこそ、アレに似ているコレに似ていると共通点や近い所を見つけられる。言葉にできる相手の特徴を見つけると、相手のことをよく知れたようでうれしくなる。

では、言われた方からしたらどうなのか。「あなたは〇〇に似ているね」という言葉は、相手からしたらうれしくないときもあるのではないだろうか。

昨年、妹を一度ものすごく怒らせてしまったことがある。その頃妹は、おしゃれをすることに興味を持っていて、家にある洋服の組み合わせを色々と試していた。そして良い組み合わせが見つかると、

「ファッションショーするよ。」

と言って家族を集め、紹介していた。

六回目のファッションショーでのことだ。得意気な顔をして登場した妹に、家族揃って口々に褒め言葉を投げかける。そんな中、余計な一言を言ってしまった。

「全体的に色味が牛に似ているね。」

私は牛が好きで可愛いと思っていて、妹はそれをよく知っていた。だからそれを踏まえた褒め言葉のつもりだったのだが、妹は明らかにむすっとした表情になった。

その後、数日は口を利いてくれなかった妹だが、最終的に何が嫌だったのかを教えてくれた。本当によく考えて選んだ自信作だったため、動物に例えられたのが嫌だったのと、最近気になっていた自分の体型を牛みたいだと言われたようで、嫌な気持ちになったのだという。

確かに、どんな物にも物事にも、短所と長所、嫌われる面と好かれる面がある。それを例えとして使うということは、どんな例えも盛大な皮肉になりかねないということだ。

かわいい、きれい、まじめ、おだやか、陽気といった、はっきりとした褒め言葉も、普段使っていたり言われたりする中で、裏に潜む意味を感じることがある。それでもはっきりとした褒め言葉はたいてい素直に受けとることができる。

例えというのは、自分の意図を正しく理解してくれる

人にしか使わない方がよい、リスクの高いものなのかもしれない。
かわいいと言って褒めるとき、「ツキノワグマみたい」と話しかけるとき、我が家の猫はじとーっとした目でこちらを見る。気を悪くさせてしまっただろうか。

思い出はモノクローム

中三

西日がレースカーテン越しに差し込むこの部屋で、父と向き合う。間には古いオセロゲームが横たわっている。
バザーで買ってもらった時から、我が家にあるオセロ。父が黒で、私が白。いつだって白は黒にのみ込まれてしまうけれど、次こそはと勝てるまで勝負を続けた。
もしかしたら勝利の決め手は使う色なのかもしれないと思いつき、黒を手に挑んだこともある。その時のみ込まれるのは黒であったけれど。
父は考える時間がものすごく長い。相手が置き終わったら、待ってましたと言わんばかりのスピードでひっくり返しにかかる私とは対照的に、いつもものすごい時間をかけて色々呟きながら考え込んでいる。飽きてしまう私は、いつもおしゃべりを始めるのだ。
六年ほど前の夏のことである。その夏は、父の四十歳の誕生日だった。いつものようにオセロをはじめ、いつものように話していた。
「今がパパの三十代最後の夏ってことでしょ。それってもう二度と三十代には戻れないって考えると悲しくならないの。」
「確かに、三十代には戻れないけどさ、それと同じように昨日にだって戻ることはできない訳だよ。全く同じことが起こるような日はもう来ないからね。」
西日がだんだんと沈んでゆく。明日の自分がどれほど願っても戻れない今日、私は何をしただろう。自分が感じていたよりもずっと早かった時の流れに、置いていかれてしまうような気がした。
それから、今日が昨日となり、今が過去となり、それをずっと繰り返していたら、私はいつの間にか中学三年生になっていた。
夕食のあとにオセロで父に勝ったことも、作文が書き終わらないと友人に泣きついたことも、もうみんな過去のこととなってしまった。
とっくの昔に日は沈み、もうすぐ今日が昨日になる。今日、私は何をしただろう。
また日が昇り、明日になれば今日あったことも気持ちも、記憶の中からこぼれ落ちてゆく。それでも、その一

つ一つが大切なのは確かなのだと思う。毎日違った「今日」があり、一日が終わると、一つずつ違う「思い出」ができる。まるで、ゲームが終わった後のオセロのように。

白と黒の並び方は、もう二度と同じようにはならないかもしれない。黒が勝つ日も、白が勝つ日もある。

それでもまた、さらに古くなったオセロを取り出して、父に言う。

「ねえ、オセロしよう。」

不器用

中三

父が苦手だ。私は、中学一年生から中学二年生の中期にかけて、家族に反抗する時期があった。母のおせっかいも、兄の優しさも、妹の素直さも、当時は全てが迷惑だった。が、その中でも群を抜いて嫌だったのは、父の存在だ。

頑固で、物言いが全部きつい口調で、声が大きすぎる父。しかし無視をすると、その大きな声ときつい口調で叱られることは目に見えている。だから、

「うん。そうだね。かもね。」

などと、適当に返事をしてみせていた。

土日の外出の誘いも、疲れていると一言伝えるだけで、全て断っていた。あと少しで父が帰ってくる、と考えながら帰り、少し距離が置ける、と考えながら学校に向かう日々だった。自分にとって学校とはそういう場所だったのだ。

そんな中、父の転勤が決まった。昔から父は異動が多く、家族もいつもそれに巻き込まれてきた。生まれた時からの仲の幼なじみと別れたり、転勤にはろくな思い出がない。

しかし、今回初めて転勤に対して喜びを覚えた。その頃はちょうど、武漢で発生した謎の肺炎が日本でも流行しはじめた、とコロナウイルスについてのニュースが報道されていた頃だ。うつったら大変だと送別会も行なわれず、一人静かにこの家から出て行ったことを覚えている。

感染がどんどん拡大していき、学校も休校という措置をとり、家には父もおらず、心ゆくままにゆっくりできるとそう考えていた。しかし事態はなかなか収束せず、父は全く帰って来ることが出来なくなった。どんな場所より家が大好きなはずなのに、何かが足りないような思いがずっと心の中に残って、消えなかった。

数カ月が経ち、一通のメールが届いた。

「なんか休校らしいけどしっかり勉強していますか？何だか大変だけど一緒に乗り越えようね。何かあったら相談してね。」
父からだった。たった三文なのに、父の想いがぎゅっと詰まっていて胸が苦しくなった。自分がこれまでずっと父にしてきたひどい言動が、全て情けなく思えてならなかった。色々な感情が交錯して私はうん、としかこたえられなかった。しかし確かに、不器用な父と不器用な娘との心の壁が少しだけ無くなった気がした。
伝えることが難しくなってしまうのが反抗期だ。だからこそ、想いを伝え合うことが大切なのだと思う。不器用だから言えない、ではなく、不器用だからこそ伝えようとすることで、距離はきっと縮まる。私はそう思う。
休校期間の後半頃からは、家族と居る時間がすごく楽しくなった。今では毎日、夕食の時間になると父に電話をかけている。
「ああ、今日は何を話そうか。」
そう考えながら、今日も家路につくのである。

一年草

中三

夏の始まりの日のことだった。母が庭にミニヒマワリの種を植えた。母は汗をかきながら家に入り、「終わった」と言った。しかしそれは始まりに過ぎなかった。
「あのミニヒマワリ、想像以上に大きく育ってしまったんだよね。」
軽井沢の一本道を家族で歩いていた時、母がこの間植えたミニヒマワリの話を始めた。母は、最初に弟の身長くらいのミニヒマワリの大きさを想像していたらしい。しかし想像をはるかに超え、そのミニヒマワリは私の身長にまで迫っていた。母は間違えて普通のひまわりの種を買ってしまったのだろう。
「隣の家に迷惑だから、もう切ろうかな。」
母がそう言った後に父が言った。
「ひまわりって一年草だっけ。また来年か。」
一年草。一年草とは一年しか咲かない花のことをさす。種を蒔いたその年のうちに発芽し、花が咲き、種をつけ枯れる。一年草はその一年のためだけに生まれ、咲きほこり子孫を残す儚い植物なのだ。そう考えながら、私は

一本道を歩いていた。
少し進んだ所にひまわり畑が見えた。ひまわり畑に咲いている大きなひまわりを見て私は思った。このひまわり達は今、一年の中の最初で最後の夏を迎えているのだろうと。
この夏は私達からしてみれば毎年やってくる夏だが、このひまわり達が過ごせる夏は、もう終わりに近づいている。春に誕生し、夏は太陽のように輝く大きな花へとひまわりは成長していく。この夏が終わると種をつけ、子ども達を生む。そして冬になり、何もなかったかのように茶色に染まり消えてゆく。
大きなひまわりを見つめながら私はこのひまわりは、人と似ている部分が多いと感じた。一年草の代表ともいえるひまわりは、花が一度なくなったら新しい実をつけることは出来ない。このような儚く脆い生き様が私達の心に何かを与えるのかもしれない。一年草はすぐ枯れてしまう。だからこそ魅力があり、目を離すことの出来ない植物である。
一年草が生きる一生は人の人生とどこか似ている。私達の人生は一年草なのかもしれない。人は親から産まれる。そして成長する。人を笑わせたいと思うようになる。言葉を覚える。服のサイズがどんどん大きくなる。これが人間でいう「春」の期間だ。
「夏」、人は競争しながら必死に生きるようになる。なにもかもがはじけ、全てを感情に変えられるようになる。
人間の「秋」は少し落ち着き、余裕があらわれる時。秋が終わると「冬」がやってくる。冬は考える時間が多くなる。昔のことを思い出し、思い出にひたる。人間の一生はこのように春夏秋冬で表せるのではないか。
桜は一年草ではない。何年もの間その地にとどまり、多くの人々に愛される。花が枯れても来年新しい花を見ることが出来る。
そんな桜を私は捜真の窓から眺めていた。この前家族で見たひまわりとは全く違う道を生きる花だ。桜には茎ではなくしっかりとした幹が桜を輝かせていた。今はもう前に咲いていたひまわりは枯れ、そのひまわりの子ども達が輝きだそうとしているのだと思いながら歩きだそうとしたその時、ある桜の枝が折れているのを見つけた。折れている部分は枯れていたが、その他の桜の枝は折れている所を隠すかのように大きく美しく成長していた。
桜は年を重ねるごとに美しく清らかになる。このような美しさが長年多くの人々をとりこにするのだろう。
しかし人間は一年草のように、失敗した所を上手に隠せる力は持っていない。罪や過ちはその人の欠点になってしまう。だから私達は常に正しく歩まなければならな

い。今、私達は一生の中の夏を生きている。この最初で最後の人生の夏をどう大切にするのか、私達は選ぶことが出来る。

人生は一年草だ。その一生の人生の中に様々な物語がある。得意分野を光合成し、周りの人々を豊かに出来る力、常に根をはり強く生きる力がある。その力を活かして、家族で見た大きなひまわりのように咲きほこる人生を私は歩みたい。

私の武勇伝

中三

今日はドライブ、それも新品のマイカーで。助手席には今日限りのお友達。目を輝かせて言うのだ。

「まおちゃんって運転できるんだ！」

「うん！　すごいでしょ……あれ、私、免許持ってないよね？」

ストップ。幸せな睡眠時間は終わりを告げる。寝ることが大好きだけど、夢を見る時はより幸せだ。夢は不思議でこその世界だと思う。成人すらしていない私に車の運転ができるはずがない。それに気づいたら夢とはお別れするんだ。そう、お別れできるはずなんだ。

双子の里緒は部活が午前中にあるらしい。確か、試験休み一日目。朝七時から父と里緒が会話しており、うるさいと思ってもう一度寝ようと思った。が、空気が冷たい。のに、布団は暖かい。暖かさでぼんやり寝ていたと思ったら、冷たい空気に叩き起こされる。しばらく夢と現を行き来すると、結局睡眠欲に流されていた。

その時、隣の時計を見ればまだ八時だった。いつもその時間には学校にいるから、と理由をつけてほんの三十分だけ寝るつもりだったのだ。

……あれ、今時間経った？　ほんの一瞬、目を閉じていたような感覚。玄関が開く音と祖父の大きな声が頭に響く。どうやら、病院から帰ってきたらしい。へえ、朝八時から通院ね。元気だこと。すると入れ替わるように母がいってきます、と挨拶。多分買い物だろう。本当に皆朝から元気だ、と寝ぼけた頭の中で何度も思い、二度寝した。いや、もはや三度寝である。

おいおい、嘘だろ。恐ろしい声が聞こえる。十三時ちょっと過ぎくらいに帰ってくるはずの里緒の声。だって、今は朝八時。そうか、大雨か何かで帰ってきたのか。そう信じて隣の時計を見ると、驚きすぎて声が出なかった。

じ、じ、十二時⁉　目は完全に覚め、急いで里緒の方へ駆け寄る。制服姿の彼女はパジャマの私を嘲笑う。ど

うやら部活が早く終わったらしい。
母と祖母は大笑い。いつ私が起きてくるのか楽しみにしていたようだ。里緒は羨ましいと言うが、「いいだろう！」と言うのは口だけ。正直に言って頭は重たく、何だか疲れている感じがする。全く、早起き万万歳だ。
いつも早く寝るクセに、十二時なんかに起きたら好きなことは全くできない。何より、朝ご飯を毎日食べる、という習慣を破ったことをとても悔やんだ。明日は里緒より早く起きてやる！　と誓ってその日は眠った。
やばい、遅刻する！　家を飛び出し、坂をものすごいスピードで下る。と、突然マンホールからカバが飛び出す。ぎゃーぎゃー悲鳴を上げながら何とか家に避難。ふう……カバから逃げ切るほど足速くないよね？
ストップ。隣の時計は八時を指して笑っていた。

夢先案内猫（ゆめさきあんないみょう）

中三

中学二年生の夏頃。コロナウイルスの影響により、学校はしばらく分散登校が続いた。
その日は午前中だけ学校に行くことになっていたので、学校から早く帰ることが出来た。そのため、私は学校帰りにお気に入りの公園に寄った。その公園はいつも通る川沿いのすぐ近くの道にある。ざわざわと耳鳴りがするほど静かで、沢山の野良猫達が一休みをしている。私もベンチに座って一休みすることにした。
……。あれ？　いつの間にか眠ってしまっていたようだ。ここはどこだろう。そう思い体を起こすと、見たことの無い場所にいた。こんな時は混乱するのが普通だが、私は不思議なことに全く混乱せず、むしろ何度も来たことがあるような慣れを感じていた。
そこは草原が一面に広がっていて、生暖かく、霧が立っていた。なぜだろうか、頭が回らない。
ぼーっとしていると、足元に白猫と黒猫が一匹ずつ近づいてきた。二匹共こっちをじっと見ていた。
数十秒経って、その二匹の猫達が歩き出した。私はま

るで感情の無いロボットのように、無我夢中で着いて行った。歩くたびに顔に当たる空気は金木犀のような、爽やかだけれどほんのり甘い、そんな香りがした。

しばらくして猫達が立ち止まった。止まった猫達の先を見ると、小さな湖があった。学校の教室一個分くらいの大きさだ。よく見ると、黒に近い藍色と透き通った水色に近いエメラルドグリーンのグラデーションになっていて、中に透明の丸い塊がいくつもあった。

気になって一つ手に取ってみると、プヨプヨとしていて少し圧をかけただけで崩れてしまいそうなほど柔らかい。「これはなんだろう。」そう思うのと同時に、無性に食べたくなってしまった。「一口だけなら……。」そんな考えが頭を過ぎり、口の中にその透明の塊を運んだ。

直径五センチにも満たず、とても小さかったので味を少し感じられるほどだろうと思っていた。透明の塊が口に入り込んだ瞬間、強い香りがして思い出した。

五歳の頃、保育園で先生に読んでもらった『めっきらもっきらどーんどん』という本の中に出てくるもちもちのなる木の実がある。通称もちもちの実だ。そのもちもちの実を想像した時と全く同じ香りがしたのだ。

それだけではない。想像していた味、食感、柔らかさ、全て想像していた物と同じだったのだ。当時、私はそれが食べたくてしかたがなかった。そんな未知なる食べ物が今、目の前に数えきれないほどある。そう思うと、すぐに食べ終えてしまいそうなほどの勢いで食べ続けた。

聞き覚えのある音で目が覚めた。五時の鐘だ。しばらく思考が停止していた。「え、何でここにいるんだっけ……？　あ、そっか。さっきまで草原にいた……はずなのに？」

周りを見渡すといつもの猫達、いつもの遊具、そして茜色の空。「まずい。」そう思い猛ダッシュで家に帰った。

家に着きすぐに草原の話を妹にしてしまった。この時の私はそれほど夢と現実の区別がつかずに混乱していた。

私はよく夢を見る。それもかなり現実味のある夢ばかりだ。草原での出来事は、そんな夢だったのかもしれない。

出来ることならもう一度あの夢を見たい。いや、あの場所は本当に存在しているのかもしれない。そうであってほしい。

いつも同じ

中三

コツン、と音がした。もうこんな季節か、と思いながら私はスノードームを机に置いた。

クリスマスが近くなると一気に私の家は華やかになる。ツリーはピアノの前に、リースは玄関、トイレには一つだけオーナメントをかざり、机にはスノードームを置く。

このように、物一つひとつを決まった位置に置くというのが私の家のルールだ。そのせいか、小さい頃から変わらずにある机の上のスノードームは、クリスマスに対する胸のときめきを思い出させるものだった。

「おやすみ、また明日。」と言って母と妹が寝室へ行ってしまうと、私は一人、リビングに残った。

いつもそうだった。母と妹は二十二時を過ぎればもう寝ていて、私は勉強や明日の準備をした後、遅れて布団に入る。

いつもと変わらなかった。私は机にノートを広げて宿題を始めようとした。すると、机の上のスノードームが目に留まったので、なんとなく逆さまにして、雪を降らせた。全て落ちてしまうと、もう一度逆さまにした。これといった理由はないのだが、ただこの一連の動きをしながら、降ってはやむ雪を見つめていた。

いつもと同じように思えた。降っている雪は、ニュートンが発見したらしい重力に逆らいもせず、落ちていた。

しかし、いつもと異なってしまった。突然、雪が降りやまなくなったのだ。スノードームの中を、雪がおどるように舞い続けるのだ。雪がおどり続ける中、スノードーム内の天使は、じっと私を見つめながらほほえんでいた。

いつにも増して静かだった。後ろにある時計が時を刻んでいるのが分かるほど。時間は確かに進んでいるのだと訴えかけるように、一定の「チクタク」という音が部屋を支配していた。

不意に、寒気を感じた。夜も更け、タイマーをかけていた床暖房が切れたのだろうか。寒さは私の足先を伝い、私の体温を奪ってきた。それでも雪はやむことを知らず、天使の向ける眼差しは、私に向けられていた。

いつも違う、何かがおかしい。そう思った時、遠くから母の声が聞こえた。開けていたはずのまぶたをゆっくり開けると、まぶしい朝の光が部屋を照らしていた。

いつもと同じようで、少し違う。そんな一日が始まろうとしていた。机に置かれたスノードーム内の天使の羽

は、太陽の光で一段と美しい輝きを放っていた。

空も飛べない私だから

中三

幼い頃、私はカメレオンになりたかった。体の色を変え、周りに染まる。そんなカメレオンに私はなりたかった。

ライオンにもなりたかった。強くて大きなライオン。それならどんなことが起きても堂々としていられると思った。

小学生になると、「悩み」を知った。友達とのトラブル、勉強、字のきれいさなど今まで無かった問題が起こった。そんな時、空高く飛ぶ鳥になりたかった。翼を大きく広げて空を飛び、暗い気持ちなんか吹き飛ばしてやりたいと思った。

そんなことを思っても、結局私は人間だった。

昨年の秋、祖母が亡くなった。

私は泣いた。沢山泣いた。先生から知らせを聞いた時、家へ帰るまでの道のり、祖母の家へ向かう飛行機の中。本当は泣かないように、カメレオンになって周りの人達のように平然としていたかった。しかし私はカメレオンにはなれなかった。学校からの帰り道、飛行機の中でもただ一人、私だけが泣いていた。カメレオンとは反対に私は目立っていた。

葬儀の日はずっと端の方で座っていた。ろくに挨拶もできず、ただ泣いていた。そんな私の姿はライオンというよりもライオンに狙われ、おびえているうさぎのようだった。

私は鳥ではないので空が飛べない。鳥が気持ち良く空を飛ぶようには、私の心はすぐに晴れてはくれなかった。今でも時々、祖母が亡くなったのは嘘ではないか、電話をかければ今までのように優しい声で返事が返ってくるのではないかと思う。

私はニワトリになりたい。三歩歩くと物事全て忘れることができるような。時々、祖母を思い出して辛くなる。佐賀県に住む祖母とはコロナが流行してから一度も会うことができなかった。それからは週に一度ほど、電話越しで祖母に会っていた。学校であったこと、家族のことなど、お喋りが大好きな祖母とは一度電話をかけると毎回、二十分以上話していた。最後には必ず「またね。また会いに行くからそれまで元気しててね」と言って電話を切っていた。

最後の電話は祖母が入院する前日だった。学校で期末試験があり、しばらく祖母には電話をかけていなかっ

た。期末試験も無事終わり、家庭科の授業で私は賞を取った。それが嬉しくて、私は一番に祖母に伝えようと思い、電話をかけた。

いつもより電話にでるのが遅かった。しばらくして祖母がでたので「あのね、今日ね」と早口で語りかけた。しかし返事は返ってこなかった。「おばあちゃん」と少し大きな声で言うと、電話の奥から祖母だと思われる声が聞こえた。呂律が回っておらず何と言っているのか分からなかった。私はすぐに受話器を置いてしまった。祖母はもう長くないと思い、涙が止まらなかった。

祖母が亡くなってから、私はとても後悔していた。学校での出来事を伝えられなかったことも、祖母にもっと電話しなかったことも、最後の電話で「また会いに行くから元気でね」と言えなかったことも。こんな私で、祖母が怒っているかもしれないと、全て忘れてしまいたかった。

ある日、母が「おばあちゃんに出会えて良かったね。李歩はおばあちゃんが大好きだったもんね」と言った。私にはその言葉が祖母からの許しの言葉に聞こえて涙が溢れてきた。

今までの出来事なんて消し去りたいと思っていたが、辛いことも祖母との大切な思い出も、消えて無くならないように大切にかかえて生きていこうと思った。

そんな時、大切な人をいつでも思い出すことができる。私は人間で良かったと思う。

雪女（オトナ）との出会い

中三

コアラのマーチの絵柄をいちいち確認しなくなった時。睡眠を幸せだと感じるようになった時。五百円だけでは遊べなくなってしまった時。最近大人になったなと思うことがどんどん増えていく。

友達が言っていた。大人になりたいと思う人はまだ子供で、大人になりたくないと思う人はもう大人なのだ。私はこの言葉を聞いて、確かにそうなのかもしれないと思った。

私が一番大人になったなと思う時は、友達といる時に思い出話をすることが多くなったことだ。

最近、小学校の友達と会った。その友達と小学校の思い出を語った。五年生の時、〇〇ちゃん××君のこと好きだったよね。あの子小学校の頃、頭良かったよねなど、次々に昔のことがよみがえる。それはそれで楽しい。昔の思い出に浸るのは嫌いではない。

しかし、その友達と別れて家に帰って、私はふと思っ

た。その思い出が「昔」という言葉で片づけられてしまうことを。そう考えると私はなんだか悲しくなった。まだ子供でいたい、そういう気持ちがあることに気づいた。私のまわりにいる大人たちは人生を楽しく歩んでいる気がしない。大人になったせいか、子供よりも魂が抜けている。私もいつかああいう大人になってしまうのかなと思うと、将来の楽しみがどんどん薄れていく。

大人になりたくない、そう考えるうちにどんどん時が流れてしまう。幼稚園に通っていた頃は、背の高い高校生に憧れていたが、あと少しでその高校生になると思うと勝手に流れて進んでしまう「時」を私は憎んでしまう。

しかし、そんな私にも大人になりたいと思うような出来事があった。それは学校の帰り道だった。私は友達と別れて一人で家まで帰っていた。

家までに一つ交差点がある。信号待ち。急に粉っぽい乾いた小麦粉のようなものがパラパラ降り始めた。初雪だ。私は嬉しくて、心の中で興奮していた。しかし、雪はどんどん激しくなっていった。

ポッケに手を突っ込み、鼻の上までマフラーを巻いた。すると急に雪が降り止んだ。あまりにも急すぎたので、私は空を見上げた。

そこには緑色の傘がさしてあった。隣には女性が立っていた。私はびっくりして何が起こったのか読み取るのに時間がかかった。

「ありがとうございます。でも大丈夫ですよ。」

とっさに出た言葉だった。ふっくらした顔のお姉さんは、「いえいえ、大丈夫です。急に降ってきましたね。」と言い、そこから別れる道まで相合い傘で世間話をした。学校の様子を私が話すと、お姉さんは懐かしそうにうなずいてくれた。雪のことはいつのまにか忘れてしまい、ホッとした気持ちになった。

私は最初、めずらしい人だなと思った。しかし、その人のことを考えていくうちに、他人のために行動できる素晴らしい女性だなと思った。素晴らしいどころじゃない。私には傘をさしてあげたいと思う気持ちがあっても、行動に移すことはできない。恥ずかしさと本当に声をかけていいか迷ってしまうからだ。

私は思った。大人になったら、この人みたいなかっこいい女性になりたいと。案外、大人っていいもんだなとお姉さんはきづかせてくれた。

今でも子供のままでいたいと思う気持ちはもちろんある。しかし、大人になってからできることもたくさんあると思う。それを実現するために、早く大人になりたいと思うようになった。

駅

中三

駅には沢山の物語がある。通勤ラッシュにもまれるサラリーマン、家族に見守られながら初めて一人で乗る電車に緊張しながらもワクワクしている小学生、改札前で別れを惜しむ人々。今日も駅は忙しく進んでいく。私はいつも通り改札を通った。

電車に揺られながら動画を流し見していると、「たった一人の乗客」というタイトルの動画を見つけた。気になって続きを見る。北海道の旧白滝駅の物語だ。

北海道では、一日の乗客が一人以下の駅が、約四百五十駅中六十駅ほどあった。北海道の鉄道会社は、赤字防止のために無人駅を廃止していくことを打ち出した。

そんな中、白い雪に包まれながら、駅とは思えないほど小さな駅で、たった一人で電車を待つ女子高生がいた。時刻は七時十六分。朝の電車はそれだけだ。女子高生はたった一人で電車に乗り込んだ。さびだらけの看板と裸電球が照らす、あたたかく小さな駅舎が、今日も女子高生を見送る。できた当初は沢山の人々に包まれていた駅で、今は一人の乗客のために、電車が動いている。

そういえば六年前、一人で新幹線に乗ったとき、最悪で最高の物語があった。

真夏の強い日差しに、爽やかな風が吹いている。私は祖父母や従兄弟のいる大阪へ行くため、新幹線に乗ろうとしていた。両親は仕事で、兄は習い事の都合で後ほど来ることになっていたので私一人だった。

当時小学四年生だった私は、たった一人で公共の乗り物に乗るのが初めてだった。それも初っ端から新幹線。毎年三、四回は行く新横浜駅の改札、待合室、ホーム。その日はやけに大きく、忙しそうに見えた。

両親もホームまで来てくれた。いよいよ出発の時間。沢山の荷物を詰め込んだ大きなリュックを背負って、ホームへ上がった。新幹線に乗り込み、三人席の窓側へ座った。両親に手を振り、新幹線は動き出した。

もう乗り慣れた新幹線。でも新鮮だ。車内でできるようにと準備していた宿題と本には手がつくわけもなく、ずっと景色を眺めては、時折流れる新幹線のアナウンスに耳を傾ける。

何分それを続けていただろうか、隣に座っていたおばあさんに突然声をかけられた。「一人で乗ってるの？どこに行くの？」

初めてのシチュエーションに少し戸惑いながら、小さな声で答えていった。おばあさんはほほえんで、初めての

新幹線、良いお天気で良かったね、と言ってくれた。何故だか少し安心した。

名古屋駅を通過するまで、おばあさんは色々な話をしてくれた。私がバレエを習っていると話すと、自分も小さい頃バレエをやっていた、発表会で舞台に立てたときはお母さんが一生懸命衣装を縫ってくれたこと、当時の私と同じ小四のときは、兄弟姉妹の世話でろくに学校にも行けなかった話など、沢山話をしてから、私はやっと宿題にとりかかった。

そろそろ着くはず。ずいぶん長い時間乗っていた。荷物をまとめて降車の準備。おばあさんも同じ駅で降りるようだ。ドアの所まで一緒にいてくれた。「切符はある？忘れ物は？」と身の回りのチェックもしてくれて、長い新幹線の旅は終わった。

と思ったら、次の瞬間、頭が真っ白になった。駅名が違う。私は「京都駅」と書かれた切符を持っている。でも駅の看板に書いてあるのは「新大阪」だ。今考えると、京都から新大阪はそう遠くないのだから、電車に乗り換えるか、新幹線で反対方向に向かうかすれば良いが、当然ながら小四の私にはそんなこと考える余裕もない。流れゆく駅の人々の中、私は一人立ちつくしていた。

もうあのおばあさんは遠くへ行ってしまった。頼れる人はいない。とりあえず人が流れる方に行こう。そうすれば戻れる道が見つかるだろう。

階段を下りた先には絶望が待っていた。広すぎる。もうどこが改札なのかも分からない。本格的な迷子になったのだ。

まだ改札は出ていない。というか出られない。ここまで来たら、私はもう開き直ることにした。改札を出ないところにお土産屋さんがある。挙動不審になりながら、とりあえずうろうろ歩いていた。

五分ほど歩いていると、待合室のあたりに見覚えのある顔があった。あのおばあさんだ。一人でうろうろしていたから、余計目立ったのだろう。

おばあさんは私に気付いて事情を聞いてくれた。きっともう泣いていたと思う。それでもおばあさんは落ち着いて、「それなら反対方面の新幹線に乗って京都まで戻れば大丈夫だよ」と説明してくれた。一方、私は焦りすぎて、何が何だか分からなかった。

二人で駅員さんのところに行って、ようやく理解した。多分もう大丈夫。おばあさんとはここでお別れだ。お礼を言ってホームに向かうと、「ちょっと待って！私も一緒に行くよ。」と私の手を取ってついてきてくれた。なんと京都まで新幹線に乗って送ってくれるというのだった。勿論遠慮した。けれどその目はまるで、本当に自分の孫を見ているような安心感があった。

焦りと安堵と、色々な感情が混み合いすぎて、涙が止まらない。おばあさんはコンビニで温かいはちみつレモンを買ってくれて、一緒に新幹線に乗り込んだ。

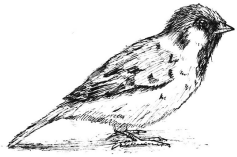
キッズケータイから母経由で祖母に連絡してもらい、無事京都に着いた。祖父母はホームまで来ていて、私と同じ顔をしている。安心と疲労感がどっと溜まって、また涙が出てきた。

祖父母に私の横のおばあさんのことを話した。祖父母は何度もお礼を言っては私の涙をぬぐう。おばあさんは「私にも孫がいるけど、知らない場所にいたらお互い心配ですよね。ありがとう！　今日の旅、楽しかったよ。」と私と祖父母に話してくれた。何度もお礼を言って別れた。

それ以来、新大阪駅には行っていない。六年前、名前も知らないおばあさんとの物語を刻んできた。あの日もらったはちみつレモンは、まだ温かいような気がした。

人は駅に何を託すのだろう。今はない旧白滝駅のさびた看板と古びた駅舎にも、物語が溢れていた。雪に溶けて消えてしまった旧白滝駅も、そこに行けば、ひょっとしたら、線路はつながっているかもしれない。一人の女子高生が、たった一人で積み上げてきた物語と共に。

今日も電車は動き出す。今日はあの駅で、どんな物語が刻まれるのだろうか。時刻は七時十六分。私はいつも通り改札を通った。



作文　高等学部

祖父の新鮮な記憶

高一

祖父はよく、「ひかるちゃん今日は学校だったの？」と私に質問をしてくる。私は決まってそうだよと答えると、祖父は「そうだったの、おつかれ様」と言う。私は心の中で秒数をカウントする。一、二、三……。

「ひかるちゃん今日は学校だったの？」

このやり取りが、私が祖父母の家に行くと日常のことと繰り返される。そう、私の祖父は認知症なのだ。

祖父が認知症を発症し始めたのは、私が小学三年生の頃だった。何だか最近、同じことを何度も言うなと感じていたが、まさか本当に認知症になってしまったとは思ってもいなかった。当時の私の心情としては、やはり当然のことだが、認知症になってほしくなかった。悲しかった、はずだった。

というのも、祖父の認知症は明るいものだったからである。最近は、無邪気になっているというのが祖父に対する私の印象だ。何故そう感じるのか、体験談を幾つか紹介しよう。

祖父は施設には入所せずに週に二回、昼間に日帰りで利用できるデイサービスという、通所介護サービスに午前九時頃から通っている。

その日が休日の場合、私も見送りをするのだが、その日の光景としてはこうだ。午前九時頃に家までデイサービスの事業者の方が迎えに来てくれると、毎度のように「俺ですか？」と驚いたように言う。それから祖父は、慌てて箪笥に手を伸ばし、靴下を手にしたあと、スピーディーに履き、上着を着て、バッグを持ち、車に乗る。

帰宅した時、決まっていつも事業者の方を「いやあ、いい人だなぁ」なんて言っている。祖父も楽しそうで何よりだ。

毎週水曜日と金曜日、私は祖父に「じじ、今日は何処に行ったの？」と質問すると、「何処にも行ってねえよ」と答える。母の情報によると、一番すごい時の答えでは「新商品の説明会に行ってきた」と言っていた日もあったらしい。現役だったころの長い間続けてきた仕事の記憶が一瞬戻ってきたのだろう。

我が家では、二世帯住宅に住んでいる祖父母を招待して、毎年ひな祭りパーティーをしている。ある年のひな祭りパーティーでは、ちらし寿司や蛤のお吸い物などを食べた。

散々楽しんだパーティーの後、私は祖父に今日何を食

べたのか質問をしに行くと、「知らねえなぁ、コロッケ食ったよ、コロッケ」

……。じゃがいもを使った料理自体食べてないっちゅうねん！　どっからでてきたん⁉　と、その日ばかりは流石に私も突っ込んでしまいそうな勢いだった。

最近の出来事では、うちで出来た柿をもぎ終わった後、今年は沢山できたなと思って柿の木を見上げていたら横で、

「来年は少なめでお願いしまぁす！」

と柿の木に向かって言いながら、手を二回叩きお祈りをしていた。

祖父のこの絶妙な声かけに正直私は、この方は本当に認知症なのだろうかとも思ってしまっている。

いつもポジティブ思考の祖父に無邪気さが加わったことにより、五歳の男の子に見えてしまうことが多々ある。

何度でも反応が新鮮な祖父に対して、家族として毎度反応するのは少し大変だが、楽しませてもらっている部分もある。その反面、新しい記憶が一分ももたない祖父と一緒にいる祖母は、本当に大変だろう。だから少しでも祖父母の力になれるよう、毎日一度は祖父母のところに顔を出すよう私も心がけている。

沢山記憶を無くしてしまうが、沢山の笑顔も運んでくれる祖父。そんな祖父を中心に私の家族はより一層団結しているように思う。

そんなお茶目なじじ、これからもよろしくお願いしますね。

赤い底力

高一

「カキーン！」静まり返ったグラウンドに快音が響き渡った。

気が付いた時には真っ白なボールが砂埃を巻き付けて私に向かって転がってきた。その時、突然、一瞬にして目の前の世界が赤く染まった。人も、空も、ボール以外の物すべてが赤く染まった。視覚以外の感覚が無くなり、と、同時に、私の耳には今まで普通に聞こえていた音の何もかもが聞こえて来なくなった。周りで練習しているチームの音、メンバーからの指示の声、何もかも全てだ。「アウト！」審判の声が無音だった私の耳に突然、響いた。無音の世界に急激に音が押し寄せてきた。チームメイトの歓声だ。自分の耳が驚きと嬉しさで震えた。

その時初めて、中学二年生だった自分が初めてレギュラーとして出た中学、高校のチーム総当たりの大会で、高校生を相手にアウトを取れたのだ、という自覚が生ま

れた。それと同時にホッとし、状況が飲み込めず、後からやって来た感情が大きな波となって、やさしく、でも勢い良く私の心を包んだ。私は自然と笑顔になっていた。中二の頃の私は、技術が伸び悩んでいた。ライバルたちは着実に成長していて焦りを感じていた。好きで入った部活動が楽しめなくなっていた。そんな自分に自信が持てるようになり、チームの役に立てた、という安心で胸がいっぱいになった。打球を取った時のことはあまり覚えていない。だが、今まで悔しく苦しかった日々の練習が結実した大きな出来事として、花が咲いたように、喜ぶメンバーの姿と共に鮮明な記憶となっている。

私は似たような経験をその後二回経験した。そのうちの一つは、高校一年生になって少しした頃にあった大きな大会の初日だった。相手チームとは力量が五分五分であった。試合も中盤に差しかかり、ライトに大きなフライが飛んで来た。私はあの時と同じ感覚になった。必死に走り、ギリギリの所でボールを取り、ホッとしてふり返ると何故かメンバーが、風船が弾けたように喜んでいた。私は守備位置をミスした為にギリギリになってしまったが、普通に取っただけだと思っていたので、サプライズプレゼントを貰った時のように驚いた。ボールを追いかけている時のことも取った時のことも無我夢中で全く覚えていない。

私自身がこのような経験を通して、普通に生活しているだけでは経験しないような珍しい体験をするということを実感した。あの時、なぜ目の前が赤くなったのかは、今でも分からない。頭で考えるよりも先に体が動いたことも驚きだ。だが、それは全て頭で考えるよりも何よりも先に心が動いたのではないか、それに身体が付いて来てくれたのではないか。それに加えて今までの練習の成果が現れたのだ。

アスリートに同じような経験をした人はたくさんいる。その時々の状況で自分に起きた不思議な経験は違っていたが、全てに共通して、勝ちたいという強い気持ちが関係していた。私のように目の前の色が変わった人もオレンジだったり、黄色だったりしていたが、共通して赤に近い色ということでやはり心が関係しているのではないかと改めて思った。

私はこのことに答えがあるとは思わない。結局は気持ちの問題かもしれない。努力をして強い気落ちを持つことで経験することができるのではないか。しかし、試合の中で強い気持ちを持ち続けることも、自然とプレーができるようになるための努力も、どちらもとても大変で難しい。たくさんの経験をして、やっとできるものだと思う。私は幸いなことに三回経験しているが、全ての感覚が戻って来たときに襲って来る感情は凄く達成感があ

り、自分の精神力が鍛えられた。私はこれからも自分の気持ちを強くして、何事にも頑張りたい。

閑古鳥を食べました。

高一

暇だ。暇すぎる。祖母に店番を頼まれたのだが、誰も来ない。店番を少しの間すれば、祖母からお小遣いをもらえるので、こんなおいしい話を、私が断わるわけはなかった。

祖母は嫁いでから、毎日お店で接客を担当している。愛想が良いので、大抵の近所の人は祖母のお友達、というような人である。

うちの肉屋の経営状況など、難しいことは分からない。しかし、私の任されている、平日の午後一時から三時の間はお客さんが少ない、ということは分かる。店に誰も来ない。閑古鳥が鳴いたか。祖母曰く、皆スーパーマーケットへ買いに行ってしまって、今時、個人商店は需要がないのだとか。いやぁ、暇だ。さて、これから、どう暇を潰そうかと悩みながら、私は大きな欠伸を一つした。こういう時は、「言葉遊び」を推奨したい。例えば、たこわさの中にある「こわさ」の部分だったり、にじかんのみほうだいの中の「かんのみほ（女優）」だったりと、言葉に含まれる、違う意味の言葉を探すことが、マイブームだ。友達に共感して欲しくて、この遊びについて話してみても、意味が分からないと、一蹴された。もう、誰かに共感してもらうことは諦めた。たこわさの中にある怖さとは何だろう。吸盤の集合している感じ。わさびで鼻が、ツンとする感じ。まず、菅野美穂は飲み放題へ行くのか。行くのならば堺雅人も一緒なのか、と考え、特に誰かに話すわけでもないが、納得のいく理由を探している。こんな下らないことでも、頭を使うとお腹が空いてくる。店には大きな業務用冷蔵庫がある。コンビニエンスストアの飲み物を売っている、ショーケースと同じ位の大きさの物が二つある。さらにその横には、肉屋と関係なく、家庭用の冷蔵庫がある。そこには私にとって、結構良い物が入っている。大体、いつも入っているのは、ヤクルト。私はそれが大好きでいつも勝手に飲んでいる。あの小さいサイズが、丁度良いんだよね。

店の冷蔵庫には、鶏や豚の調理前の姿が保管してある。私は小さい頃からそれらを見ていたので、なんとも思わないが、耐性のない人が見たら、少し震えるのかもしれない。調理実習などで「生肉触れなぁい」と、騒いでいる人を見て、何言ってんだ、と思っていたが、こう

いう所の経験の違いなのだと思う。私だって急に、牛の乳を搾れと言われたら、嫌な顔の一つや二つはするだろう。いや、三つか四つするかも知れない。いや、別に幾つでもいい。

通りを歩いている人と目が合った。しかし、店まで入って来はしない。そんなにジロジロ見るくらいなら、唐揚げお一つ、いかがですか。なぁんてことを考えてしまったり、しなかったりする。だが、唐揚げは売れ残ると、夜ご飯で食べられるから、あまり売れて欲しくないような気も、一方でしている。売れた方が良いに決まっているのに。こんな、私が悩んでいたって仕方がないことを考えて、頭を抱えていた時、「そろそろ交代です。ありがとね。」と、祖母が帰ってきた。はぁ、やっと暇から解放されるぜ、そう思い、大きく伸びをしていると、お小遣いと唐揚げをもらった。店の片隅で美味しい唐揚げを食していると、次々にお客さんが入ってきた。私の頭にはまた一つ、共感されることを諦めた方がいい考えが、浮かんでいた。でも私は祖母に言ってみた。私が食べている唐揚げって閑古鳥なのでは。

失態の味

高一

事の発端は父にある。たまには奮発して美味しいものを食べよう、と突然言いだしたのだ。我が家での奮発するという行為はいつも、ちょっと高い惣菜を買ったり、ファミリーレストランのデザートでパフェを注文したりといった、ごくささやかなものである。ところが、その日の父はなぜかいつもと違い、

「高級イタリアンを食べに行くぞ！」と鼻を膨らませた。賛同する五つ上の兄に対して、節約を心がけている母は、すぐさま一蹴した。しかし、結局父と兄の勢いに負けて、不承不承ながら母も首を縦に振ったのだった。

こうして、私達はイタリア料理店に足を踏み入れたのである。どうせなら美味しいワインが飲みたい、という母の要望により、テレビで紹介されるほどに、ワインが有名な店を選んだ。とくとくとワインの注がれる音が、響き渡る。眠りを誘うほどの薄暗い照明の中、クラシック音楽が控えめに流れている。周囲をさりげなく見渡すうちに、私は少し胸を高鳴らせ始めていた。イタリアン料理というのは、私にとって完全に異質なものであった

のだ。しかし店内を見渡すと、私と同世代の客は他に見当たらない。明らかに自分が場違いであることを、ぴんと張り詰めた空気から感じとった。

席に着いた途端、予め決まっているコースのメニューに目を剥いた。エントラータ、アンティパストなど、世界史の授業で出てくるようなカタカナ表記ばかりで、何を表現しているのか理解が追いつかない。それに加えて並記されている漢字も難しく、母に読み方を聞き、「玉蜀黍」が「とうもろこし」であることを初めて知った。

そうしてメニューを凝視していると、突然、失礼いたしますと背後で囁かれ、慌てて姿勢を正した。料理が運ばれてきたのである。大きな皿とは反比例して、微少の量の、色とりどりのトマトやラディッシュ、アスパラガスが芸術的に盛られていた。透明感のあるよく通る声で食事の説明が事細かになされる。その説明さえも、何を言われているのかさっぱり分からなかったが、さも理解しているかのように私は頷きながら聞いておいた。さらに、食べるにあたって問題があった。一ミリのずれもなく並べられた、さまざまな大きさのフォークとナイフを凝視して考える。どの順番で使えば良いのか。外側から使うと聞いたことがあるが、普通に考えたら内側からの方が取りやすい。結局、私は、既に食べ始めている家族に小声で確認し、一番外側のフォークとナイフに手を伸ばした。

その後は、生雲丹やトリュフなど、普段の私がお目にかかれない料理を、ひたすら食べ続けた。一口で食べ終えてしまうような料理も、なるべく音を立てないように配慮しつつ、ナイフで細かく切ってから口へ運ばなくてはならない。また、次から次へと料理が用意されていくので、満腹に近づくのも早かった。生雲丹やトリュフの味を堪能している余裕は少しもなく、庶民の舌では何がどう特別なのかまるで判断できなかった。

淡々と食事を続け、いよいよ背筋を伸ばしているのも辛くなってきた頃だ。何の前触れもなくデザートが運ばれてきた。父と母は席を外しており、私と兄だけが席に着いている状態である。私はこれでやっと終わりか、と安堵のためいきをもらし、完全に気が抜けていた。食後のコーヒー、紅茶はいかがですか、と聞かれ、

「ホットティーをアイスでお願いします。」と答える。その瞬間、今まで隙ひとつない店員の笑顔が、僅かに引き攣った。完璧であった空気感にもひびが入る。追いうちをかけるように兄の、

「いや、どっちだよ」という指摘が入る。そうしてようやく私は、自分の犯したミスに気がついた。震えながら笑いを堪える兄を横目に、私は恥ずかしさで震えながら再度注文をし直した。

兄とは、私の失態について、内緒にすることで話がついた。父と母に報告したところで私にメリットは何もない。おかげで兄にはしばらくこき使われることになるが、私の失態が封印されると考えれば安いものだ。帰る際にありがとうございました、と頭を下げられたが、紅茶を勧めてきた人の顔を私は直視できなかった。食の愉しさは値段とは必ずしも関係しない。少なくとも私にとっては、高級な料理をちまちま食べるより、自分に合った店で、食べ慣れた馴染みのある料理を注文し、一緒にいる人と談笑しながら豪快に飲み込む方が、愉しいと感じる。満腹をとうに越えた腹を抱えながら、ファミレスの味が恋しいな、とつぶやいた。

雲霞（くもかすみ）

高一

気がつくと、もういつ貰ってきたのかも覚えていないような雑貨屋のチラシや、可愛らしい判がおされた添削済みの課題プリントが自分の部屋の棚や机の隅に積み上がっていた。

「これはまずい。」

自堕落な自室の有り様に、思わず顔が引きつるのを感じ、私は部屋掃除を開始した。

段々、日も落ちて、飼い犬を散歩に連れていく時刻を知らせるアラームが鳴りはじめた頃、机の引き出しから埃を被った、小学校の頃の成績表が出てきた。こんな物まで残っていたとは、と思わず衝撃を受けた。ぱらぱらと読み進めるが、今と変わらず目立った長所も見当たらない。平凡という言葉がお似合いだ。小学生の頃の私を一番苦しめていたのは、この詰まらない成績ではなく、「先生からのコメント」という欄だ。その内容はまるで大人が子供の人間性を物差しで測っているようで気味が悪い。そして、私を担当した教員はプログラミングされたアンドロイドのように口を揃えてこう書いた。

「優しい子です。」

一見、長所に見えるこの一文が、長年私の心に突き刺さって抜けない。「そんな風に見えていたんだ。」と、冷たいことも考えてみた。まるで私の良いところは他人を思う気持ちだけと言われているようでならなかった。

私の通った小学校の生徒の多くは、同じ幼稚園の出身で、私が入学したときにはすでに「仲良しグループ」なるものが出来上がっていた。そのため、友人同士の輪に入れず、大した面白い話も出来なかった私が、嫌がらせの標的になるのは早かった。結局、先生たちの仲裁により嫌がらせは半年ほどで治まったが、この一連の出来事は私に、面白い人でなければ嫌われる。絶対に認められなければならないという認識を植えつけた。もしかしたら、この頃から他人の機嫌を伺う癖がついたのかもしれない。自分の持つ本心を欺き、思ってもいない言葉で人を励まし、他人に認められるためなら、優柔不断な振りだってする。この様子が、いままで私を担当した担任達には友人に優しく寄り添う良い子に見えたのだろう。そうだとしたら、私の認められた唯一の長所は、残念ながら偽物だった。競争社会の世の中では、如何に自身の長所を表現するかが、生死を分けると言っても過言ではない。短所ばかりで長所も見つけられないようでは、食べていくのは難しい、と誰かが言っていたのを思い出した。

知り合いにバイク売りを志した者がいた。彼は昔からバイクが好きで、幼い頃からその夢を志していたという。しかし、業界に入った瞬間から、楽しみだったはずのバイクは唯の仕事道具に変わった。それもそのはず、好きな物を眺め、楽しむだけの客から、好きな物を手放し、金に変えては、売り上げに悩まされる店員となったのだ。理想と現実の差に凍えてしまえば、愛想だって尽きるだろう。結局バイク売りは長続きしなかった。好きなことだけでは、生きていくことは出来なかったのだ。こんな世の中では「将来」という不確かな「もの」に希望なんて見出せるわけがない。隣人の前には輝かしい未来への道が見えるのに、自分の目の前には道もなければ、未来もない。黒でも白でもない。唯、そこにあったはずの未来がぷっつりと切れている。後ろからは不安という怪物が追いかけてくる。飛び降りて、消えてしまいたくなるのも頷ける。

昔は「帰らないと」という罪悪感を感じさせた夕焼けが私の頬を叩き、飼い犬を散歩に連れているために鳴らしていたアラームは既に自動で切られて、次のスヌーズが鳴るまでの三分タイマーが勝手に進められていた。結局のところ、自分のことを待っていてくれる優しい人なんて、唯の一人もいなかったのである。

迷子

高一

二学期の後半に差し掛かった頃、高一の日本史ではちょうど第二次世界大戦あたりを取り扱っていた。特に第二次世界大戦の局面の一つ、太平洋戦争が中心だった。授業内容は、最初は先生がテストに出てくる主な所をスライドで流していき、私達が配られたプリントの空欄に「ミッドウェー海戦」や「ポツダム宣言」などの単語を書き入れていく。最後は、沖縄のことについてのグループワークだった。班の代表がくじで引いた内容を調べ、スライドにまとめ、クラスのみんなの前で発表するというものだった。

私はこの授業を受けている時、全校修養会のことを思いだした。全校修養会では、来年の修学旅行に向けて「沖縄」というテーマを取り扱っていた。中山先生が、沖縄戦のことや太平洋戦争後の沖縄のことをたくさん話してくださった。

例えば、一九四五年四月一日に沖縄戦が始まったということ。例えば、日本軍だけでも九万四千百三十六人、米軍では一万二千五百二十人、沖縄住民は九万四千人、合計で約二十万人がこの戦いで犠牲になったということ。当時の沖縄県民数が五十万と言われているので、県民の四分の一が亡くなったということ。数字を見れば、戦争の恐ろしさ、悲惨さが生々しく伝わってくる。

しかし、このぐらいの情報はすぐインターネットで調べられる。中山先生は、さらに深い所をお話してくださった。先生の見せてくれた一枚の写真が、今でも私の心に残っている。それはちょうど太平洋戦争が始まる前に撮られた写真だった。制服を身にまとった女学生たちが集合写真のように並んで写っていた。これから二十世紀最大の悲惨な戦争が行われるということを一ミリも感じとれないくらい、彼女達は満面な笑みを浮かべていた。それは現代の私達と同じくらい、幸せそうな顔だった。きっと私達みたいに、毎朝起きると朝ごはんが用意されていて、学校に行けば、普通に授業を受けられ、放課後は部活動やらなんやらで、各々自由に過ごし、家に帰ればホカホカの夕ごはんを食べ、お風呂に入り、安心して眠る。そんな日々を繰り返し過ごしていて、それがこの先もずっと続くと信じていたのだろう。

でも、そんな当たり前だろうと思われていた日常は、戦争によってあっという間にくずれていった。

テレビやラジオなどでは「日本軍、またもや勝利」などと明るいニュースが放送されているが、身近にいた男

性達はどんどん出兵して行って戦いはおさまる気配もない。当時、出兵は日本のために命を落とすので、素晴らしいことだと称賛されていた。だが、勘の鋭い人はもうすでに気づいていたのだと思う。

日本の旗をひらひらとふりながら、出兵する若者たちを誇らしげに送っている人達、向かった先に希望があると信じ胸を張って出兵していく若者達、そんな明るい雰囲気の裏に隠されている悲惨な現実に気づいた人達はどんな気持ちでいたのだろうか。当時の人達についてそんな想像をめぐらすと胸がいっぱいになる。

戦争は二度とやってはならない。この戦争を通して世界中の人がそう考えるようになった。

しかし、今こんな悲惨なことがもう一度現実で起きている。ロシアとウクライナの戦争が始まったのだ。ウクライナ人は今も、自由と平和と国のためにロシアと戦い続けている。

私は、「セカイノオワリ」というバンドグループが好きだ。「RPG」や「虹色の戦争」など若者に人気な曲をいくつかだしている。バンドの名付け親はメインボーカル担当の深瀬さんで、この名前には彼がバンドを組む前の経験が深く関わってくる。

彼は昔、重い疾患を抱え病院に入院したことがあった。その頃の彼は、夢も希望も失い人生に絶望を感じた。「自分の世界はここで終わった」そう思った。その後メンバーの力を借り、元気をとり戻した彼は、今のバンドを組み成功を収めるのだが、取材やインタビューを受けるたび、なつかしそうに彼はこのことを言う。

「あの時終わった世界をもう一度始めたい、バンド結成時そう思ってつけた。最初は暗い名前だと周りから嫌がられたが、今となるとこれにして本当に良かったと思っている」

そんな彼は「セカイノオワリ」の曲の作詞作曲にもたずさわっている。どの曲も他のバンドとは違ってファンタジー性のあるものが多い。童話の話を参考にしてある曲や、異世界な曲などと、聴いているだけで子供の頃の純粋な心がよみがえってくるような気がする。

彼は、たまに世界平和を願うような曲も作っている。彼の目のつけ所はなかなか独特で、「ドラゴンナイト」が代表例としてあげられる。この歌には一つの、物語が盛りこまれている。

「戦争をしている敵とも、夜を迎えたら、朝がくるまで踊りあかそう」という内容だ。この曲は、「クリスマス休戦」という本当にあった出来事をモデルとして書かれている。第一次世界大戦中、クリスマスの日だけ、敵国同士「休みたい」という共通意思をもち、一時休戦になったという話だ。この話を聞いた深瀬さんはぜひ、こ

れを歌にしたいと言って作ったのが「ドラゴンナイト」だった。この歌にはこんな歌詞がある。

「人はそれぞれ正義があって争いあうのは仕方ないかもしれない。だけど僕のきらいな彼も彼なりの理由があると思うんだ。」

戦争だけではない。人はどうしても争いを起こしてしまう。それには、「ドラゴンナイト」の歌詞にもあるように人それぞれの理由があって、人それぞれ、守りたいもの、つらぬきたいものがある、どうしてもゆずれない時だってあるのはしょうがないことなのだ。相手を理解し、ゆるすことも大切なことだ。何が、「正解」なんてなくて、たくさんの「正解」にあふれているこの世界で、本当の「正解」をさがして今も迷子になっている。

見つけたこと

高一

中学三年生だった私は、いつも独りだった。いつから独りでいるようになったのだろう。振り返れば、あの時からかもしれない。

うざい。その一言が私の胸を強く突き刺した。頭を殴られたような、叩かれたような気がした。当時、中学校二年生だった。直接聞いたわけではない。でも、はっきりと聞こえた。言ったその人は幼稚園からの友達で、特別仲が良かったわけではない。それでも、私は、上手く付き合えていると思っていた。勝手に信じていたのだ。教室の隅からとんできた、その鋭い刃に、私はただ、自分の足元を見つめることしかできなかった。

本音を言ってしまえば、今すぐ泣いてしまいたかった。でも、ここで泣いてしまうと相手に負けた感じになる。あとから母が知れば、心配させてしまうかもしれない。そんな思いが、私の頭の中をぐるぐる回り、わざと平気な顔をして、私は自分に「笑顔」を貼りつけた。その時から友達と話すことに違和感を持ち始めた。

中学三年生になる頃には、すっかり疑心暗鬼になっていた。人と話すことが怖い。友達に遊びに誘われても、一緒にやろう、と言われた時も断る理由を探すようになった。この人たちもきっと裏切る。嫌われる。自分から話しかけることをやめた私は、だんだんと独りぼっちになっていった。

三十六色の色鉛筆の中から、今描いている絵に似合いそうな色を探して塗る。これは父が買ってくれた色鉛筆だ。独りでも楽しめる趣味が見つかった。絵だ。自分の思うままに線を走らせ、思うままに塗る。夢中になりすぎて、時間を、独りだということを、忘れてしまうほど

だった。クラスの中で孤独でも、不思議と悲しくなかった。このままで良い。このままがいい。絵があれば、ずっと独りでも――。

そんな私を変えたのが卒業式だった。今日でみんなともお別れか、となんとなく考えていた。それでも悲しい気持ちにはならなかった。学校の先生からアルバムを受け取る。そのアルバムの中には、あの出来事が起こる前の、心の底から笑顔の私と友達がいた。なぜか心をぎゅっとつかまれた気分だった。ページをめくる。その友達は二、三年になると違う子と写っていた。

家に帰ってもさっき見た写真が頭の中に強く残っていた。友達に申し訳ないことをした、と今更ながら思った。自分は、あの頃のトラウマを言い訳にして、傷つく人間関係から逃げていたかっただけかもしれない。そんな考えが頭をよぎった。このままではずっと逃げてしまう。そう直感した私は、高校に入学すると同時に自分が変わることを決意した。毎日、できるだけたくさんの人と話し、聞かれたことにはたくさん答える。もう中学生のように、悪口を言われないように心がけた。そんな日々だった。友達ってどうやってつくるんだっけ。そんな時、母は私に教えてくれた。

「同じ絵が好きな人に話しかけてみたら?」

確かにそうだ、と思った。新しいクラスには絵が好きそうな人たちが何人かいた。翌日、早速私は話しかけてみることにした。不安な気持ちは大きかったけれど、みんなは温かく迎えてくれた。好きなものが同じというだけで、すぐに仲良くなることができた。すごく楽しかったし、私の絵を好きになってくれる子もいた。

あの日から人と話すことが怖くなった。嫌われることが辛かった。でも、独りでも楽しめる趣味を見つけたことで、高校の友達とたくさん話せるようになった。もしかしたらまた同じ出来事に遭うかもしれない。でもなぜか大丈夫と思える。好きなことを見つけられたから。友達を信頼しているから。私はまた三十六色の色鉛筆で絵を描く。来月誕生日の友達のために。とっておきの笑顔を添えて。

一言。

高二

一月三日、夜二十一時。騒然とした、シャッターばかりの駅前。まだ三が日だというのに塾とは。共通テストまであと何日という張り紙に見送られ、私にも大学受験が近づいてきていることを感じ俯く帰り道。集団授業に慣れていなかった私は講師のハッパをかけるような言葉に、そうだとわかっていながらも毎度のように落ち込んでいた。それがこの静けさだと余計にしみた。かろうじてやっていたカフェに駆け込んでとびきり甘いのを一杯。どうしようもない自己嫌悪をこれで流し込んでやろうと思っていると、一言。

「パーカーかわいいですね。温まって帰ってください。」

吹っ飛んだ。何もかも。

やっぱりそういうことかもしれない。

高二の総合課題。何でも社会問題について調べなさいとのこと。いろいろと悩んだが、自己肯定感とその維持、上昇の方法。結局またこれになった。社会的な問題と言うと、どうしても日本人の自己肯定感の低さに目が行ってしまう。私自身がいかにそこに自信がないかという話なのだが、今回はいつものように日常からヒントを得た気になって勝手に自己解決するスタイルではなく、海外と比較することで何か掴めないかと調べてみた。結論から言うと、主体性を重視した教育を行い多様性に寛容であるよう云々といった社会環境を日本は見直すべきという話に至ったのだが、もっと簡単なこととして、我が国とアメリカとでの相違が一つ。

日常会話である。アメリカでは会話をする時 cutie や handsome など相手を褒める意味を持つ言葉を相手との関係性に関わらず呼びかけに利用しており、また、会話をする際には相手のどこかを褒めて会話を始めるのが普通であるようなのだ。ということで、日本人も相手を褒める機会を増やしていきましょう、と言いたいわけではない。ただその一言が精神的に与える影響については是非考えるべきだと思うのだ。

重要なのは褒めるという部分でなく私だけに言われたという事実である。自己肯定感とは承認欲求によって維持される自尊心の問題だ。よって、肯定される褒められるというより、自分という存在を相手からしっかりと認知してもらうことで欲求を満たし、自分で自分を肯定できるようになる、というのが一番良いプロセスなのだと思われる。勿論、褒めに重きを置いて、直接的に自己肯定感を上げることも可能だ。だが、そうなると自尊の心

というのが全く育たないわけで、褒め言葉が欲しい癖に卑屈になってまともに受け取れないなど、日本人によくあるジレンマが発生してしまう。現代の自己肯定感の低さは後者が主流になっているからこそ起こる現象だと思われる。

このような問題において、アメリカの日常会話の習慣は非常に有効的に思える。容姿を褒めるのも、相手に合った呼びかけも、他の誰でもないあなたに対する言葉であり、ほんの少しでもその人について考えた上でないとできない行為である。日本の文化とも思える、「おはようございます、今日天気いいですね。」とは訳が違うのだ。

私に、私だけに言われた、というのはどうしようもない喜びなのだ。私がそこにいて良いと言う一番の証拠で承認なのだから。これが日本でも習慣となれば私たちは無意識のうちに自分を許し、前を向けるはずなのだ。

と思いついた矢先の一月三日、

やっぱりそういうことだったのだ。

あの日私は、落ち込んだ原因である勉強のことについては何も言われていない。それでも私はあの言葉で大丈夫だと、どうしようもない焦燥や自己嫌悪がすっと消えていくのを感じたのだ。これが日本人が知らないでいる言葉の力なのだ。日常の端端に少しずつでもこのような誰かのためだけの会話が声掛けが生まれていけばいいと思う。そしていつか意識せずとも当たり前の日々の中にそういった経験が散らばるような世の中へと変わっていって欲しい。褒められることをさも当然と感じつつ、それでも喜びと感謝を感じつつ、自分自身も無意識に相手に同じことをしていて。そのやりとりをお世辞なんて考えもせずに日常茶飯だと、ただそれだけだと感じて、それが自分の毎日を自分自身の心をどれだけ明るくしているかもわすれてしまって生きていきたい。

あなたに読んでもらえてよかった。

よい一日を。

夜明け

高二

遠くで踏切が鳴っている。疲れた体を椅子に預けて、私は少し小さく息をする。マスクをしていると自分の息遣いがやたら大きく聞こえる。車窓の隙間からは夜風が細く漏れていて、少し寒い。時折車体が軋む嫌な音がして、その度大人たちの眉間の皺はぐっと濃くなる。なんだか疲れた。大人はみんな下を向いていて、スマホの明かりに照らされた顔が少し怖い。やわらかな隙間風に前

髪を揺られながら、ぼんやり考える。十七歳。私は来年、大人になる。なにかから隠れるように、私はぎゅっと目を瞑る。瞼の裏には、あの日々が酷くこびりついている。

私の小学校は山の上にあった。四方が緑に囲まれた、小さな学校だった。グラウンドはそこらじゅうが草で覆われていて、窓に鳥がぶつかったり、教室に虫や鳥が入ってきたりすることもしょっちゅうだった。学校の隣には林があって、林を抜けると柔らかい木の色の教会があった。自然のなかの生活はいつも魔法みたいだった。小石を池に投げると、水面にじわじわと円が広がって、静かに波に呑まれていく。霜を踏めばシャクという心地よい音がして小さな柱は透明な水に変わる。心地良い季節の流れをゆっくり感じて、みんなちょっとずつ大人になった。一度だけ、カマキリの孵化を目の前で見たことがある。命の誕生の瞬間は神秘だ。小さな網目が揺れて、小さな命がわっと溢れる。いくつもの命の始まりへの感動と、ショッキングなその映像に、わっと鳥肌がたった。そして、命は瞬く間に終わる。華やかな蝶も静かに朽ちるし、蛙も、トンボも、葉も。みんな静かに終わった。音がふっと消えるような、そんなほんの一瞬で命は終わる。自然は神秘だ。ぼーっと校庭の端に立っていると。かくれんぼしよー！　微かにそんな声が聞こえてくる。いいよー！　大声で返事をして、声のする方へ走りだす。じゃあ俺が鬼ね！　その声を合図に、みんな一斉に駆け出す。私はいつも林に逃げ込んで、静かに息を潜めていた。静かな林のなかでは、自分の息遣いが大きく聞こえる。林のなかでしゃがんでみると、異世界に迷い込んだような、なんだか不思議な感じがして胸が高鳴る。たんぽぽでさえも、小さな柔らかい毛が沢山生えていて、違う生き物みたいだ。しゃがんで見ると、アリは力強くて少し怖い。当時の私のブームは、大きな植物を指で弾くことだった。指先にぐっと力を込めると、葉っぱの頭の部分が大きく揺れて踊っているみたいだった。大きな植物を揺らしていると、なんだか強くなったような気がして、何度も何度も指で弾いた。そんなことを繰り返しているうちに

「みっけた！」

そんな声がして勝ち誇った友達に腕を引かれながら林を出る。校庭には先に捕まった子たちが沢山いて、わーわーと騒がしい。男子うるさいよねー。そんな他愛もない話をしながら、なんとなく空を見ていた。全員が捕まったら、次は鬼ごっこが始まる。みんなで大声をあげながら走って、転んで、泣いて、笑って。そんなことを繰り返して時間が過ぎた。朝の空は透けるような青で、夕方になると繊細なさくら色になる。空のさくら色が濃く

なった頃、母が迎えにきて、友だちに手を振りながら坂を降りる。コンクリートで固まった坂はちょっと硬くて、やわらかい土が少し恋しい。家の近くに着く頃には、空は真っ赤になる。山火事みたいな赤が、家に帰れと訴えかけていた。「もう夏も終わるね」母は独り言のように呟いた。夕日に照らされた母の横顔が、目の奥にジュッと焼きついた。

ガタン。車体が大きく揺れる。もう駅に着いたようだ。私は人の隙間をぬって、静かなホームに降りる。改札を出るともう辺りは暗くなっていて、電光掲示板の灯りが少し不快だった。遠くからは大人の笑い声が聞こえ、コンクリートのザラザラした音に、土のやわらかい感覚がまた少し恋しくなる。息を大きく吸って空を見上げる。真っ暗な空には雲が薄い膜のように張っていた。昔、教会の隅に埃と一緒に張っていた蜘蛛の巣に、なんだかよく似ている。

隅の小さな蜘蛛の巣では、小さな羽虫がもがいていた。雲と蜘蛛の音をそろえたのは、大人なのだろうか。少し進むと、パチンコ店と本屋の間の浅い溝に小さく草が生えていた。普段通りの光景が、何故か少し気になった。夜風に揺られる草を、誰もが目に止めず通り過ぎてゆく。私ははたと立ち止まった。もしかしたら、大人たちには見えないのかもしれない。吸い寄せられるように近付いて、膝を抱えるようにしゃがむ。隅では、ぺんぺん草が小さく揺れていた。ぺんぺん草も、もうあの頃のように鮮やかな緑じゃない。私も大人になるのだろうか。指で弾いた。

星に願いを

高二

いつから夜空に輝く星の光に気が付かなくなったのだろうか。

昔は星を見るのが大好きだった。夏。うるさいくらいのセミの鳴き声と五時のチャイムをBGMにちょっと遠回りをした帰り道。グラデーションの空に一つぽつんと佇む、ひときわ明るく光る星。マンションや信号機の陰に現れたり隠れたりしているそれを、どちらが早く見つけられるか。友達と競争した。

冬、学校で嫌なことがあった時、塾のテストの点があまり良くなかった時。暗い暗い道を一人で歩く。寒さからか、はたまた別の理由からか鼻の奥がツンと痛んで涙が目に膜を作る。慌てて上を向くと冴え渡る空気の向こうに怖いくらい美しく瞬く凛とした星々。赤や白の宝石たちに励まされ、足取りが軽くなった。

それがいつからか、私は空に、星に、思いを馳せることをしなくなった。忙殺される毎日にゆっくりと星を見る余裕はない。さらに、私は甘えているのかもしれない。手の中にある、検索すれば世界各地どこへでもワープできて、昼夜問わず全てを見せてくれる機械に。これらのせいにして、頼って。きっと大人になればなるほど、多くの人が空を見上げなくなる。空だけでなく周りを見ることも減るのだろう。

大人になりたくない。ふと思う。大人になると責任が増えるから。やらなくてはいけないものが否応なしに降り掛かってくるから。いや、違う。私はきっと今の、この気持ちを、考え方を忘れたくないのだ。あの時一緒に冒険した本の中の魔法使いたち、木の実と落ち葉を使ったおままごと、初めて好きな人が出来た時の胸の高鳴り、公園の隅っこに作った秘密基地、大切な人の幸せを願ったあの瞬間。昔は毎日のように見上げていた星空の美しさに気が付かなくなったように、今この瞬間私の中で芽吹いた思いが大人になると消えてしまうのではないか。それが怖いのだ。いっそのこと時が止まってしまえばいいのに。なんて。

きっと私は「大人」というものをきちんと理解していない。何も知らずにただ漠然と大人になりたくないそう言っている。大人になれば今までのこと全てを忘れてしまうなんて、そんなことはきっとない。成長すればするほど、嬉しいことも苦しいことも増えていって、星のような輝きの思い出が星の数ほどできるのだろう。これまでもそうだ。今までの色々な場面で抱いた気持ちや考え方。それらを大事にしたから、今その記憶は私にとって欠かせないものとなっているし、忘れたくないと思えるのだ。

今は都会の街の明かりに霞み見えない星の光もちゃんとそこにある。季節が巡っても変わらず星はそこにいる。昔の人の道しるべになったように優しい瞬きでほのかに生きる道をも照らしてくれている。

太陽のように明るくなくても、誰かを陰で支えることができる。そして、命を燃やすほど熱中できるものが、守りたい人がいる。そんな素敵な大人になりたい。

優しく流れていったふたご座流星群に私の願いは届いただろうか。白い息が満天の星空に溶けていった。

現代版枕草子

高二

清少納言が現代にいたらどんな『枕草子』を書くのだろうか。清少納言によると、夏は夜が素晴らしいそうだ。闇夜に蛍が飛び交っているのが良いという。秋は夕焼け空を鳥が巣へ帰っていく姿、雁が連なって飛んでいく姿が趣深いという。冬は早朝。非常に寒い朝に火などをおこして、炭を持って運びまわるのが似つかわしいらしい。

だが現代はどうだろうか。川の上で飛び交う蛍は絶滅寸前。鳥はごみを荒らし、糞害や騒音を起こし、人々から忌み嫌われている。冬の暖房器具代わりに火を起こす人は、都会にはほとんどいない。もし家の中で火を起こしたら火災報知機が鳴り響き、外で火を起こしたら、ご近所トラブルになるだろう。そうして私たちは電気の力で暖を取るのである。清少納言はこの現状を目の当たりにしてもなお『現代版枕草子』を書くことはできるのであろうか。

現代人は自然に対する感受性が昔の人と比べて乏しいように思われる。読書感想文を書く課題があっても、最早本を読まずにインターネットで感想を探すことができる時代だ。自分で考えたり、感じたりすることができなくても検索すれば世の中でどうような考え方、感想が一般的であるかが分かる。

現代を生きていく上で、自分が「一般的」であるという保証は必要不可欠である。多様性が重視される現代においても、周囲の人と異なる感性の持ち主は奇異の目で見られる。「一般的」であろうとするあまり、「感情の機微」にまで模範解答を求める。その結果、日本人の感受性は乏しくなっている気がする。

乏しくなってはいるが、それは感受性を全く失ったということではない。むしろ「一般的な感受性」というものが重視されればされるほど、それはより広く、そして深く受け入れられるようになった。ＳＮＳの普及がこの日本人の特性をよく反映しているように見える。

この特性について空を例に挙げて考えてみよう。「空は美しい」という一般的な感想が根付いている。このような感想は悪いことであるとも言い切れない。私たちは同じ感想を持つことで共有し合うことが容易になるのである。○○坂を下っている途中で夕日の美しさに足を止め、友達と綺麗だねと共有をし、写真を撮る。これは一般的な感想があるから、このような行動ができるのだろう。空といえば清少納言も『枕草子』の中で何度か言及

していた。時代は違えど、同じような感想を持つのだろうか。空に注目し、心を動かされるということは、私たちと清少納言の共通点だ。感受性が乏しくなった我々の中にもまだ、清少納言は生きているのかもしれない。

清少納言が現代を見たらどんな『枕草子』を書くのだろうか。きっと、

「今とゆくすゑをくらぶれば、四季のいとめでたき移るひなくなりにけり。蛍は消え、人は鳥や雁を疎む。温まるために局にて火えおこせず、あやしく四角き箱より温かき空気をよこす術を用ゐる。されど、ゆくすゑの人にとりても空は清げなるものなり。若人、いとあやしげなる時を切り取る板、空に向けたり。げにをかしく思はる。されど、若人、清げかなと朋友と分かち合うけしき、げに麗し。ゆくすゑの日の本はめでたし。」

とでも言ってくれるのだろうか。

後悔のない生き方

高二

今年は、何かがおかしい。新年を迎えて早々私は、こう思った。なんの根拠もなくただ直感的に。私の中で今年何かが変わる気がしたのだ。

ある日の朝、いつもは寒い朝がその日はなんだかとても暖かく感じた。今日はいい日になりそうだな、と思いながら学校に行った。帰宅し、こたつで暖まっていると母から一本の電話がかかってきた。母は、

「ジジ、朝亡くなったよ。」

ただ一言そう言った。一瞬世界から音が消えた。まるで、この世界に自分しかいないみたいに。こたつに入っているとは思えないほど全身が冷えきっていた。頭に浮かんだのは、後悔。ただそれだけだった。どうして、なぜ、疑問が頭をいっぱいにした。そして机には涙が溜まっていた。涙が止まらない。悪い思い出が一つでもあれば、どれほど楽なんだろう、そう思った。よく、後悔のない生き方、見送り方ができたという声を耳にする。私は、人の死に後悔は付き物だと思う。故人も残された人も。後悔のない生き方なんてやっぱり難しい。私は、そう思っていた。

祖父は、何も望まない人だった。私は小さい頃から、心臓病で多くの薬と水の制限を課せられ、入退院を繰り返す祖父の姿を見ていた。真夏に飲むたった一杯の水はどれほど大切なものだったのだろう。あの喜びに満ち溢れた顔は今でも忘れられない。あの喜びの影には、決して表に出さなかった苦しみがどれほどあったのか。祖父は、何も悪いことをしていないのに。なぜこんなに苦し

まなければならないのだろう。そんな祖父が病院で家に帰りたいと言った時、家族は祖父の最後の願いだと思った。いつもは無口な祖父も、看護師に強い口調でひたすら訴えていたそうだ。そして奇跡的に回復し家に戻ることになった。家に帰れたのは、たったの五カ月だった。短いようで長いこの期間は、祖父にとって最後の幸せな時間だったのだろう。その後、体調が悪化し、「五年生きる、頑張るから。」と言った祖父は永眠した。

私は、祖父を可哀想だとは思わない。病院で寝たきりで過ごす五年より、みんなに囲まれて痛みを感じず生きた五カ月の方が祖父にとって幸せな期間だったと思うからだ。この五カ月と亡くなる前に家族全員と話せたたった十分は、これまで頑張った祖父への神様からのご褒美だ。祖父の死に顔はなんだか仏のようだった。葬儀の前、故人について書く紙。様々な質問があり家族みんなが言うことはバラバラだった。最後の質問。故人様に言いたいことはありますか。あれほどコロナで面会を禁じられ話せなかったと後悔していたのに。最後に伝えたい言葉は、家族全員一致で二言だけ。

「ありがとう、お疲れ様でした。」

この祖父の死は私にとって大きな高い試練の壁だと思う。祖父は、私のことをよく看護師に話していたことを亡くなった後に聞いた。

「あの子は、一生懸命頑張る子なんだよ……。」

意識朦朧している中でそう言ったそうだ。毎日なんとなく生きている私の気持ちがグッと引き締まった感じがした。これから先辛いことや挫折を味わうこともあるだろう。でも、苦しみの中戦いつづけた祖父のように悔いの残らない生き方をしていきたい。そしてたまにしか笑わないジジの笑顔をまた見たい。

甘味、酸味、苦味

高二

誰かが廊下を通り過ぎる足音。チャイムの音。大人になった時、私はどれだけ覚えているのだろう。高校生活もすでに残り半分を切っていた。それを実感し始めたのは去年の十月頃であった。新型コロナウイルスの大流行を受け、ろくな思い出も作れずに私は高校二年生の秋を迎えていた。十月、やっと新型コロナウイルスの感染状況が落ち着き始め、流行前の学校生活に戻り始めていた。ついに高校生活＝青春を謳歌できると思った。だが、ここで一つの疑問を抱いた。高校生活と青春との関係は「＝」で結ぶべきものなのか。自分にとって青春とは一体何者なのか。

「プランAはテレビドラマのプロデューサーになること、プランBはパイロットになること、プランCは乗りもの系の整備士になることなんですけど、どれも迷っているんですよ。」と塾の先生に相談したときのこと。先生の口から最初に出た言葉は「若いねぇ。青春だねぇ。」の二言だった。その時私は、これが青春かと納得できなかった。将来に思い悩むことは、何だか青春とは言えない気がした。悩むという言葉は色で言うと、灰色と紫色を混ぜた合わせた滅紫色といったところだろうか。これは青春という言葉が醸し出すオーラとは程遠い。しかし、大人はそんな状態を「青春」という。分からない。「青春」の正体を探るために、他にも「青春」を耳にした時のことを思い起こしてみようと思う。

「気をつけ。礼。ありがとうございました。」

太陽が最後の力を振り絞っている頃、少し翳ったグラウンドに私たちの声が響く。同時に、その日一日の成果がショートフィルムになって脳裏に浮かぶ。その時、「めっちゃ青春じゃない？」と友達がにやつきながらこっちを見た。この言葉に私はなるほどと思いながら、にやりと微笑み返した。

「青春は甘酸っぱい」という人がいる。達成感と同時に感じる心地良さや幸せはストレートに舌の先で感じられる甘味である。行き場を失った時、失敗した時に感じる苦悩や後悔は頭にツーンとくる酸味である。これは私の個人的な解釈に過ぎないが、我ながら、的を射ていると思う。日常で起こることや経験の一つ一つが様々な感情を伴う。その甘酸っぱいというなんともいえない味が脳を刺激し、いつまでも忘れさせないような味にしているのだ。

外出自粛という言葉に縛られた私たちの高校生活。つまらない毎日が青春であるとは言い切れない。味のしない日だって何度かあった。きっと大人になったとき、チャイムの音なんて思い出せもしないと思う。でもあの時、脳裏を刺激された感覚は絶対に忘れはしない。根拠なんてないけれども。

タカラゲ

高二

あぁ！　突然友達が私の顔に近づいた。

え、な、何？　何かついている？　何か出てる？

「タカラゲ！　タカラゲがある！」

タカラゲ？　見えない、一体何があるのか。

「凄く縁起がいいから、絶対抜いちゃ駄目だよ！」

よく分からないけれど、友達が高揚していて、まだ見

ぬ毛に私の胸も高鳴った。先日、家で母がケサランパサランを見つけて興奮していた時と同じだ。

鏡越しに毎日目に映っていたはずだが、何てピュアな対面だろう。鼻の左横に細くて白く、キラキラ光る毛があった。これがタカラゲか。一体いつから生えていたのだろう。調べてみると、宝毛とは福毛とも言い、仏様の額にある球体の「白毫（びゃくごう）」が由来とされている。また、超越的な力を持ち、古来から幸福の象徴として親しまれてきたそうだ。白か金色であることが重要で、私の宝毛もキラキラ輝くような白。間違いなく、幸福をもたらす宝毛だ。自分はもちろん、家族も知らなかったこの宝毛。知れば知るほど縁起が良さそうだ。そう、絶対に抜いてはならない。

そして、ここから宝毛様の存在が私の中で日々大きくなった。生活が一変したと言っても過言ではない。まずは洗顔。これまで以上に念入りに泡立てた泡で包み込み優しく流す。宝毛様に強いシャワーは禁物だ。その後、保湿クリームを塗る時は緊張感が走る。宝毛様がお隠れになってしまうのだ。しかし、それは時間が解決してくれる。気づくと、宝毛様は復活している。白くキラキラ漂い始める。凄い生命力である。

そして、宝毛様が最も生き生きと活動されるのはマスクの中だ。一体何をなさっているのだろう。マスクの中で、宝毛様は大暴れ。私はマスクをしている間中、宝毛様の尊さを噛み締めるまでだ。

なんてミステリアスな宝毛様。もはや、私の生活は宝毛様と共にあった。有り難い存在に何でも許してしまう自分。起床したら、帰宅したら、寝る前にも。必ず、宝毛様の生存確認を行う。いる、まだいる、と。日に日に愛着が増していく。それは、私だけではない。友達も母も。どんな時でも私の顔、いや宝毛様を見つめる。さらに「絶対に抜かないで。」と、私にいつも言う。どんなに見つめても、幸運が訪れるのは私だけなのに。周りも巻き込んだ胸の高鳴りは、永遠に続くと信じていた。

そして、作文のお題も自然な流れで決まり、書き始めた頃。それは、突然の別れだった。

宝毛様は静かに旅立たれたのだ。

見送ることも出来ぬまま。

あぁ、本当にミステリアス。

集合体

高二

私はパズルが好きだ。ピース同士がぴったりとはまり、完成した時の達成感が大きく楽しい。ピース数が多く、一つ一つのサイズが小さいほど、それは大きい。あっていたら、ぴったりと、間違っていたら、絵柄も形もあわず、違和感ばかりであわせることができない。すべてのピースを正しく組み合わせると箱に描いてある絵ができあがる。それが、一般的なパズルだ。

パズルははじめから、できあがる絵が決まっている。それならば、何百、何千種類ものパズルから、数ピースずつ集めて、それらを組み合わせたら、どうなるだろうか。一つ一つのピースは合わないだろうし、絵柄だってバラバラになるだろう。写真でつくりあげる絵のように、遠くから見たら完成された一つの絵のように見えるのかもしれない。そこには、一つのパーツからは想像もできない絵があると思う。写真ならまだしも、パズルならば、造り上げていくときは違和感の塊だろうものが、一つの絵になることを想像すると少し不思議だ。

人はパズルみたいだと思う。どこかから、学んだというピースを変形させながら押し込んで、増えた分のピースを捨てて、そうして自分をつくりあげながら、少なくとも私は生きている。自分を得ながら自分をどんどんと失っている。もともと存在しない自分がさらに失われていき、よく分からないなにかに変化しつづけているのだ。テセウスの船であったら、船が今ごろ何隻もできあがっていて、作られ続けているくらいに、私は捨てられている。よく表現される言葉にするならば、過去の自分といったところだろうか。もうすでに、私はなにかの寄せ集めだ。パズルをつくるための台だけが変わっていない。

遠くから見た一つの絵がそっくりでも、その絵を描いている、構成しているピースは同じではない。それが同じ人間と人間を区別させているのではないかと思う。たとえ、同一人物であっても、パーツが変わるから、別人になる。

悲しいことに、ピースを集めることしか私たちはすることができない。集めたパーツを見て、どんな絵ができているのかも見ることはできない。自分のパーツも、人生のパーツも、何が何を描いていて何の一部になっているのか知ることも当然できない。知らないものに、自分を乗っ取られて、奪われるようだと言ってもいいぐらいではないだろうか。

いくら知らないなにかになろうとも、土台は自分なのだ。自分から逃れることは、脳から自由にならなければできない。なにになろうとも、自分が自分であるという確信が持てなくても、自分は自分だ。私は、私が「何」なのか全く知らない。けれど、そのなにかが自分であることを知っている。よく分からないなにかの集合体。それこそが、人間であるのだと私は思う。

新宿の一万円

高二

新宿駅で一万円札を拾った。

そのままポケットにひっそりと仕舞う、なんてことはせず、駅員に届けることにした。何カ月も持ち主が見つからなかったら所有権が移って、一万円札ゲット。という内容の書類に、学生の身分ではなかなか手に入ることの少ないお札だ、喜んでサインした。

新宿駅構内、人通りはそれなりにあったのに、道に落ちた紙切れをみんな見て見ぬ振りをしていた。挙げ句の果てには前にいたおばさんにポンと蹴られてしまって、福沢諭吉が心なしか悲しそうな顔をしている感じがした。それで、自分まで見て見ぬ振りをするのはなんだか罪悪感があり、届ける選択をした。正直なところ、拾ったお金を警察に届けると、届けた方もお金がもらえるというシステムをぼんやりと知っていたので、一種の下心もあったと思う。また、お金を拾って届けるという行為における善性が自分にはあるのだと思いたい、自分に酔っているというか、恥ずかしいことだがそういう考えもあった。

私はこの時「拾わないこと」に罪悪感を抱いたが、「拾った後のこと」で罪悪感が芽生えるパターンも存在する。端的に言えば、泥棒である。

まず、拾った後「盗もうかな」という考えが最初に出てきた場合、そこで既に罪悪感が生まれる人もいるだろう。今一瞬、泥棒の思考回路になったな、と。私が小学一年生の時、そのようなことがあった。学校の廊下に落とし物ボックスが設置されていて、ある時その中に当時流行っていたキャラクターの印刷された鉛筆キャップが入っていた。目について、一瞬「落とし物だし、かわいいし、とっちゃおうかな。」という考えがよぎったが、「それ泥棒じゃん」とすぐさま思い直して、逃げるように教室に帰った。そそくさと逃げる様はまさに泥棒のようであっただろう。実際泥棒なんてことはしていないが、当時小一の私はもう自分は泥棒なのではないかと、そのような思考回路が自分の中に存在することにとてつ

もない罪悪感を抱きその日は帰ってからずっと泣いていたのを覚えている。

次に、もし盗んでしまったら。大抵の人間は罪悪感に襲われるであろう。「泥棒はいけないこと」という暗黙の共通認識からか、それとも盗られた相手のことを想うひとかけらの人情からだろうか。盗品は無機物だが、人の心は不思議なもので、たとえ盗られた側の人の顔を知らなくても、その人が悲しむ姿や自分が他人から泥棒と指を指される感覚を、誰に何を言われなくとも鮮明に感じさせるのである。盗った絵画を飾れば「自分は泥棒である」という感覚をその絵を見る度に持つであろうし、盗った金で物を買えば、買った物が「お前は泥棒だ」と訴え続ける呪具になってしまう。その無機物自体が「罪悪感」を生むのである。

しかし私は新宿の一万円を盗っていないし、盗ろうともしていない。そもそも泥棒の思考回路も働かなかった。これでこそ気持ちよく生活してお金を使えるというものだ。あとは数カ月先まで新宿の一万円の持ち主が現れないことをを待つばかりである。

ファンファーレ

高二

ピピー、ピピー、ピピー……

「んんっ〜」

眠たい目を擦ってまだ手放したくないふとんから体を起こす。朝の支度をだらだらと済ませて、学校へ行こうとローファーを履く。はぁ、と一つため息を吐き出して重い扉を押し開ける、また、今日が始まっていく。雨が降っていて、一歩一歩踏むとぴちゃぴちゃと音を立てて靴のなかに水が入る。足にまとわりつく水が少し気持ち悪い。だけど、この感覚が少し懐かしくて、ふっと笑った。確かあれは、私が小学校六年生の時だった。

六月。最近はずっと雨が降り続いている。昼休み。何故か気分がぐっと沈んでやることもなく仕方なく本でも読んでいると、急に後ろからぽんぽんと叩かれた。びくっとして振り返ると友達がふふっと不敵な笑みを浮かべて立っている。少し不気味だったけれど、

「どうしたの？」

と聞くと、

「さとみも〝ハダシパ〟、しない？」

と言ってきた。ん？　今何て言った？　ハダシパ……？　なんそれ知らん、と思ってキョトンとしていると

「なにぼーっとしてんの行くよ！」

と言われた。言葉の意味も分からないまま、行けば分かると言われ連れられてピロティに走った。

雨がやまない中ピロティに着くと、何人か友達がいて足元を見ると皆裸足でズボンの裾を少しまくっていた。思わず、

「ハダシパって何？」

と言った。

「えっとね、裸足でパーティーの略！　雨だけどグラウンドで遊ぶの！」

と説明をしてくれた。何だかよく分からないぶっとんだ企画に少しばかり胸が踊った。皆はいかにも今から悪いことしますと言わんばかりのにやけ顔をしていた。上履きと靴下を脱いで、ピロティの端に綺麗に靴を揃えた。恐る恐る雨が降っているグラウンドに足を踏み出すと、ぴちゃっと音がして水を含んだ人工芝に足をとられた。ゴムチップが足の裏に張り付くしなんか感覚が気持ち悪いなと思っていたのもつかの間、皆がぴょんぴょん跳ねたり踊ったりして各々遊びだした。抵抗なんかすぐ無くなって私も一緒にぴょんぴょんとびはねた。上からシャワーのように打ち付ける雨が気持ち良くて、体操着が雨で重たくなっていく感覚が楽しかった。足を勢いよく人工芝に踏みつけると、びしゃっと音を立てて水が跳ね上がった。先生に見つかるんじゃないかというハラハラ感とこんなこと本当はしちゃダメだという罪悪感でより一層気分が高揚した。昼休みの終わりを告げるチャイムがなると、慌てて体を拭いて校内着に着替えた。上履きがまだ半履きの状態でペタペタと音をならしながら教室へ急いだ。

五・六時間目の授業は風邪をひくんじゃないかと思う位に頭がぼおーっとしていた記憶だけがある。

あの時の私にあったのは罪悪感を上回る高揚だった。何も起こらない、いや、起きないように頑張っている日常で、自ら起こした非日常。垣間見える背徳感が楽しくて楽しくて、一方でだらしないそんな自分にがっかりした。誰かに見つかるんじゃないか、怒られるんじやないか、日常からはみ出て普段考えもしない気持ちが私の心をくすぐるその瞬間。残念にも楽しくなってしまう。しょうがない、どうせ私はそんな人間なんだから。誰にでもこんな気持ちがあって欲しい、そう心のどこかで願っていた。

たらたらと寝る準備をしてベッドに横になる。エアコンを付け忘れてて、夏にさしかかる夜がじわりと部屋を湿らす。あーー、今日も疲れた。大きく伸びをして、ス

マホを手に取る。動画を見続けて気が付くと時間は夜中の十二時をまわろうとしている。あー、また今日もやっちゃった、でもやめられないんだよな。背徳感が私を襲う。でも、このちょっとした罪悪感による高揚がやめられない。少しおかしいのかな。外でクラクションが鳴って窓の方に目をやると、カーテンの隙間から濃い青空に光る流れ星が見えた。枕に顔をうずめると、いつもと変わらない匂いに安心する。あー、また、今日が、明日が始まっていく。

現代版桃太郎

高二

カー。カー。ガッガー。ミャー。カー。グーシャー。毎日毎日私の後を付け回す動物。猫とカラス。

高二に入ってすぐ。私は登校中にのどにビニールひもが詰まって体に巻き付いたカラスを見つけた。私の性格からしてまずまずこのカラスを助けるということはあり得ないのだが何故かその日はこのカラスから目が離せなかった。まず、わたしはカラスが嫌いだ。第一にうるさい。鳴いてもいいがもう少し静かに泣けないのか。私には叫んでいるようにしか聞こえないし、頭に響く。次に、汚い。私は普段から汚く汚れているものを見るとその場から逃げ出したくなるほど嫌だ。私は、コロナ前から除菌ティッシュ、アルコール除菌液など最低三つ。またその予備を入れて六つは毎日持ち歩いていたし、もしもの為にゴム手袋とマスクは絶対にリュックに入れていた。なのにそんな私がカラスから目を離せなかったのだ。まず、ありえないことだし想像もしたことがない。

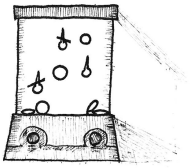
私はとりあえず学校に行かないといけないので、ゴム手袋を二重にして烏の頭をつかんで口内からビニールを取り出したまた捨てられていた切れ味の悪いハサミで体に巻き付いていた紐を切った。それからつかんでいた手を烏から外して、すぐその場を離れ学校に向かった。当たり前だが手を三〜四回洗い除菌も数回した。こんなに手を洗ってまで私がすることだったのか。何回も考えた。決して人通りの少ない道ではなかったし。

それから数日後、私の登校は友達とではなくカラスと一緒にすることになった。正直に言ってあの時のカラスかは分からない。私にとってカラスはどれも真っ黒でどれも嫌いなものだからだ。私としては自分の許可した範囲内に入らなければどこを歩いていても構わない。興味がないから気にする必要もないし。だが、このカラス。私の家を知っているらしくベランダの手すりにつかまってこっちを向いて鳴いてきたり、ベランダにネズミや草

を置いてきたりする。さすが雑食の烏。しかし、これはやめてほしい。好意なのかもしれないが私が毎回どれだけ大変な思いをしているか知っているのか。もしかして私はカラスからいじめられているのか。私のことをもう少し大切に思ってほしいものだ。

猫。これはずっと私の周りにいる。家の庭でよく昼寝をしているし、よく親子で泣いている。だが、これも高二になってから私の登校についてきて私の靴を引っかいたり舐めたり私の靴下を噛んだりしている。私は猫アレルギーを持っている。だから同じ空間に居たり毛に触れたりすると咳、肌のかゆみが止まらなくなる。別に私の後をついてくるのは気にしないが近寄らないでほしい。少しでも私のことを思ってくれているのならば。

最近は烏と猫と一緒に登校している。私の近くを歩いている人や通りすがる人からしたら現代版桃太郎を見ているかんじなのだろうか、多くの人に見られる。別に気にしないけれどこれだけは言いたい。私は吉備団子をあげていない。だが、問題が最近出てきてしまった。猫とカラスの鳴き声が大きいことだ。最近気が付いたが段々と大きくなっている。別にもう鳴き声がうるさいのは納得した。解決策も出した。私がイヤホンか耳栓をすればいいのだ。だから、私が問題視しているのは声の大きさではなく一羽と一匹の声が段々の喧嘩をしているような声に変わってきたことだ。カラスの声はガラガラに枯れてくるし、猫はずっとシャーと歯をむき出しにしている。何が問題なのかは私には分からない。問題の元が私にないことを日々祈っている。



アイテム

高三

勉強が嫌いだった。頭の良い人は天性ともいうべき才能の持ち主だ。頭の良い人はきっと遺伝子が素晴らしい。頭が良い人は……。と十五歳までの私は胸の内のどこかで勝手に「頭の良い人」の定義を決めつけていた。

十五歳までの私は、とりあえず体だけ塾に行き、とりあえず文房具だけ揃え、とりあえず受験をし、とりあえず学校に行って……こんな日常が続いていた。が言うまでもなく、年齢が上がるにつれて、このままではダメだと思い始めた。周りの人達は、十五歳で留学をして、色々な資格を得て、私がぼーっと人生を過ごしている間に沢山の経験をして、輝いて見えた。いつの間にか私は置いていかれているような感じがした。

しかし最近、ある考えを持つことで私は目に見えて頭が良くなってきていると実感している。その魔法の考えは、「勉強はアイテム」と思うことだ。わかりやすくいくつか例を上げる。

可愛くなるためには、可愛い洋服、化粧品、アクセサリー、などといったアイテムが必要だ。マリオカートで一位になれるためには、アイテムを持っていた方が有利だ。火で敵を倒せる「ファイヤーフラワー」、何にでも無敵な「スーパースター」など、アイテムを得る事によって、レベルアップする事が出来る。ドラえもんはポケットに沢山のアイテムがあるから、沢山の人を笑顔にする事が出来る。タケコプターというアイテムがあれば、世界を見渡すことができ、どこでもドアがあれば、困っている人の所にすぐに行くことが出来る。

このように自分に元々備わっていない、先天的でないもの、いわば、知識というアイテムを沢山持っていれば持っているほど一度きりの人生、より良いものになると思い始めたのだ。この例は現実世界の枠を超えている二次元の話なので一旦勉強という現実世界に戻る。勉強も考え方は同じで、世界は元々混沌としていて、人間は皆猿だった。しかし頭の良い人達が、言葉というアイテムを作り出し、電気というアイテムを作りだし……そして今の世界がある。

留学をする時、単語というアイテムを沢山持っている人の方が、同じ時間滞在していても現地の人と何倍も楽しめる。また、沢山の知恵を持ったAさんと、知恵というアイテムをほぼ持っていないBさんという二人がいるとする。その二人の前に、同じリンゴを置かれた時、Aさんは「青森、APPLE、林檎、白雪姫、万有引力、

ウィリアム・テル……。」など沢山思い浮かべて視野を広げることができるのに対して、アイテムが少ないBさんはリンゴを見て、「リンゴ」としか思わないと思う。

このように考えたら、勉強は自分の人生を自分で楽しくする一つの武器なんだ、と思う事が出来てきた。そう思い始めたおかげで、「今日もまた新しいアイテムが増えた！」と思いながら、コツコツ毎日勉強を体が勝手にするようになり、勉強が楽しくなっていた。

この世の中には、まだまだ私の知らないアイテムが沢山潜んでいる。一つでもアイテムを多く持って人生楽しくするために、これからももっと勉強をしようと思う。

今は知らない本当のこと

高三

自分にとって大切だったことに、失ってからそれと気づくことがある。人でも物でもことでも。失ってからでは遅い。分かってはいるつもりでも、過ごしている中で常に意識するのは難しい。

六月十三日、私の五年間のバレーボール部生活が終わった。幼い頃から運動が苦手な私が運動部に入るなんて、自分でも思っていなかった。父に運動部に入ることを勧められたことがきっかけで、いくつかの運動部の仮入に参加した。少しだけサッカーを習っていたことがあったため、サッカー部があれば即決していただろう。しっくりくる部活は特に無く、仲の良い友達が多くいるからという理由でバレーボール部を選んだ。サーブが入るようになった時や、私が上げたトスで点を決めた時、先輩と一緒に試合に出て頑張れた時は嬉しかった。しかし、やる気が出なかった時の部活は苦痛だった。辞めたいと何度も思ったが、辞めるほどの勇気もなかった。

そんな私が、高校二年生の時、部長、キャプテンに選ばれた。自分に任せてもらえたことは嬉しかった。クラス会長になったこともあり、その時は経験をいかしてどうにかなるだろうと思っていた。しかし、いざ五学年を、高校生を、チームをまとめなければいけなくなった時、今まで積み重ねてきた自信が一気に崩れた。人前に出て声を出すことが嫌いになった。怖くなった。これでいいのかな。これを言ったらみんなはどう思うのかな。不安でいっぱいだった。しかし、自分を部長として、キャプテンとして認めてもらいたかった。部活のトップとして過ごした一年間は、これまで行きたくないとしか考えていなかった私とは思えないくらい、毎日部活のことを考えた。コーチや先生、副部長、同輩、後輩に沢山支えてもらいながら、自信がないなりに、部長として、キ

ャプテンとしてどう行動すればより良い部活動ができるのか、常に考えていた。チームをまとめる立場の自分がしっかりしないといけないという思いは、私を前向きにさせた。

最初はあれだけ嫌だった部活にしっかりと向き合うことができた最後の一年間が終わり、引退の時を迎えた。頭の中の大半を占めていた「部活」がなくなった時、思っていた以上に寂しい気持ちになった。引退して初めて、自分の生活の中心にあって、大切であって、大好きなものであることに気が付いた。そして、六年間辞めずに続けることができた自信を手に入れた。

今年は沢山の別れがある。寂しくなってしまうのだろうと思っていても、実際の寂しさはその予想をずっと上回ってくることを、失ってから知ることになるだろう。高校一年生くらいの時から捜真を卒業したくないと考えている私は卒業したらどうなってしまうだろう。毎日友達や先生に会いたいと考えてしまうのだろうか。その気持ちが消えることはないだろう。時間が経てば落ち着くとは思っている。

時間というものは止まらずに進んでいく。終わってみたらあの時に戻りたいと思ってしまうことも、このままでいたいから時間が止まってほしいと思うことも、実際は叶わない。これから様々な別れが来てしまう。後悔のないように、一日一日を大切に生きたいと思う。コロナには、その大切さを教えてくれたということだけは感謝している。

子供大人コドモ

高三

最近、大人になんかなりたくないなぁと思う。

別に、夜中に、永遠に子供のままの少年と魔法の粉を持つ妖精がやってきてネバーランドに連れて行ってくれないかなぁなんてファンタジックなことを願っているわけではない。ピーター・パン・シンドローム？　シンデレラコンプレックス？　そうじゃない。感動しない大人になりたくないのだ。

大人になると感動しなくなる。世間で時々耳にする言葉である。感情の老化だろうか。それもある。しかし、一番の原因は『慣れ』であるとグーグル先生は言う。まさしく。ある映画を観て感動したとする。同じ映画を二度観ても最初と同じ感動を味わうことはできない。三、四度と繰り返し観てもさらに感動は薄まるだけである。これが、感動の慣れである。

夏休み、二泊三日で小学生のキャンプのボランティア

に参加した。普段、星空なんて見上げない。なぜって、光害のせいでほとんど星が見えないからである。キャンプ場の空は違った。一日目の夜、宝石を散りばめたような満天の星だった。星の瞬きが心地よかった。かなり感動した。地元では絶対に見ることができないから明日も見て帰ろうと思っていた。しかし私は二日目の夜、特に空は見なかった。三日目の退所式、ボランティア先の先生は言う。『大人になると、感動を忘れがちになってしまいます。好奇心を忘れないでいてください。』

はぁ。まさしく、私のことではないか。初日にあんなにも感動した星空に、二日目は全く関心を示さなかった。これが、慣れだ。ああ、慣れって怖い。

十八歳にして、このようにたった一日で感動を忘れてしまった。年を重ねるごとにもっともっと感動しなくなってしまうのだろうか。憂鬱だと思った。

しかし、身近なところに歳を重ねるにつれ感動する機会が増えていっている人がいた。祖父だ。祖父は認知症という事もあり、何でもかんでも新鮮らしく最近はやたらと色々なものに感動していた。なんというか、雑念が無くなり心が綺麗に浄化されていっている感じだ。

『老いて二度児になる』という言葉にある通り、人はある時期を境にもう一度子供に戻ると言われている。もちろん、全員がそうというわけでは無い。中年あたりをピークに人はだんだん衰えてゆく。成人、青年、少年、子供。見方を変えれば、若返っていると考えることができる。

大人になんかなりたくないと言ったけれど、もう一度子供時代を経験できるかもしれないと思えば、大人になるのも案外悪くないのかもしれない。むしろ、早く大人になって二回目の子供時代を楽しみたいとも思う。

ピーター・パン、もしアナタに会えたなら教えてあげる。大人になっても、もう一度子供に戻れることを。ネバーランドはここにもあるということを。

七月二十五日

高三

忘れもしない七月最後の日曜日。私は夏休みが始まってからは受験勉強を少しでも先に進めたい一心で一日中塾にこもっていた。そしてその日は突然やってきた。塾にいる時から体がだるく、翌日病院で夏風邪と診断されたがＰＣＲ検査を受けなければという気持ちに駆られた。結果が出るまでに症状はどんどん悪くなっていき、症状の重さと速さで「死ぬかもしれない」と生まれて初めて思った。

コロナの辛さは体の辛さだけではなかった。体の苦しさ以上に、友達や家族にうつしてしまっていたらという悔やんでも悔やみ切れない思いにさいなまれた。日本ではコロナの治療薬がなく、しかも若く基礎疾患のない私は入院することができず自宅療養以外選択肢がなかった。体が辛く苦しくても両親を呼ぶことができないのは本当にこたえた。そしてある日突然、解熱剤を飲むために口にしたメロンの風味が消え、大好きなメロンが甘いだけでおいしく感じなくなっていた。

部屋に来てくれる両親の恰好に変化が表れた。マスクが二重になり、その上にフェイスシールド、長袖、手には手袋、私が部屋で使ったものは全てビニール袋に密閉して部屋の外に出す。部屋の外では消毒スプレーの音が絶えず聞こえる。自分の部屋の外での生活はどうなっていたのだろう。そこまで考える余裕は私にはなかった。

高熱のため寒気がしたり汗がにじんだりの日々でシャワーを浴びたいと思った。ところが浴室で十分もしないうちに尋常でないくらい息苦しくなり、普通の生活が送れなくなってしまったことを実感した。

熱のアップダウンは続き、父がありとあらゆる知り合いに頼み、中国でコロナの治療薬の漢方を処方してもらい、日本に届けてもらうよう手配してくれた。しかし世の中はオリンピックありきで、薬の運搬も通関も通常より難しい状況下にあったそうだ。父の知り合いの人達は私がコロナに感染したことにとても驚き心配してくれた。武漢で発生し、当初多くの人々の命を失った経験と研究を経てできた治療薬を私は享受できた。私と家族の命を救ってくれた中医学の先生と父の知り合いには感謝してもしきれない。コロナの治療薬は中国に存在する。その薬を飲んでどのような経過をたどり、どんな症状が現れ、どんな後遺症が残るのかまで把握できている。さらに後遺症を残さないための漢方薬もある。

「コロナは中国から発生した」と非難の目を向ける人が少なからずいる。けれどもＧＯＴＯトラベルやオリンピックといった利権を優先させ、治療薬を調達せず、医療を素人任せにし、助かる命すら見捨てる現状がオリンピックの華やかな裏側にあることは非難に値しないのだろうか。

私は部屋でずっと泣いていた。熱が落ちついたと思えば、咳が出始め、肺が雑巾をしぼられるかのように痛んだ。そして母が私の部屋に来なくなった。ワクチン接種後間もない母を感染させないように父一人が私の部屋に入るようにしたからだ。どんなに苦しくても家族に迷惑をかけることを思うと呼ぶこともできない。朝を迎えることができないかもしれないと思いながら過ごす深夜、私はもしもの時のために家族や友達に手紙を書いた。世

の中にはさほど気をつけていない人がいくらでもいるのに、あんなに気をつけていた私がどうして感染してしまったのか、さらには私の大切な人まで犠牲になってしまう、その理不尽さに納得がいかなかった。それがどうしても辛かった。

今私は体調は良くなっているが、コロナが終わったとは言えない。変異株の脅威を考えると、まだ家の中でもマスクと消毒が欠かせない。家族への配慮が必要だからだ。食事を家族で一緒に摂ることもまだ先だ。夏休み中に計画していた勉強は全て台無しになった。失った時間は戻らない。割り切って気持ちを切り替える、という風には簡単にはいかない。悶々とした気持ちが私の中に横たわっている。

何者でもない私

高三

懐かしい景色。懐かしい仲間。モワッとした暑さの中に入り込む、少し涼しげで心地よい風が、まだ春先だったあの時とは違う感情に私を誘い込む。私はまたここに帰ってきたんだ。新しい仲間を連れて。少し新しい自分になって。

私は高二から、とあるプログラムに継続して出席している。半年前の春には、その主催者にお誘いを受け、様々な分野で世界の最前線を走っている社会人が集う合宿に、高校生特別招待枠で参加した。そこで出会った人たちに刺激を受け、私は他の高校生と共に、今夏この合宿の高校生版の開催を決めたのだ。ここでは、やりたいことを既に持っていたり形にしていたりする高校生と、前回同様に活躍している社会人が集う。参加者自身がホテル内外で様々なアクティビティを企画したり、対話したり、真面目なことも遊びも本気で楽しみながら、各々のやりたいことへの挑戦を加速させていく。今回私は、普段校外で一緒にオンライン上で活動している仲間を誘って、運営として参加した。

画面上だけの交流だった仲間と、その存在を確かめ合って初めての対面に喜び、少し緊張気味の「はじめまして」の仲間と挨拶を交わす。

半年前より一皮も二皮も剥けて成長した私が参加するこの一週間の合宿で何を思い感じるのか。私は何かを得て帰れるのか。自分の更なるステップアップを望みつつも、私はこの場を創る側だという意識の方が強く、周りを俯瞰して見ていた。

そして到着後すぐに始まる自己紹介プレゼン。全ては参加者の主体性に任される自由すぎる合宿の中で、唯一の参加必須であったこの時間が私はたまらなく苦痛だった。前回はこの時間を狙って外出し、サボったことさえある。この頃は人に言えるような大それた活動をしていなかったし、自分がひどく話下手だと思っていたからだ。

でも今回の私はあの頃とは違う。色々と活動を始めたので人に言えるような肩書きがいくつもあった。それに何を言うかを頭の中で何度もシミュレーションしたから準備は万全。もちろん、最高に上手くいった。プレゼン後、色々な同世代や大人に声をかけられ、自分のビジョンや活動を語った。さらに、経験豊富な大人の方々から様々なアドバイスももらい、わくわくが高まりやる気も全開。私の心も燃え上がっていた。その後も色々な人と語り合い、ワークショップでは沢山発言し、他にも観光やヒッチハイクをしたりと積極的に行動し、とても充実していた。周りからも「りなすごいね」「本当に高校生？」なんて言われたりして満更でもない気持ちだった。周りのすごい同世代と同じ土俵に立てたような気がして嬉しかったのだ。半年前の合宿では、なんだかすごい経歴や肩書きを持つ大人と同世代に圧倒され、何もない自分への焦りと緊張で隅っこで大人しく座っていた。今はそんな私はもういない。

しかし前回からの成長を感じられて嬉しい反面、私には拭えない違和感があった。私の中身は何も経歴や肩書きがなかったあの頃と全く変わっていないはずなのにもかかわらず、周りからの私の評価や見られ方が一八〇度変わったことだ。私はそれが怖かった。私自身は自分の活動がすごいとは思っていない。むしろもっと経験豊富で鋭い視点の周りを見て、自分の足りなさや不甲斐なさを日々実感している。加えて今までは私が誰かに対して憧れや尊敬の気持ちを抱き、すごいすごいと言っていた立場なのに、私も周りにすごいと言われるようになっている不思議な感覚だ。まるで自分が自分ではなくなっていくような感覚。活動など体はどんどん先に進んでいってしまうが、あまりの展開の速さに、やっていることや周りからの評価に心の整理が追いつかず、心はまるっと置いていかれているような気がする。

どんなにやっていることが変化しても、私は私のままだからかもしれない。緊張しいで慎重で、あまり自分からガツガツ前に出てリーダーシップを発揮するタイプではなく、自分に自信もない。だからこそ周りの声とのギャップで、自分が誰なのか分からなくなってしまう。

私は周りによって自分を位置付けし、肩書きや経歴に執着していたのかもしれない。

初めて自分の名刺を持った時。私の肩書きは、自分が設立した団体の代表だった。初めての私の肩書きらしい肩書き。私はそれにとても誇りを持っていた。しかし様々な活動をして、いくつかの肩書きを持つようになると私イコール団体の代表ではなく、私は様々な要素から構成されていた。「私」は一言で表せるようなものではなかった。

私は私に肩書きをつけて何者かになりたかったようだ。劣等感の軽減や、自分が誰なのかというはっきりした安心感を得るため、弱い自分を隠すため、そして周りに認めてもらうために。そのうち周りからだけでなく、自分でも、私を何者かにしてしまっていた。どうやら私は、何者かにならないと何かを成し遂げることができないと勘違いしていたらしい。私を私にしていなかったのは、他でもない私自身だった。

だから私は、「何者でもない自分を認めて、何者でもない自分を生きる覚悟」を決める。弱い自分もそのまま私として受け入れ、何者かにすがるのではなく、何者でもない私を生きる覚悟。周りと社会の声や評価に左右されて自分を何者かにしてしまわないように、ブレない確固たる自分の確立。そしていつ何時も私は私で、色々な自分がいて成り立っていることを忘れずに。

それが、もうすぐ高校生という肩書きがなくなる今の私に残された、学生生活最後の課題。

何者同士ではなく、人と人とが真っ直ぐ対話できる場を私は共創していきたい。みんな違ってみんな最高。

大人へ

高三

全く最近の若い子は我慢がなってないな。昔は疫病が流行ったせいで高校生らしい事は何もできなかったが、それでもがんばって学校に通ったもんだよ。

ふと、想像した四十年後の自分の姿。思わず浮かんだその様子に背筋が凍った。俺等の若い頃は私等の時代はと話す大人を見る度に「かっこわるいなあ」と呆れてきたが、今想像した自分は間違いなくそんな「大人」そのものではないか。このままではまずい。自分も隙自語

（隙あらば自分語り）老人になってしまう。なぜこう思ったか、きっかけは弟の学校の話を聞いたことだった。

弟の学校も修学旅行は延期され続けているらしい。それを可哀想だと嘆く母の横で思い浮かんだのは弟を可哀想だという気持ちでも、コロナへのうらみつらみでもなかった。「延期ならまだ可能性あるし、高校の分もあるんだから騒ぐようなことでもないじゃん。こっちは中止に……」ここまで考えてはっと我に返った。今までは「行けるといいね」と自然に言うことができていたはず。どうしてしまったんだ、自分。今は弟の話をしているのだから自分を出すのは違うだろう。動揺を流し込むためにコップ一杯の水を飲んでそそくさと自室に戻った。

この二年間、友人との会話の半分は何かしらコロナに関係のある話題だっただろう。去年の作文でも取りあげたが、やはり修学旅行などの行事がなくなったことは大きい。ついでに学生には我慢をさせておいて自分たちは旅行や飲み会に出かける大人もいかがなものか。会食を開く御上の方々は何を考えているのだろうか。ただでさえ大人に対して反発しがちなお年頃なのだ。ネタがあれば文句を垂れてしまうことに関しては見逃していただきたい。二年分の作文をコロナへの文句で済ませてしまったことも水に流していただきたい。

小六の卒アルに載せた文章はこれの六倍明るい内容だった。六年間の思い出を綴り、未来の自分へのメッセージで締めくくった作文。隣の席の友達とふざけ半分で書いた文章は今では立派な黒歴史となり、中一以来読み返していない。それが六年経った今はどうだろうか。あの時とは正反対の最悪な未来を想像してしまって最悪でしたといった報告をしている。なんともまあ情けないものだ。プリキュアに憧れ、妖怪ウォッチ零式を腕にはめ、ドラゴンボールを読みながら塾へ通っていたあの頃とは全く違う自分になってしまったのだろうか。

そうとも言い切れない。謎の怪物と戦い悪の組織をやっつけるヒーローにはなれないが、子供に夢を見せる大人にならなれる。それだってヒーローの仕事の一つだ。形が変わったとしても叶えられる夢はある。修学旅行に行きたかったのは皆で思い出を作りたかったからだ。親から離れて友達と遠出する、先生に内緒で夜更かしする、よく分からないお土産で荷物を重くして帰る。今となっては物語の中でしか見たことのない話になってしまったありふれた高校生活、全く同じとはいかずとも「思い出を作る」という本質を叶える事はできる。

もちろん青春への未練がない訳ではない。むしろ未練しかない。それでも数十年先の世の中でその時代の子供たちが大変な思いをしている時に、いや私たちの方が大変だったと主張をするのはあまりにも情けない。あれを

我慢した、これを我慢したと不幸自慢のように語るような大人にはなりたくない。（もちろん同級生と話す時は最高の皮肉と文句をつまみに酒を飲むつもりだが）自分たちはたくさん我慢を強いられた。しかしその経験は子供たちに我慢を強いていいという免罪符には決してならない。むしろそれを反面教師にして、彼らが自由にやりたいことをできるように動ける本当にかっこいい大人になろう。

「弟修学旅行延期嫉妬事件」発生から緊急で開いた一人反省会。考えはまとまった。これにて解散お疲れ様でした。

大雨の中の私

高三

雨が降っている。それもかなりの大嵐だ。ザーザーと落ちてくる雨は、傘を差している私を気にも留めぬように、まるで私を包んでいるかのように降りそそいでくる。冷たい冷たい雨が体全体に染み渡っていくのを感じた。

この十八年、毎年必ずと言っていいほど私には試練というものが訪れた。ただその「試練」に対して、もう無理だと感じたことは一度もなかった。部活や留学、習い事、結局どれも楽しかったのだ。そしてもう一つ一番大きな理由は人に無理だと言われても自分を心から信頼していたからなのだと思う。毎回、自分なら大丈夫でしょ精神で全てのことに耐えてきた。

だが今年の夏、私の自分への信頼をことごとく壊したのは受験という大きな壁だ。一生懸命勉強しても結果のでない成績、自分の誘惑に負けてしまう日、自分のバカさにあきれる日、周りと比べ続ける自分。自分が今まで自分自身に隠そうとしていた嫌な自分をたくさん見つけてしまったのだ。

受験という全ての事から何度も何度も逃げたくなった。それでも私は毎日勉強し続けた。勉強は孤独だ。頑張ってもすぐには成績に反映しない。どんなにあがいても私の成績は目標に届かないのである。自分の勉強法は合っているのか、本当に受かることが出来るのか、そんな不安が私を押しつぶそうとしてくるのだ。そんな時、毎回あの雨が降ってきた。雨は私の顔から次から次へと溢れ出して一時間ほど、降り続けていた。その雨は、未来の見えない私の不安の塊が形となったものであった。その涙で自分の弱さに気づいた。いつも自己肯定感の強い自分、自分が大好きな自分になれなくても、落ち込むことはないのだと自分に語りかけられた気がした。

自分を認めるというのは、案外簡単なことではないのだと思う。私は、ずっと自分のことを認めていたつもりだった。けれど壁にぶつかったとき、そうではなかったと気づかされた。そして弱い自分に気づいたけれど、結局あれから何度も泣いて落ち込んでいる。人はそんなに簡単な生き物ではないのだ。少しずつ成長し学んでいくのだ。そして勉強も少しずつ少しずつ伸びていくのかもしれない。一年後、自分がどうなっているのか今は全く想像することが出来ない。どんな結果であれ残り半年、時には大雨に打たれつつ、自分に後悔がないように突き進んで行こうと思う。

時間は進む

高三

ある日の塾の帰り、駅のエスカレーターを上がるとたくさんの人が雨宿りをしていた。ゲリラ豪雨だったため、自分も含め多くの人が戸惑っていた。幸いにも私は折り畳み傘を持っていたが、家族に迎えに来てほしいと電話をする人、雨がおさまるまでしばらくの間待つ人や覚悟を決めて必死に走る人など、周りは様々に対処していた。

この時、駅にいた人達に与えられた状況は同じである。各々異なる経験や持ち物、アイデアを使って行動した。これは、一人一人が与えられる時間についても同じである。

時間の過ごし方は自由であり、学校などに行き勉強をする、仕事をしてお金を得る、趣味を存分に楽しむ、家事をするなど多種多様だ。もちろん、何もしないという選択肢もある。何もしなければ自身は前進しないが、時間は止まることなく進んでいく。私達がどれほど止まってほしいと願っても、時間はその望みを聞いてなどくれない。

受験生である今、時間というものを強く意識させられている。時間は私達を置いて前を走り続けるのと同時に後ろからも追いかけて来ている。試験本番まであと〇〇日といったカウントダウン、その〇〇日の中にも毎週ある授業の予習や課題提出など、次々と期限が待ち構えている。マラソンでゴールした直後に、「次のゴールまで頑張ってください。」と言われて走らされているような気分になる。

ここまで、時間は走り、追うという動きのあるものであると述べたが、実際には精密に一定の速度で動いているのである。速さが変化すると感じるのは時間ではなく私たちの方が変化しているからだ。楽しい時間はすぐに過ぎるが退屈な時間はとても長い、というのは頻繁に耳にし、実感もする。何かに熱中した後、時計を見て時間の経過に驚いたなら、その時間を有効に過ごせたというサインにもなる。あっという間に時間が過ぎたと感じられるのは幸せなことだ。集中している間は時間の存在を忘れられる。それと共に達成感も得られる。

与えられる時間をどう使うかは結局、自分次第だ。それにしても、時間とは不思議なものである。しかし、一つ明らかなことはこうして考えている間でも時間は進んでいるということだ。

五年前の私へ

高三

中一の私が想像していた五年後の自分。そして現在の自分。これはきっとかなり違うと思う。いい意味でも悪い意味でも。この作文を機に五年前の自分を思い出そうと思う。作文は好きではないがこういうことに利用するのなら悪くない。

中学一年生。その頃の私はゲジゲジ眉毛、長いスカート、今より何倍も細いし、写真を撮る時にｓｎｏｗのアプリで加工しないだなんて考えられなかった。そして高三の先輩は本当にきらきら輝いているように見えた。なんて華があるんだと心の底から思った。好きな先輩がいたわけでもなかったが高校三年生全体のオーラに圧倒され憧れを抱いたことは確かだ。部活でも、高校三年生の先輩と話すなんて畏れ多い（単純に怖かっただけかもしれないが）と感じていた。とにかく、中学一年生の私にとって憧れの存在であったのだ。

そして今もう高三だ。気が付いたらもう五年も経っているのだから不思議だ。中学一年生の一年間は長く感じたが、そこからここまでが本当にあっという間にすぎ

た。時の流れって恐ろしい。私は本当に高三なのだろうかと時々疑問に思う。そう思うのはきっと、自分が思い描いていた高校三年生と今の自分が違いすぎるからだ。あの、五年前に見た高校三年生のようになっているはずだった。そのはずだったのになれていないのはなぜなのか。コロナのせいか、何なのか。

思えば理想と違うのはそれだけではない。もっと沢山思い出を作る予定だった。これに関してはもう世界中の人がそうなのだからしょうがないと思いつつ、やっぱり修学旅行行きたかったとか合唱コンしたかったとか思ってしまう。そんな気持ちは忘れるんだ、自分。

そして最近もう一つ思うことは捜真大好きだということ。中一の頃は好きではなかったこの制服ですら今は大好きだ。五年前の私にこれを伝えても理解してもらえないだろうし、今の中学生に伝えても同じだと思う。けれど高校三年生になったらきっとこの気持ちも理解してもらえるはずだ。それから、捜真に入ったおかげで大好きで大切な友達に沢山出会えた。多分捜真にいなかったらこんな素敵な友達に出会っていないと思う。あぁ、やっぱりみんなのことが大好きだ。この作文を書きながら改めて思う。

チャペルに入る瞬間、静かな図書館。誰もいない廊下、教室。言葉では伝えにくいが友達といる時や賑やかな時には感じられない何かを感じたりする。言葉にしたいのにできないのが焦ったい。安心感というか、そこの空気を目一杯、思いっきり吸ってゆっくりと吐きたい感じ。こんな説明で理解してくれる人はほとんどいないと思うが誰か一人くらいは理解してくれたら嬉しい。今はまだ丸々坂を登ることを面倒くさいと感じているがきっと一カ月も経ったら丸々坂でさえも愛おしく感じるのだろうなと思う。とにかく捜真が大好きだ。

こういう気持ちになるというのが高三になるということなのだろうか。この作文を書いている間に過ぎていく時間も高三の終わりへと近づいている時間だ。残り半年もない高三生活。学校に行くのは残り三カ月。大学生になっても、きっとおばあちゃんになっても捜真が大好きだ。五年前にした私の選択は間違っていなかったよ、と当時の私に伝えたい。五年前の自分、ありがとう。

十秒ジャンプ

高三

地面をけって高く跳ぶ。むやみに鳴き続ける蝉の声を聞きながら、十秒間リズムよく跳び続ける。庭にある桜の木の隙間から見える太陽と引きあい、反発しあう感覚が癖になる。受験とか、コロナとか暗いニュースから解放されて自由になれる。高校三年生の夏休み、私のストレス解消方法は十秒ジャンプだ。

十秒ジャンプを始めたのは、小学校五・六年生の時、たまたま見ていたドラマがきっかけだ。ストレスとは無縁の年齢だったが、友達とドラマの話をしながら跳びはねると不思議と笑顔になれた。

習い事の演奏会本番前、よく成功を祈ってジャンプした。十秒間だけなのに、緊張がほぐれて自信を持てた。友達のインスタ映えを狙った投稿にもジャンプ写真はあふれている。海でディズニーで学校で。青い空と手を伸ばしてジャンプする女子高生はいかにも青春を思わせる。ジャンプしながら、豪快に笑って、女子トークを繰り広げる楽しいワンシーンが浮かんでくる。ジャンプすることで、後退しそうになる自分を解放して、なんでも飛び越えていけるような気持ちになるのかもしれない。

勉強は一歩一歩の積み重ねだ。単語と文法が分からないと、英語の長文は読めないし、数学だって、公式がわからないと基本の問題すら手が付けられない。基本が大事だと分かってはいるけれど、毎日コツコツ進めても、参考書一冊なかなか一周できないし、やっと一周しても最初のページに戻ると、まったく覚えていなくて情けなくなる。こんな感じで受験に間にあうのか。勉強の仕方が悪いのか。大学生になれるのだろうか。色々考えているとめんどうくさくなって一歩一歩なんて言わずにすぐにでもジャンプしたいと思えてくる。学校で配られた漢文の「基礎からのジャンプアップノート」なんていう魅力的なネーミングのテキストにひかれる。結局はジャンプアップを目指して、コツコツとテキストを進めることになるのだが（笑）。でも実際、今まで解けなかった問題が解けた時ちょっとだけ幸せな気持ちになれる。やっぱり勉強はそういうちょっとした幸せを、一歩一歩積み重ねていくことで、いつかジャンプアップできるのだと、信じるしかないのだろう。

だから、勉強は一歩一歩、疲れたら休憩して家の庭で十秒ジャンプ。このバランスが私にとって丁度いい。

今日は秋の空気が感じられる庭に出て、いつもより高くジャンプした。風に揺れてなびく葉の音が心地いい。

力強く着地して、目の前の桜の木を見上げた。

作文文化

高三

小学校から中学、高校まで続けてきた作文を書く文化をこれで締め括ると思うと、清々しくもあり、名残惜しくもある。小学生の頃はテーマが与えられながらも自由に書くということに慣れずに原稿用紙をクシャクシャにしながらその宿題に奮闘していた。中学生の頃は集団の中で個性をむやみに強調しすぎるあまりに主旨のよく分からない文章を書いて先生を困惑させていた。今見返してみると自分の愚かさに赤面する。高校生になってからは小論文と違い、少しユーモアを交えながら書く楽しさに誘われるようにペンを進めている。

こうして振り返ると十二年間の集大成となる作文がこの様で良いのだろうかと少し戸惑う。しかし、私たちは卒業してしまえばもう「作文」を書くことができない。仮に書いたとしても、大人が書くエッセーのようなものに過ぎない。よく先生が「今しか書けないことを書くのが作文の醍醐味だ。」と言っていたが、最後の作文となると、「今しか」という条件に合致するようなテーマが決まらない。だからその「作文」について作文を書くことにした。

まず作文を書く時、語彙も多いわけではないが、その限られた言葉の貯金で伝えるのも、それをいかに繋げていくかを考えるのも迷路のように遠回りをする楽しさがある。何を書けば良いのかを思い付かない時に普段考えないようなテーマを頭の中で模索していく作業でも、非日常的な思考を巡っていく感じが嫌いではなかった。

言葉は大抵、場面によって使い分けられていると思う。手紙の言葉、論文の言葉、話し言葉などに区分されるが作文言葉はない。自由な言葉遊びをしているようだが、他の人の批評に気を取られ、かえって自制してしまっていたと後悔している。例えば「楽しい」のようなありきたりな表現は使わない方が良いとされるが、ありきたりだからこそ活きてくる言葉もある。例えば料理をすることが私の最近の楽しみである。その中で特に楽しさをかき立てられるのが卵をとく場面である。完成品のクオリティーは別として、女子力皆無な私でさえもパティシエのように感じられる。その瞬間に脳裏にうかぶのは「楽しい」という一言なのだ。ありきたりな言葉こそ、共有できる感覚があると思う。

そして出来上がった作文を見て、私は必ず驚く。自分自身で書いた文章に思いがけない「自分」が映し出され

ていることに意外性を感じる。これは他の人の作文を見る時も同様である。作文を読む度に人物データが更新されていくように思える。時々作文コンクールの入賞作品を眺めるのだが、捜真の文集に載っている作文の方が独創的であると思う。何より捜真生らしさが滲み出ている。同じ中高生であるはずだが、一味違うと感じるのも不思議だ。「〇〇坂」や「愛」を代表とする捜真味の濃い描写は数々あるが、それは捜真文化に長年無意識に浸ってきたおかげと言える。逆に言えば、捜真文化は作文を読むことによっても私の中に根付いたのかもしれない。他校の人は「愛」という言葉を恥ずかしさで包んでしまっているかもしれない。しかし、捜真生は作文で「愛」を躊躇なく書き綴る所が世の高校生らしくなくて良い。

だからこそ作文は楽しい。老後、この作文を読み返す時、作文を認めていたときのこの高揚感を思い出し、少し笑みを浮かべていそうだ。ここまでかなり脈絡無しに言いたいことを散りばめてしまったが、「楽しかった」ので、これで「作文」を終わりにします。

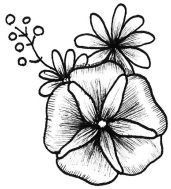
描く

高三

全身に電流が流れたような、そんな感じだった。この楽しさも苦しさも高揚感も、全てが私を強く導く。筆はキャンバスに吸い寄せられ、色の層が画面全体を支配する。重ねて、重ねて、削って、重ねる。一度描き始めたら集中の世界から抜け出すことは許されない。描いて描いて、描きまくれ。

将来と本気で向き合い始めて気が付いたこと。それは「楽しいだけではない」ということだった。好きなことと向き合うことは、好きだからこその苦しみも伴う。それを初めて知った。何か一つを乗りこえては、また新しい壁にぶつかる。そのくり返しだ。絵を描くと決意したばかりのあの頃とは全く違う感覚の中にいる。絵を描いて、新しい知識を得れば得る程、自分自身が分からなくなる。学んだことにより生まれてしまった表現の不自由さ。しかし、その不自由さがなければ今の「私」は存在していなかったのかもしれない。学んで、描いてをくり返すうちに、ただ単に絵を描くのが好きだった自分を忘れていってしまう。それでも「絵が好きな自分」を失い

たくはないと、自分にとって確かな表現を捜し続ける。
もがいて、もがいて、上も下も分からないまま進み続けたある時、予備校の先生がたった一言「ハイトーン使えるね」と言った。その瞬間までハイトーンを使うことが得意だということに全く気が付いていなかった。ただ好きな色を、美しいと感じる色を追うように描いているだけだった。しかし、その絵にはすでに「私の表現」が当たり前のように存在していた。ぶわっと鳥肌が立った。こんなに近くに答えがあったなんて知らなかった。閉ざされていた視界がいっきに開けたような感覚だった。「ほんの少しのことで絵はガラリと変わるんだよ」予備校の先生はよくそう言っていた。聞いていたのに、理解できていなかった言葉。その言葉の意味がようやく分かった。
悩まなくて良い。考えすぎる必要はないのだ。私の表現は、いつでも、私自身の中にある。近すぎて気が付いていないだけで、いつも持っているのだ。しかし、「悩むな」と言われても、きっとまた悩んでしまうのだろう。その時は、それで良い。無駄なことなんて何一つない。一生懸命に向き合っていれば、必ず応えてくれる。誰かが助けてくれる。そう実感した。ただひたすらに、描き続ける。それが今の私にできる最善のことだ。好きな色で、好きな構図で、好きな描き方で、全力で絵と向き合う。それが大切なのだ。
この感情を、何があっても成し遂げたいと思える程の情熱を、目の前の絵に込めて、私は挑む。自分の表現の可能性に。無意識のうちに根づいている固定観念を打ち砕き、新しい世界を見るその時まで、私は描き続ける。



第三回エーカック記念作文コンクール　テーマ「手」

〈作文・エッセイ部門〉佳作

好きじゃないけど

中二

好きってなんだろう。楽しい時間と苦しい時間の割合だろうか。もしそれが正しいなら、私は本当に、「絵が好きだから」描き続けているのだろうか。

一番最初の記憶。母が私の隣でバイオリンを弾いていた。何歳だっただろう。まだ日本語もおぼつかない、泣いてばかりの頃の記憶。力加減がわからず、何本クレヨンを折ったか数えきれない。ただただ、楽しかった。好きだった。自分が上手いか下手かも知らず、必死で色だけ重ね続ける。クレヨンと画用紙が付いては離れ、「ちゃっ、ちゃっ」と油っぽい音を立て、それに耳を傾けながらまた色を重ねる。

そんな可愛らしいクレヨンの音は、徐々に鉛筆の鈍い音に変化した。

その頃になると、もはや絵を描くのは習慣と化していた。食事と変わらないくらい生活に溶け込んだ。朝目覚め、朝食を取り、お昼になるまで描き続け、昼食をかき込み、ダラダラしてから、夕食の時間までまた鉛筆を手に取る。

そんな具合で休日に絵を描き、暇さえあれば学校でも描く。触れると指を怪我してしまいそうなほどまでに尖らせた鉛筆が、気を抜けば木の部分が紙にすれて今度は紙が傷ついてしまいそうなほど先端がまるーくなったら、ちょっとうれしい。

しかし人は変化する。歳が上がるにつれて上手くなりたいと思う欲が強くなっていった。――いや、欲と言うよりは「上手くなることに縛られる」の方が近いのかもしれない。「上手くなりたい」から「上手くならなくちゃいけない」に姿を変えてしまったのだ。その感情は決してプラスのものとは言えない。それは私の首に縛りつき離れぬ細い細い縄だった。

頑張れば切る事は出来た。しかし私は長い間、頑なに切ってこなかった。「勿体なさ」があったからである。ここまでやってきたのに。これからなのに。ここで諦めるなんて、自分が許せなかった。

いつものように朝目覚め、朝食を取り、お昼になるまで描き続け……ようと思った。鉛筆を手に取る。首がしめつけられる。数日前まであんなに軽かった手が、鉛のように重い。習慣になってしまったことは、簡単には離

れられないはずだった。なのに絵は私の元から逃げていった。

もう帰ってくることはないかもしれない。「勿体ない」と思って切らなかった縄が、今になって裏目に出た。これでは意味がない。残された私の身体は空っぽで、胴体だけが異様に軽い。

そこからは絵なんて忘れた。何も描かない。通学用のリュックの中でしばらく触れられていないスケッチブックに埃がつもり、寂しそうに縮こまる。しかしそんなこと、私は知らない。下がっていく画力も、知識も、目標も。すべてを見て見ぬふりし続けた。

そんな時、友人の誘いで美術館を訪れた。「見るだけなら」正直言ってそんな感じだ。見てはみたけどあまり刺さらなかった。辛くなることもない。

順番に見ていく。パッとしなくて受け流す。時々、「わぁ細かい」とか、ぼんやり「すごいなー」とか脳内で駄弁るうちに最後の一点。

好きだった。楽しかった。見ているだけなのに。その時、見つけた。私はなぜ絵を描くのかを。好きではなく、楽しい身体。辛い時間の方がずっと長い。好きと言うには無理がある。でも楽しい。

スケッチブックに積もった埃を払った。

手が軽い。縄は、もう無かった。

佳作

動物に手はあるか

高一

私はリクガメを飼っている。日中は部屋を自由に歩き回れるようにしている。餌をあげようとするとすぐに気づいて、こちらに向かいトコトコと走って来て食べだす。大好きなオクラをあげると手で器用に押さえて食べる。右手を使うことが多い。私が「おいで」と言うと歩いて来て、私にタッチする。その時も右手から歩き出す。だからうちの子は右利きだと思う。私の通学路には川がある。毎日その川沿いを歩いていると、岩の上で日光浴をしているたくさんのミシシッピアカミミガメやクサガメを見かける。皆、気持ちよさそうに首と手足をだらんとさせている。私にとってカメの前肢は手だ。うちの子でなく野生や野良ガメでも同じだ。しかし、散歩をしている犬や野良猫を見ても、彼らの前肢が手であると感じることはない。それを犬や猫を飼っている人に言うと驚かれる。「犬はお手をするではないか」、「うちの猫はＣＩＡＯちゅ～るを両手で持って可愛らしく食べている」などと反論される。それでも私には犬や猫の前肢を

「手」と思う感覚がない。もし犬猫を飼っていたら、私だって彼らの前肢を手と認識できるようになっていただろう。辞書で「手」と調べると、「人やサルの胴体上部から左右に分かれ伸びている部分」と書かれている。動物の前肢を手と感じるのは、自分自身がその動物とどれだけコミュニケーションをとっているかによるのではないか。触れ合う機会が多い動物を人は擬人化する。そして、鳴き声は話し言葉になり、前肢は手となる。言葉と手、どちらもコミュニケーションに必要不可欠なツールである。馴染みのない動物の発する音は鳴き声で前肢はただの足だ。親しい動物とは人間のようにコミュニケーションを交わせる気がする。

新型コロナウィルスが流行している間に、叔母が二人の子を出産した。緊急事態宣言が解除されて、やっと零歳と一歳の従妹たちに会うことができた。零歳の子の手は、まだ何も使えないのに、私が人差し指を近づけたらぎゅーっと握ってきた。握られると何とも言えない気持ちになり強いパワーを感じた。一歳の子は手をつないできた。一年経つと人間は進化すると実感した。他にも従妹がいる。四歳の子は折り紙を折ってくれた。七歳の子とは一緒にあやとりをした。子供は成長とともに触れ合い方が変化してくる。どの年齢の子供でも手はコミュニケーションの大事な道具だ。特に言葉が話せない赤ちゃんとの交流には必須である。

手は他者とつながる手段だけではなく、自分自身の心ともつながっている。祈るとき、人は手を組んだり合わせたりする。アメリカ大統領は就任式で聖書に手を置いて宣誓する。手には精神的な力がある。昨年から私たちは人と手を触れ合わせる機会が減っている。手は心をつなぐ重要な道具だ。だからこそ、手を堂々とつなぎあえる世の中に戻ってほしいと願う。

〈創作部門〉優秀賞

ほくろ

高二

真知子は走っていた。訳もわからず走っていた。肺が痛い。走りながら、息を吸っているのか吐いているのかもわからなかった。悲しい。怖い。苦しい。目が痛い。耳も痛い。鼻の奥がつんとする。街の景色がどんどん後ろへと変わってゆく。とにかくあそこから少しでも遠い場所へ行きたくて、上がる息も、汚れるローファーも関係なく走った。

どれくらい走ったのか、真知子の体力が限界になった時、何かに躓いた拍子に体のバランスが崩れ、そのまま転ぶ。蹲り下を向いた先に、真っ黒なワンピースが見える。新しいはずの、裾が汚れたワンピース。おばあちゃんの死の知らせを聞いたお母さんが、慌てて買ったものだった。

おばあちゃんが亡くなったと知らせを受けたのは三日前だった。真知子が幼稚園生の頃、お母さんは離婚したから、おばあちゃんは真知子にとって第二の親みたいな存在だった。

知らせを受けた時、真知子は宿題をしていて、お母さんは夜ご飯の支度をしていた。炒め物をしていたから、突然鳴った電話の音にすぐ気づかず、真知子が「電話鳴ってるよ」と教えてあげたのだ。「はいはい」と言いながら電話に出たお母さんは最初、よそ行きの高い声だった。その声がだんだん固いものに変わっていって、電話を切った時の声は小さく、震えていた。

受話器を持ったまま立ち尽くしているお母さんの、常にない雰囲気に怯えながら、でも何があったのか知りたい気持ちのまま、「どうしたの？」と声をかけると、しばらくして驚くほど無機質な声で、「おばあちゃん、事故で亡くなったって」と言う返事が返ってきたのだ。

亡くなったって……亡くなったって……お母さんの声がぼあんぼあんと真知子の頭の中で響く。亡くなったって、おばあちゃん、亡くなったって……信じられなかった。何をみているのかもわからなくなって、気づいたら自分の手を、瞬きもせずじっと見つめていた。

視界に入る、生まれつき右手小指の付け根にある、大きなほくろ。おばあちゃんの手にも同じ場所にほくろがあった。真知子が小さい頃、おばあちゃんが、真知子のほくろはおばあちゃんの血なんだと教えてくれたのを思

い出す。

「でも真知子のほくろはちょっと小さいね」

自分の手を見つめながら答える

「真知子の手はまだ小さいからねえ。大きくなって手が成長したら、ほくろもおっきくなるよ」

「おばあちゃんのほくろも生まれつき？」

「そうねえ。じゃないとそんな場所にできないでしょ」

「じゃあ、おばあちゃんのほくろは七一歳、真知子のほくろは五歳だね」

そう言うと、おばあちゃんは心底嬉しそうに笑って、そうだねえ、そうだねえ……と答えた。いつもはハキハキ喋るおばあちゃんの、噛み締めるような返事と笑顔は、今でも鮮明に思い出せる。

そんなところにほくろがあって嫌じゃないの？って友達に聞かれるけど、真知子はむしろ嬉しかった。おばあちゃんとおそろい。会った時、一緒だねって笑い合った。この前も百歳まで生きるって笑っていた。本当に百歳まで生きられそうな、力強い笑顔だったのに。

お葬式までの三日間、真知子はあまり覚えていない。お母さんは始終慌ただしそうにしていて、いろんな人に電話をしていた。当日、黒いワンピースを渡されて、これに着替えて三十分後に家を出る、と言われる。

「これ、着ていくの？」

「そう。喪服っていうの。お葬式には黒い服を着る決まりなのよ」

忙しそうなお母さんは、そう言って下の階に行ってしまう。真知子は「喪服」を持ったまま、一人部屋に佇んでいた。なんで。おばあちゃんは黒なんか好きじゃなかったのに、なんで。

葬儀場は真知子とおんなじような服を着た人たちがたくさんいた。泣いてる人、話している人、いろんな人がいたけど、なんだか怖くて、ワンピースの裾をぎゅっと握り、お母さんのそばに寄る。ぼんやり、真知子が大好きだったおばあちゃんを、同じように好きだった人たちが集まっているのかな、と思う。ワンピースの裾を握る力が強くなる。

前を向けば花に囲まれて笑っているおばあちゃんの写真があった。でも真知子にはその笑顔が、なんだか違う人に見えて、すぐに別の場所を見る。じくじくとお腹から胸の方にドロドロとしたものが流れているような気分だった。どこを見ても嫌な感じは止まらなくて、逃げるように俯いた。ざわざわ、ざわざわ。人の声がどんどん

大きくなっている。ざわざわ、ざわざわ。真知子を囲むように大きくなっていくようだ。

しばらくして、お母さんの「始まるから座りなさい」という声にぱっと顔を上げる。体の力が一瞬抜けるのを感じた。真知子はずっと裾を掴んだままだったのだと気づく。力を抜いた手は指先まで真っ白で、掴んでいた裾はしわくちゃになっていた。お母さんは忙しそうに誰かと話している。

俯いて、視界に入る、右手のほくろ。撫でながら思い出す、おばあちゃんのシワシワな手。硬い皮膚と、笑った顔。

お葬式では、死んだ人の体は思い出の物と一緒に焼くと聞いたことがある。あの笑顔も、ほくろも焼かれるのだろうか。シワシワな手と一緒に。もう一度振り返って見る、花に囲まれたおばあちゃんの写真。突然、お腹から何かが一気に迫り上がって、胸がじくっとした。その時、真知子は何かを振り切るように、葬儀場から全速力で駆け出したのだ。

転んだ拍子に擦った両手のひらはヒリヒリ痛い。膝から血が出ている。訳もわからず走ってしまったから、ここがどこかもわからなかった。今頃騒ぎになっているのが想像つく。お母さんは探しているだろう。でも、膝が痛くても、手が痛くても、ここがどこかわからなくても、あの葬儀場には戻りたくなかった。

でも、このままだと日が暮れてしまう。どうすることもできなくて、しばらくとぼとぼ歩いていると、不意に後ろから声がした。

「君、大丈夫？」

振り返ると高校生くらいの女の子が立っている。

「怪我してるじゃん。どうしたの？」

「あの、ここどこかわからなくて……」

「え、まじ？お母さんは？」

首を振る。

「とりあえず、そこに交番あるから行こっか。すぐそこだよ。うち、神田晴美。君は？」

「小野田真知子です」

「真知子ちゃんね。了解。そこで手当てもしてもらおうね。大丈夫、すぐお母さんにも会えるって！」

そう力強く笑った神田さんの笑顔が、おばあちゃんに似てるな、とぼんやり思った。神田さんが手を差し伸べてくれて、二人で手を繋ぎながらゆっくり歩き出す。

本当に歩いてすぐのところに交番はあった。小さい交番だけど、中には若い警察のお兄さんが一人いた。神田さんが事情を説明してくれて、お兄さんにもらった救急

セットで怪我の手当てもしてくれる。
一通り手当てが終わったところで、お兄さんが質問を始める。質問をしながら、真知子の通っている学校、住所などを何かの紙に書いている。
「お母さんの電話番号は分かるかな？」
「……です」
お兄さんはメモをした後、奥の部屋に入って行く。しばらくして話し声が聞こえてきた。お母さんと話しているのだろうか。怒っているだろうな、心配もかけた。どうしよう、どうしよう。
しばらく話し声が続いた後、お兄さんが、お母さんと少しお話してね、と言って電話を真知子に渡した。
恐る恐る受話器を耳につけて喋る
「お、お母さん？　私あの……」
電話口からお母さんの大きく息をつく音が聞こえる
――やっぱり怒っているんだ
「ごめんなさい、お母さん」
反応がない。不安が大きくなる。どうしよう。
しばらくしてからお母さんの吐き出すような声が聞こえる
「……良かった、本当に良かった……」
受話器から聞こえてきた声は震えていて、怒っている訳ではなかったのだと知る。でも何を言えばいいのかわからなくて、押し黙っていると、お母さんがゆっくり話し始めた。
「真知子、謝るのはお母さんのほうよ。ごめんね、怖くなっちゃったのよね。お母さん、ちゃんと真知子に話さずにお葬式に連れて行っちゃって、ごめんなさい。でも、真知子が側にいてくれてお母さんはとっても救われたわ。ありがとう。真知子がいるから、お母さんは怖くても大丈夫って思えているの。……真知子、今は苦しいかもしれないけど、一緒に頑張ろう。二人で頑張っていこう。おばあちゃんも、お母さんも真知子が大好きよ。おばあちゃんはずっと真知子が大好きよ。それは亡くなっても変わらないわ」
うん、うん、と相槌を打ちながら、ぼたぼたと涙がこぼれ落ちる。大好き。真知子もおばあちゃんが大好きだ。それは亡くなっても変わらない。でも、喪服を着て立った葬儀場は、おばあちゃんをどこかに置いていくみたいだった。人の声が、黒い服が、写真を囲む花が、そしてあそこに立った真知子が、どこか遠くに、置いていくみたいだった。
「真知子、お葬式戻りたい？　嫌なら学校に連絡してあるから、図書館で待っていてもいいのよ」
真知子はここ三日間のお母さんの姿を思い浮かべた。ずっと忙しそうにしていたお母さん。そうだ、お母さん

にとっておばあちゃんは母親だった。悲しくないはずがない。それでも、お母さんは真知子がいるから大丈夫なのだと言った。でも、今真知子が行かなければ、お母さんはあの葬儀場で一人なのだ。

「ううん、真知子も行く。お葬式に戻る。お母さん、心配かけてごめんなさい」

「うん。分かった。じゃあ、迎えに行くね」

電話を切って振り返ると、神田さんとお兄さんが笑って、良かったねと言ってくれる。

胸にあったじくじくはもう消えていた。

少し汚れた黒いワンピースで立った葬儀場は、さっきと変わらず、おばあちゃんに別れを言うための場所だった。でも、花に囲まれた写真の中には、確かにおばあちゃんの笑顔が写っている。そして、それを見るお母さんと繋いだ真知子の右手には、大きなほくろがあった。ずっとずっとあった……。

近年、学校をあげて取り組んでいる「言葉にフォーカスした教育」の一環として、二〇一九年度より、校内コンクールを開始しました。第三回コンクールのテーマは「手」です。今年度は初めて創作部門への応募が作文・エッセイ部門への応募を上回りました。審査委員長の中山校長先生と国語科教員全員による選考・協議の結果、応募総数十八点の中から、作文・エッセイ部門佳作二点、創作部門優秀作一点を決定し、三学期の終業式で表彰および副賞の贈呈を行いました。

次年度も多くの力作の応募を期待しています。

外部コンクール入賞　おめでとうございます

第三十二回　伊藤園「おーいお茶」新俳句大賞（二〇二一年二月応募、七月結果発表）

佳作　中2

「バスを待つ猫背に冬の風刺さる」

2021年度　国語科年間行事

5月 14日（金）	『文集』46号発刊
6月 26日（土）	有志　漢字検定①
10月 23日（土）	有志　漢字検定②
12月 3日（金）	第３回エーカック記念作文コンクール締切 テーマ「手」
1月 14日（木）	中１　漢字検定
2月 18日（金）	高一　一日校外研修（博物館見学含む）
2月 24日（木）	中学部　古典芸能鑑賞　文楽「伊達娘恋緋鹿子（だてむすめこいのひがのこ）」
2月	中２　文章検定（授業内実施）

編集後記

文集四十七号をお届けします。

二〇二一年度も新型コロナウイルス感染予防のため、延期・中止・変更された学校行事がいくつもありました。そのような状況下での十代の感性や考えが表現されています。ご感想をお聞かせいただければ幸いです。

〈題　字〉沢野　三郎（旧教師）
〈カット〉　　（高三）

文集　第四十七号

二〇二二年五月　印刷
二〇二二年五月　発行

発行者　捜真女学校中学部・高等学部国語科
編集者　捜真女学校中学部・高等学部国語科
発行所　捜　真　学　院
横浜市神奈川区中丸八
電　話　〇四五(四九一)三六八六番

印刷所　株式会社工友会印刷所
東京都目黒区自由が丘一―三―九
電　話　〇三(三七一七)〇一〇三